

平成 19 年度

現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)報告書

～教育実践力の育成と学校・地域の活性化～

三重大学教育学部

はじめに

平成 18 年度の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に、三重大学の「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」をテーマとする取組が採択され、平成 18 年度には、一身田校区連絡協議会を組織し、取組全体を推進するための基盤を整備するとともに、主として一身田中学校との連携・協力を進めてきた。

平成 19 年度には、その基盤の上に立って、一身田中学校だけではなく、白塚幼稚園、白塚小学校、栗真小学校、一身田小学校すべてにおいて、現代 GP の取組を全面展開することができた。本報告書は、こうした平成 19 年度を取組内容を取りまとめたものである。

教員養成を主目的とする三重大学教育学部では、学生に教育実践力の基礎を身につけさせるための授業科目として、平成 18 年度から「教育実地研究」を新設し、三重県下の諸学校のご協力をいただきながら、現場における実践を通じた学びを推進する方向がとられているが、本取組はその一環として、教育学部に隣接する一身田中学校区の 5 校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）と連携・協力して、学生に対する教育実践力の基礎の涵養を目的とする諸事業を推進しようとするものである。

平成 19 年度には、理科教育講座・家政教育講座・保健体育講座・音楽教育講座・幼児教育講座・数学教育講座の教員及び学生・院生が一身田中学校区 5 校園の教員、幼児・児童・生徒たちと協働しながら、理科実験指導、出前授業、理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖&調理実習）の実施、コラボ音楽祭の開催、親子ふれあい活動、キャンプファイヤー時に楽しめるゲーム指導、未就園保育の取組、音楽物語の上演、お弁当作りの実施、牛乳を活用した調理実習、算数・数学の学力向上のための教育アシスタント活動、授業づくり研究会の開催など、多様な取組を推進し、文字通り、学生の教育実践力の涵養と学校の活性化に寄与することができた。

また、平成 19 年度も、地域の活性化のために、2 期にわたって一身田校区カルチャー・スクールを開催した。2 期 6 回におよんだカルチャー・スクールは、教育学部の教員等を講師として、年金問題、消費者問題、環境問題、介護問題、子育て問題などをテーマとして開催され、好評を博したものの、参加者数に伸び悩みが見られるという課題も残した。

さらに、平成 20 年 2 月 27 日には、平成 19 年度を取組を総括するとともに、次年度を取組を展望するための、「第 2 回 フォーラム in 一身田」を開催したところ、約 140 名の参加者があり、盛会のうちに終了することができた。第 2 回フォーラムでは、新たに「ポスターセッション&学生の体験発表」を企画・実施し、学生の直接的な参加も実現することができた。関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

最後になったが、本報告書の作成にあたって、諸資料の提供、原稿の執筆などご協力いただいた諸氏に感謝申し上げます。

三重大学教育学部・一身田校区連携推進委員会

平成 19 年度 現代 GP 報告書 目次

はじめに

[1] 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)について	1
(1) 全体的な取組の概要	
(2) 平成 19 年度申請書	
[2] 平成 19 年度の取組(1)	11
(1) 一身田校区連絡協議会の開催	
(2) 一身田校区カルチャー・スクールの開催	
(3) 一身田中学校におけるキャリア教育の取組	
[3] 平成 19 年度の取組(2)	35
(1) 理科教育講座における取組	
(2) 家政教育講座における取組	
(3) 保健体育講座における取組	
(4) 音楽教育講座における取組	
(5) 幼児教育講座における取組	
(6) 数学教育講座における取組	
[4] 公開活動	83
(1) 現代 GP のホームページ	
(2) 「第 2 回 フォーラム in 一身田」の開催	
[5] 現代 GP の運営組織及び活動日誌	97
(1) 現代 GP の運営組織	
(2) 現代 GP の活動日誌	
[6] 資料	103
(1) 「第 2 回 フォーラム in 一身田」の資料集	
(2) 「第 2 回 フォーラム in 一身田」での黒木哲徳学部長の講演資料	

おわりに

[1]現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)について

(1) 全体的な取組の概要

三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（1 中学校、3 小学校、1 幼稚園）と教育学部が連携協力することによって、当該中学校区の 5 校園を、教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場として位置づけると同時に、当該学区における各校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援することによって、学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルを構築する。

また、当該中学校区における文化的・体育的諸活動はもとより、地域の福祉・健康問題、食問題等に対しても、教育学部の物的資源及び人的資源を投入して、地域の活性化をはかり、一身田中学校区全体の地域の教育力・文化力を高めることによって、三重大学教育学部としての地域の文教化に貢献する。

取組の趣旨・目的

科学技術の進展が著しく、国際化や情報化、価値観の多様化が進む変化の激しい今日の社会において、教員には従来にも増して多様な資質能力が求められている。教員には教科・教職等に関する専門的知識、授業づくりや教材開発等に関する高い識見はもとより、人間の成長・発達についての深い理解、児童・生徒の人格形成の支援能力、社会の変化への対応や柔軟な発想、教職に関する高い倫理性と優れた人間性などが重要な資質と考えられ、これらを基盤とした「実践的な指導力」がますます必要とされる。

実践的な指導力とは、教科指導に関する教育実践力（**教科指導力**）だけではなく、学級集団や課外活動集団等の各種のグループを組織し、自律した活動が円滑に行なわれるように指導する実践力（**組織力**）、学園祭などの諸行事を企画し、運営していくことのできる実践力（**企画・運営力**）、学校や地域において日常的に発生する諸問題に対して臨機応変に適切に対処できる判断力（**臨床的判断力**）、児童・生徒や保護者、さらに同僚等との適切なコミュニケーションが実行できる実践力（**コミュニケーション力**）、児童・生徒の豊かな人間性と人格形成を支援できる実践力（**人間力**）等が含まれている。

本学部では、平成 16 年度に「三重県教育界のニーズを知る」ために、三重県教育委員会、津市教育委員会、三重県高等学校長会、津市小中学校長会等から代表を招いて懇談会を開催したが、こうした懇談会でも、前述した実践的指導力の養成が急務であるとの意見を聴取している。

そのような実践的指導力の基礎を培うには、講義による理論的な学習だけではなく、実際の教育現場における実地教育が不可欠である。教員免許取得に必要な教育実習は、3 年次あるいは 4 年次に 4 週間あるいは 2 週間という期間限定で、しかも附属学校を主たる場として実施されているが、これだけでは不十分であり、年間を通しての学校体験、しかも公立学校における実地的学習によって、前述した実践的指導力の基礎を培うことが可能になると思われる。そのような趣旨に沿って、本学部では平成 18 年度から、「教育実地研究基礎」及び「教育実地研究」という新科目を開講し、学生の実地的な教育を展開する予定になっている。

本取組は、三重大学教育学部に距離的に最も近い津市立一身田中学校区（一身田中学校、一身田小学校、栗真小学校、白塚小学校、白塚幼稚園の 5 校園、及び北立誠小学校の一部を含む）と連携

協力することにより、下記の3つの成果を得ることを目的としている。

- ①教員養成段階における学生の実践的指導力の基礎を培う。
- ②当該学区の幼・小・中学校の諸教育活動を支援することを通して、学校活性化モデルおよび幼小中大連携モデルを構築する。
- ③当該学区の地域教育力を高め、三重大学教育学部としての地域貢献に資する。

なお、この取組を推進するためには、当該学区の学校設置者である津市教育委員会との連携協力及び一身田中学校の積極的姿勢が不可欠であるが、津市教育委員会とは、平成16年11月16日に連携協力のための協定を締結し、学力向上フロンティア事業、SPP事業、幼小連携事業、小中連携事業等を協働して推進してきている。また、津市立一身田中学校長は津市教育委員会が民間から募集して任命された校長であり、平成16年度の赴任当初から、中学校区の教育の改善に努力されていて、本取組に対しては、津市教育委員会及び一身田中学校はきわめて積極的な姿勢を示している。

取組の実施体制等

本学部では、平成18年度から「教育実地研究基礎」（1単位）という科目を1年生対象に新設する。その目的は、子どもや教員の実際に触れることを通して、“学校”というものを知り、早い段階から教職への動機付けを高め、2年生で実施している事前実習、3年生・4年生で実施している4週間・2週間の教育実習に繋げていくことにある。したがって、教員養成課程の教育課程内における「教育実地研究基礎」は、本取組の目的を達成するための1つの分野として位置づけることができる。

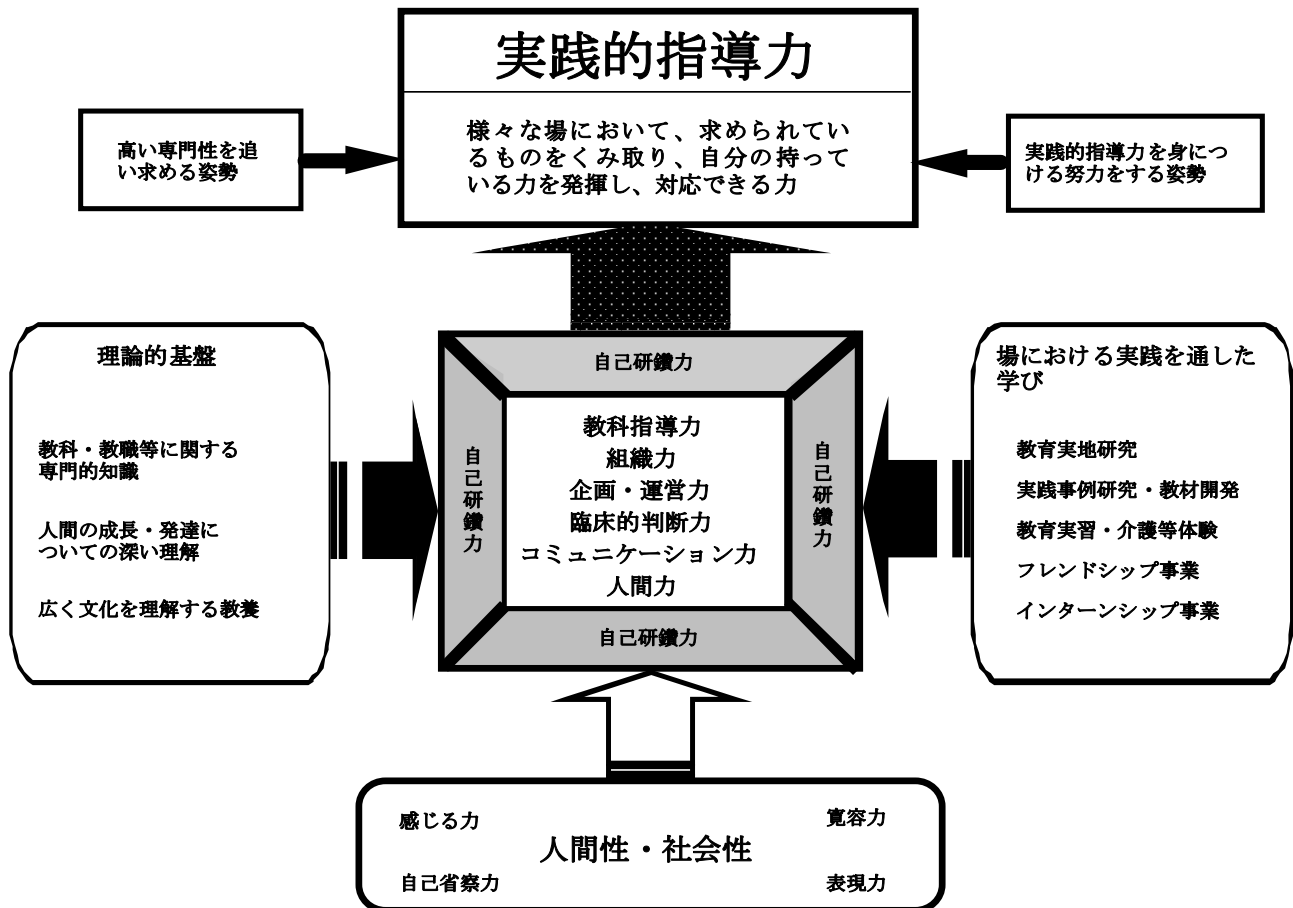
また、本学部では、「PBL教育実施委員会」が平成17年度に設置され、学部の授業科目のPBL化が推進される方向に向かっている。PBL教育（Problem-based Learning、あるいは、Project-based Learning）は、現場において生起する問題の把握から問題解決策の立案、実施、評価に至る一連の学習過程を小グループにおけるチューター制で実施する教育形態であり、

- ①現実の状況に対する問題発見能力、分析力、解決能力を身に付けることができる。
- ②現実世界の問題を解決していくことにより、理論と実践との繋がりを実感し、自己のアイデンティティの形成を促すことができる。
- ③問題解決過程、企画実施過程において、様々に有用な知識を活用し、資料探索能力を身に付けることができる。

という意義を持っている。したがって、学部授業科目のPBL化は本取組の目的と合致しており、「4データ、資料等」に示すように、三重県下の公立小学校、中学校における先行的な実践も蓄積されてきている。本学部の従来経験から組み立てられた「実践的指導力を育成するための構造図」は[図1]の通りである。本学部における実践的指導力育成のプログラムの概要は以下の通りである。第1年次に「教育実地研究基礎」を履修させて、教職への動機付けや意識を高め、第2年次に教科教育法に関する各科目の履修中に教育現場の体験をさせ、理論と実践の融合の重要性を学ばせる。これらの基礎の上に、第3年次の4週間教育実習が位置付けられている。さらに、第4年次には、

2週間教育実習と「教育実地研究」の履修によって、資質のさらなる向上を目指す。特に、第1、2年次に履修する授業科目については、そのPBL化を図る必要がある。

本学部の教員養成課程における教育課程内の授業科目をPBL化するためには、適切な現場（公立の小学校、中学校、幼稚園）を必要とする。その意味において、本学部に隣接する一身田中学校区と連携を図ることは学部の総意となっている。



〔図1〕 実践的指導力を育成するための構造図

一方、全国的な傾向として、昨今のいわゆる「学力低下問題」や子どもを取り巻く教育環境の悪化に当面する小中学校、幼稚園は多くの課題を抱えている。一身田中学校区も例外ではなく、校内における「学力向上委員会」の設置、幼小連携・小中連携を模索する等の方針を打ち出し、諸問題の解決のため、大学との連携を強く希望している。また、20の中学校区を管轄する津市教育委員会も、「平成18年度津市における学力向上推進計画案」を策定し、11種類の事業それぞれについて委員会、連絡会等を設置し、それらを取りまとめる「津市学力向上推進委員会」を立ち上げ、教育改革を推進しようとしており、**中学校区における教育改革モデル**を模索している。

本取組を実施するにあたっては、三重大学教育学部内に「一身田学区との連携推進委員会」（仮称）を設置し、この委員会を中核として事業を推進する。また、当該学区の各学校園にも推進委員会を立ち上げるとともに、それぞれの代表者を構成員とする連絡協議会を設置する。なお、津市教

育委員会の教育研究支援課内に置かれる予定の担当者も協議会の構成員となる。そして、事業内容や実施方法等は連絡協議会における協議に基づいて決定され、実際的な事業遂行は各々の推進委員会を中心として行なわれることになる。

教育改革への有効性

義務教育は小学校と中学校を一貫した連続性の論理の上に成立している営みである。さらに、現代的課題ともなっている幼小連携をも視野に入れると、幼稚園から中学校までを包括した「学区」を義務教育の最小単位と考えることができる。その観点から見て、本取組は従来型の一公立学校との連携ではなく、5つの学校園を擁する中学校区全体との連携による総合的な教育改革に関するモデルを構築するものである。

教員養成課程におけるカリキュラムを実地研究型にしようとする動向は新しいものではないが、PBL教育としての位置づけを明確にし、さらに大学が中学校区全域との連携をはかることによって、複雑で多様な課題に対する解決を目指す幼小中大連携モデルと学校・地域活性化モデルを構築しようとする取組は全国的にもまだ始まったばかりであり、モデル構築はこれからの教育改革にとって有効な指針を与えることになる。以下に、その具体性について述べる。

①三重大学教育学部では、学生の実践的指導力を高めるための取組を平成14年度から種々の形態によって実施してきており、具体的な教育内容、教育方法が整理されつつある。しかし、これらは地域的には個別的であり、学校種の面でも個別対応の取組にとどまっていた、今日的課題ともなっている幼小連携、小中連携の推進にとっての直接的な有効性が検証される取組にまで高められていない。これに対して、本取組は1つの中学校区全域との連携事業であるから、地域的にも、学校種の面でも、幼小中を一貫した取組が可能となり、その中での学生の実践的指導力育成のための教育課程、教育内容、教育方法に関するプログラムの創出が可能となり、今後の教育施策の策定に有効な指針を与えることができると考えられる。

②本取組の連携学区である「一身田中学校区」は、学力向上に係る取組においても、また課外活動に係る取組においても、きわめて積極的な姿勢を示している。しかし、幼小中の連携が十分に成功しているとは言い難い。幼稚園、小学校、中学校はそれぞれ独自の課題を持っており、その教育活動スタイルも異なっているからである。したがって、幼小中の連携推進の有効な指針、内容と方法を構築するためには、高等教育機関である三重大学教育学部の協力が必要とされている。

幸い、本学部はこの一身田中学校学区と距離的に最も近い位置にあるから、この地域において、幼小中大連携モデル及び学校・地域活性化モデルを構築できる体制が備わっていると言える。

③一方、津市教育委員会は、平成17年度からの第2期教育改革の目玉としての「学力向上拠点形成事業」を推進している。すでに、「津市5歳児カリキュラム」の策定もなされ、これに連結した形での「小中一貫カリキュラム」の策定も視野に入れられている。本取組は、津市教育委員会のこうした教育施策とも合致しており、その意味において、津市教育委員会は、一身田中学校区と本学部の連携協力事業に大きな期待をかけている。この取組を推進することによって、行政の果たす役割に関しても、有効な指針が得られるものと考えられる。

(2)平成19年度申請書

1. 大学等名／設置者名	三重大学／国立大学法人三重大学
2. プログラム名 (テーマ番号)	現代的教育ニーズ取組支援プログラム (テーマ1)
3. 事業名称	教育実践力の育成と学校・地域の活性化
4. 選定年度	平成18年度
5. 事業推進代表者／ 事業推進責任者	事業推進代表者 学 長 豊田 長康 事業推進責任者 教育学部教授 上垣 渉
6. 事務担当者	主担当 学務部教務チーム サブリーダー 樋口 雅夫
	副担当 学務部教務チーム チーフ 家田 勝也
7. 選定取組の概要 <p>平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラムで選定された「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」は、三重大学教育学部に隣接する津市立一身田中学校区（1中学校、3小学校、1幼稚園）と教育学部が連携協力することによって、当該中学校区の5校園を、教員養成段階における学生の「実践的指導力の基礎」を涵養する教育実地研究の場として位置づけると同時に、当該学区における各学校園の各教科の教育活動、総合的な学習、課題学習、選択学習、課外活動等の諸教育活動を総合的に支援することによって、学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルを構築する取組である。また、当該中学校区における文化的・体育的諸活動はもとより、地域の福祉・健康問題、食問題等に対しても、教育学部が物的・人的支援を行なって、地域の活性化をはかり、一身田中学校区全体の地域の教育力・文化力を高めることによって、教育学部としての地域の文教化に貢献する。</p>	
8. 補助事業の目的・必要性 (1)全体 <p>本補助事業の全体の目的は、教員養成教育における「実践的指導力の基礎」の育成のため、実地的教育カリキュラムの改善を図り、本学の教育目的である資質の高い人材養成に資するため、学校と地域の活性化を図ることを通して、地域の教育力を高め、幼小中大連携モデル及び学校・地域活性化モデルを構築することである。</p> <p>幼小中大連携モデルの構築とは、同一地域に並立する幼稚園、小学校、中学校の教育活動の交流を促進し、子どもの確かな学力と豊かな人間性を育むための一貫した教育課程の構築を可能とする典型を創ることであり、学校・地域活性化モデルの構築とは、地域の保護者、住民の教育に関する意識を高め、学校の教育活動と子どもの成長を見守り、支える文京地域として活性化することを意味している。</p> <p>実践的指導力の基礎を培うには、講義による理論的な学習だけではなく、実際の教育現場における実地教育が不可欠である。教員免許取得に必要な教育実習は、3年次あるいは4年次に4週間あるいは2週間という期間限定で、しかも附属学校を主たる場として実施されているが、これだけでは不十分であり、年間を通しての学校体験、しかも公立学校における実地的学習によって、前述し</p>	

た実践的指導力の基礎を培うことが可能になると思われる。

また、平成 18 年度からの正規の授業科目として実施している「教育実地研究」の取組の一層の充実・発展を図るとともに、本取組を全学的取組として拡充することにより、本学の教育目的である資質の高い教員養成教育における人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の目的である。

(2)本年度

本補助事業の本年度の目的は、昨年度に確立した事業推進組織である「一身田校区連絡協議会」を中核とし、昨年度の取組を土台として、学部学生による幼小中学校園の幼児・児童・生徒の「遊び」と「学び」への支援活動、理科教育・食教育などに関する教育実地研究の授業の推進、合同研究会の開催と公開授業の実施、親子活動における体ほぐし運動の実施、中学校の文化祭（合唱コンクール）への支援、英語活動への支援、大学教員による保護者・地域住民を対象としたカルチャースクールの開催、及び「フォーラム in 一身田」の開催などにより、学生の教育実践力の育成と学校・地域の活性化を推進することである。

9. 本年度の補助事業実施計画

本年度の補助事業の目的を達成するため、下記の取組を実施する。

- ① 5月、8月、12月、平成20年3月 一身田校区連絡協議会の開催
- ② 年間を通しての「教育実地研究基礎」（授業科目）、「教育実習」（授業科目）の実施（小中学校における学習支援活動など）
- ③ 年間を通して、中学校における「授業作り研究会」の定例的な開催
- ④ 年間を通して、小中学校における児童・生徒の放課後学習活動への支援
- ⑤ 年間を通して、小中学校における図書館教育に関わる諸活動への支援
- ⑥ 1学期～2学期 幼稚園における「音・音楽遊び」活動と「音楽物語」の上演活動などの実施
- ⑦ 6月～7月 小中学校における食教育（お弁当作りなど）の実施
- ⑧ 6月～12月 小中学校における体育教育への授業支援活動、小学校における水泳教室及び親子活動（体ほぐし運動など）の実施
- ⑨ 6月～10月 第3期、第4期「一身田校区カルチャースクール」の開催
- ⑩ 7月～8月 中学校「選択理科」におけるジュニア・サイエンス in シーサイド・キャンパスの実施
- ⑪ 7月～平成20年3月 中学校・合唱コンクールに向けての現地指導、教育学部とのコラボ音楽祭及び小学校におけるミニコンサートなど音楽活動の実施
- ⑫ 1学期と2学期、中学校「1年生理科」における理科実験の支援及び理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施
- ⑬ 9月～12月 中学校におけるLL教育活動への支援
- ⑭ 12月 中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展
- ⑮ 12月～平成20年2月 合同研究会の開催と公開授業の実施
- ⑯ 平成20年2月 「フォーラム in 一身田」の開催
- ⑰ 平成20年3月 報告書の作成

10. 補助事業の内容

本補助事業は、選定された現代的教育ニーズ取組支援プログラムに示された「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」の一層の充実・発展を目指す補助事業であり、内容は以下のとおりである。

- ① 平成 19 年度の取組を推進していくために、適切な時期に情報交換を図りながら、他大学等での取組等を調査し、企画と運営に関する具体的方針を立案するとともに、取組の総括を行なうために、一身田校区連絡協議会を定期的に開催する。
- ② 大学教員の指導のもとで、教育学部の授業科目である「教育実地研究基礎」の一環として、種々のコースの学生が小中学校における学習支援活動（ティーチングアシスタント）を年間を通して行い、6月と9月には学部の授業科目である「2週間教育実習」と「4週間教育実習」を小中学校において実施する。
- ③ 中学生の学力向上のために、教材開発や授業案作りを含めた「授業のあり方」を研究するために、大学教員、学生、中学校教員が協働して行なう研究会を定例的に開催する。
- ④ 小中学校における児童・生徒が放課後に行なう課外の学習活動を「寺子屋・一身田」として組織し、大学教員と小中学校教員の指導のもとで、学生が支援する。
- ⑤ 図書館司書資格の取得を目指す学部学生が、三重大学図書館関係者や小中学校教員の指導のもとで、学校図書館活動の支援を行なう。
- ⑥ 幼稚園の園児に対して、幼児教育コースの学生が、大学教員と幼稚園教員の指導のもとで、「音・音楽遊び」の活動、「音楽物語」の上演活動などの諸活動を行なう。
- ⑦ 小中学校における食教育の改善や“食”に関する意識向上のために、大学教員と家政科学生、小中学校教員が協働して、「お弁当作り」などの実践を行なう。
- ⑧ 小中学校の体育教育に“ラート”や“Gボール”などの教具を導入して、授業改善を図る。また、集団宿泊学習や運動会に向けての体育活動を実施し、夏期休暇中には小学校におけるプール指導の一環として、大学教員、小学校教員の指導のもとで、学生が小学生に対して水泳指導を行なう。また、小学校の PTA の学年・学級行事等において、親子のコミュニケーションを図るなどのために、大学教員と小学校教員の指導のもとで、保健体育科の学生が「親子活動における体ほぐし運動」を実施する。
- ⑨ 保護者、地域住民を対象として、教育問題、健康問題、地域問題、時事問題などをテーマとしたカルチャースクールを2期（合計6回）にわたって開催する。
- ⑩ 中学校の授業科目である「選択理科」において、大学教員、学生、中学校教員の協働によって、科学実験体験活動を実施する。
- ⑪ 秋に開催予定の中学校・合唱コンクールに向けて、大学教員と中学校教員の指導のもとで、音楽科学生が中学生に対して実地の合唱指導を行い、大学教員の指導のもとで、音楽科学生が中学校教員と協働して、中学校の文化祭（合唱コンクール、吹奏楽演奏など）を「コラボ音楽祭」として成功させる。また、小学校における連合音楽会、クリスマスコンサート、卒業生を送る会などの行事等に関わって、大学教員と小学校教員の指導のもとで、音楽科の学生が企画立案や実施の支援を行なう。
- ⑫ 学部の理科学生（3年生）の授業科目における教育現場での実践活動として、受講生が中学校の「2年生理科」の実験指導を行なう。また、中学校における「生命尊重」の教育として、解剖と調理を兼ねた実習を大学教員、学生、中学校教員の協働によって実施する。

- ⑬ 中学校における英語教育改善の一環として、実践的な英語活動のための LL (Language Laboratory) を開設し、大学教員と中学校教員の指導のもとで、英語科学生が学習支援を行なう。
- ⑭ 中学校の授業科目「選択理科」の一環として、受講生徒が理科学生や中学校教員の支援のもと、「青少年のための科学の祭典」で実験ブースを出展し、幼稚園児や小学生の指導にあたる。
- ⑮ 中学校が開催する公開授業に大学教員と学生が参加し、合同の授業研究会を開催するなどして、公開授業を成功させる。
- ⑯ 「第2回 フォーラム in 一身田」を開催し、19年度の取組の成果の公表・普及とあわせ、他大学等の実施内容との比較・検討を行う。
- ⑰ 平成19年度の取組の成果と課題をまとめた報告書を作成し、次年度の取組に資する。

以上の補助事業において、学生が地域で行なう活動時間数の概数は次の通りである。小中学校における学習支援活動などに関わる学生については年間約400時間、理科学生については年間約300時間、幼児教育学生については約200時間、家政科学生については約150時間、体育科学生については約300時間、音楽科学生については約300時間、英語科学生については約100時間、その他に関わる学生については約400時間、合計して約2150時間である。上記の諸活動を通じて、選定取組を更に充実・発展させ、本学の教育目的である教員養成における資質の高い人材養成機能の強化を図ることが、本補助事業の内容である。

11. 補助事業から得られる具体的な成果

上記の本年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下のとおりである。

- ① 一身田校区連絡協議会を定期的に開催することにより、学生の教育実践力育成に関する実態を把握でき、課題がより明確となり、学生に対する具体的な教育方策を継続的にフォローすることができる。また、本学の取組と類似の先行的取組を調査することにより、本学の取組の改善が図られ、学生の新たな教育活動が期待できる。
- ② 「教育実地研究基礎」の実施において、学生が小中学校の学習支援活動や学校行事支援活動に取り組むことによって、その企画・運営力、遂行力、組織力の向上に資することができ、また、教育実習を行なうことによって、学校教育活動の概要を知ることができるとともに、教科指導、学級指導、清掃指導、給食指導など全般的な教育実践力育成の基礎を培うことができる。
- ③ 生徒の学力向上のための基礎とも言える「授業作り」の研究会に学生を参加させることによって、学生の教材観、授業観に広がりや深まりを与えることができる。
- ④ 学生が児童・生徒の放課後学習活動に関わることによって、正規の授業時間には見られない子どもの姿に接することが可能となり、学生の子ども観に新たな視点を付与することができる。
- ⑤ 学生が学校図書館に関わる諸活動に体験的に携わることによって、学校教育活動の新たな側面を知ることができ、学校における読書活動の重要性を体得することができる。
- ⑥ 学生が幼稚園における種々の音楽活動を展開することにより、幼児との親和を深め、幼児教育の課題や喜び・充実感を実践的に感じ取ることができるとともに、幼児の音楽的能力育成のためのメソッドについて実践的に学ぶことができる。
- ⑦ 非給食時におけるお弁当作りの実践などを行なうことによって、児童・生徒の健康に密接な関わ

りを持つ食問題を学校教育の一分野として捉える視点と意義を学生が身に付けることができる。

- ⑧ ラートや G ボールなどの教具を用いた体育指導に学生が関わることによって、児童・生徒の体力と健康に繋がる体育教育の改善のための指導法や教具の意義について、学生が実践的に学ぶことができ、夏の水泳は小学生にとって重要な意義を持つ活動であり、学生がその内容と方法に実践的に関わることによって、将来の小学校教員として必要な資質の基礎を身に付けることができる。また、保健体育科学生が PTA の学年・学級行事における親子活動（体ほぐし運動など）を実践することにより、体育活動に関する実践力向上だけでなく、保護者と子どもの相互理解、それを支援する学校のあり方などを考える機会を得ることができる。
- ⑨ カルチャー・スクールを開催することにより、保護者、地域住民の大学に対する信頼度が高まり、結果として、学生の実地的教育に対する学校・地域の理解が深まり、教育実地研究の取組の進展を図ることができる。
- ⑩ 中学校の選択授業科目「選択理科」における科学教室等の実施や、理科学生の教材開発力、実践力の向上とともに中学校教員の科学、実験に対する意識の改善を図ることができる。
- ⑪ 中学校の文化祭（合唱コンクール）は、中学生にとっての一大イベントであることから、その合唱指導に関わることは学級指導そのものに関わることでもあり、学生が集団指導力や運営組織力の基礎を身に付けることのできる好機会である。中学生の心理や実態に即した指導方法についての理論を学びながら、実践力を培うことができ、併せて中学校文化祭の一環としての合唱コンクールに、音楽科学生による合唱を実施し、ジョイント音楽祭とすることにより、学生の中学校行事に対する意識改革を図るとともに、学生の合唱力向上に資することができる。また、音楽科学生が小学校の連合音楽会、クリスマスコンサートなどの諸行事に関与することによって、学校における音楽活動の重要性を体得し、対象校の現状に即した企画立案や運営実施などの実践力を培うことができ、学校の諸行事における音楽の意義をより深く理解することができる。
- ⑫ 中学校 1、2 年生「理科」における実験指導により、理科学生の実験等に関する実践力の向上を図ることができる。また、理科学生と家政科学生が協働して、「命と食を考える」教育実践を行なうことにより、解剖と調理に関する実践力を深めるとともに、複数教科のクロスカリキュラムの可能性を考える機会を得ることができる。
- ⑬ 英語科学生が、中学校における実践的英語教育に関わる LL 教育を支援することによって、その内容と方法に関する実践的立場からの知見を得ることができる。
- ⑭ 「青少年のための科学の祭典」への出展内容を学生が企画・立案することにより、行事に対する認識が深まるとともに、企画・運営力の向上が期待できる。
- ⑮ 中学校の公開授業のための合同研究会に学生を参加させ、実際の公開授業を参観させることによって、学生の教材解釈力に資することができる。
- ⑯ 「フォーラム in 一身田」の開催にあたり、学生がこれまでの成果を整理し、資料の作成に従事することにより、イベントに対する認識を新たにし、将来的な学校諸行事を実行していく上での実践力の基礎を身に付けることができる。
- ⑰ 平成 19 年度の取組の成果と課題をまとめた報告書を作成する過程に学生を参加させることにより、資料等を概括し、整理する力の育成に資することができる。

[2] 平成 19 年度 の 取 組 (1)

(1) 一身田校区連絡協議会の開催

今年度の取組に関する一身田校区連絡協議会は3回開催された。

第1回目は、平成19年3月13日(火)16:00～18:00に一身田中学校・会議室において開催された。出席者は、一身田中学校(4名)、一身田小学校(2名)、白塚小学校(2名)、栗真小学校(2名)、白塚幼稚園(2名)、津市教育委員会(2名)、三重大学教育学部(7名)の総計21名であった。津市教育委員会からの挨拶、出席者の自己紹介の後、平成19年度現代GP調書に沿いながら、下記の項目について協議がなされた。

- ① 一身田校区連絡協議会の開催日程について
- ② 「教育実地研究基礎」(授業科目)、「教育実習」(授業科目)の実施(小中学校における学習支援活動など)
- ③ 中学校における「授業作り研究会」の定例的な開催
- ④ 小中学校における児童・生徒の放課後学習活動への支援
- ⑤ 小中学校における図書館教育に関わる諸活動への支援
- ⑥ 「音・音楽遊び」活動と「音楽物語」の上演活動、未就園児への支援などの実施
- ⑦ 食教育(お弁当作りなど)の実施
- ⑧ 体育授業への授業支援活動、小学校における水泳教室及び親子活動(体ほぐし運動など)の実施
- ⑨ 合唱コンクールに向けての実地指導、教育学部とのコラボ音楽祭及び小学校におけるミニコンサートなど音楽活動の実施
- ⑩ 「選択理科」におけるジュニア・サイエンス in シーサイド・キャンパスの実施
- ⑪ 「1年生理科」における理科実験の支援及び理科と家庭科のクロスカリキュラム(解剖実習と調理実習)の実施
- ⑫ LL教育活動への支援
- ⑬ 「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展
- ⑭ 合同研究会の開催と公開授業の実施
- ⑮ 第3期、第4期「一身田校区カルチャースクール」の開催
- ⑯ 「フォーラム in 一身田」の開催
- ⑰ 報告書の作成
- ⑱ 非常勤職員雇用について
- ⑲ 連携事業に関する実地調査について

第2回目は、平成19年8月7日(火)16:30～18:00過ぎまで、教育学部・第3会議室において開催された。出席者は、一身田中学校(3名)、一身田小学校(2名)、白塚小学校(2名)、栗真小学校(1名)、白塚幼稚園(2名)、市教委(2名)、大学(7名)、計19名であった。

1学期の活動についての報告と交流、問題点の指摘などが行なわれた後、今後の取組について協議がなされた。すでに具体的な日程も定まった計画もいくつか報告されたが、これから計画される事業もあるとのことであった。なお、全体に関わる件で、今年度の総括のためのフォーラムを平成20年2月27日(水)の午後、大学の小ホールで開催することに決定した。

なお、今後の進め方については、すでに日程などが決まっている取組については、準備を進め、これから企画される取組については、関係すると思われる大学の教員と小中学校・幼稚園とが連絡を取り合い、協議して進めて行くこととなった。その他の件については、代表の上垣と連絡を取り合いながら進めていくこととなった。

第3回目は、平成20年1月8日（火）17:00～18:00、三重大学教育学部・第3会議室において開催された。出席者は、津市教育委員会（1名）、一身田中学校（2名）、一身田小学校（2名）、白塚小学校（2名）、栗真小学校（2名）、白塚幼稚園（2名）、教育学部（8名）であった。

最初に、これまでの取組と現状について簡単な報告がなされた。その後、2月27日に開催予定の「第2回 フォーラム in 一身田」の内容について協議され、ポスターセッション&学生の体験発表、パネル・ディスカッション、講演という3部構成で開催することとなった。パネル・ディスカッションに関する打合会は別途開催することになった。続いて、文部科学省に提出すべき「平成20年度調書」について説明がなされ、どのような内容を盛り込むかについて協議された。協議の結果を教育学部がまとめて整理し、調書を作成することとなった。一身田メーリングリストを使用して、調書作成が進み、平成20年1月25日、文部科学省に調書を提出した。

(2) 一身田校区カルチャースクールの開催

今年度は、2期6回の講座を開催した。第3期カルチャースクールは、平成19年6月1日、15日、29日に、第4期カルチャースクールは、平成19年10月5日、19日、11月2日に開催された。いずれも金曜日の午後7時30分から9時までの90分の講座であった。講座の題目、講師は下記の通りであった。

- 第3期 第1回「守ろう！あなたの財産 ―消費者被害への対応策―」
講師／教育学部教授 吉本敏子（家政教育講座）
- 第2回「どうなってるの？ 年金制度」
講師／澤田昇三（三重社会保険事務局 年金業務指導官）
- 第3回「どうなる？ 一身田に大地震！」
講師／教育学部教授 本田 裕（理科教育講座）
- 第4期 第1回「あなたの「子育て」応援します！」
講師／田部眞樹子 氏（三重県子どもNPOサポートセンター理事長）
（「チャイルドライン24」実施組織代表理事）
- 第2回「「介護」に対処する法！」
講師／石川妙子 氏（津市役所健康福祉部介護保険課主事）
／西山勇介 氏（津市役所健康福祉部介護保険課主事）
- 第3回「どう考えたらいいの？ 環境問題」
講師／生物資源学研究科教授 高山 進 氏（資源循環学科）

第3期、第4期とも、ポスター100部を作成して、三重大学及び一身田地区の各所に掲示し、宣伝を行なった。そのポスターを次ページに掲載する。

2007
Cultural School
6.1 THU. 15 FRI. 29 FRI.

第3期

一身田校区カルチャー・スクール

**参加費
無料**

申し込み・予約不要
(当日で参加ください)

◆主催/一身田校区連絡協議会

◆後援/津市教育委員会

◆会場 高田青少年会館

2階・第1会議室

☎059-232-6079

第1回講座

6月1日[金] 午後7時30分～9時

『守ろう!あなたの財産
—消費者被害への対応策—』

講師/教育学部教授 吉本敏子(家政教育講座)

第2回講座

6月15日[金] 午後7時30分～9時

『どうなってるの? 年金制度』

講師/澤田昇三(三重社会保険事務局 年金業務指導官)

第3回講座

6月29日[金] 午後7時30分～9時

『どうなる? 一身田に大地震!』

講師/教育学部教授 本田 裕(理科教育講座)

◆問い合わせ先/津市立一身田中学校 ☎059-232-2157

三重大学教育学部 ☎059-231-9347

2007

第4期

Culture School
10.5 FRI. 19 FRI. 11.2 FRI.

◆主催 / 一身田校区連絡協議会
◆後援 / 津市教育委員会

◆会場 高田青少年会館
2階・第1会議室
☎059-232-6079

**参加費
無料**
申し込み・予約不要
(当日で参加ください)

第1回講座

10月5日[金] 午後7時30分～9時

『あなたの「子育て」応援します!』

講師 / 田部眞樹子 氏 (三重県子どもNPOサポートセンター理事長)
(「チャイルドライン24」実施組織代表理事)

第2回講座

10月19日[金] 午後7時30分～9時

『「介護」に対処する法!』

講師 / 石川妙子 氏 (津市役所健康福祉部介護保険課主事)
西山勇介 氏 (津市役所健康福祉部介護保険課主事)

第3回講座

11月2日[金] 午後7時30分～9時

『どう考えたらいいの? 環境問題』

講師 / 生物資源学研究科教授 高山 進 氏 (資源循環学科)

◆問い合わせ先 / 津市立一身田中学校 ☎059-232-2157
三重大学教育学部 ☎059-231-9347

一身田校区カルチャー・スクール

カルチャースクール開催にあたっては、毎回、参加者にアンケートを行なったので、そのアンケートのまとめを以下に示しておく。

第3期 第1回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題 目 守ろう！あなたの財産 消費者被害への対応策
 日 時 2007年6月1日（金） 19時30分～21時00分
 場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室
 参加者 31名 （一般参加23名 一身田中教員4名 三重大学4名）

アンケート結果 n=10 （男=4、女=5、記入なし=1）

I 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男				1	1	2				4
女				2	2	1				5
記入なし							1			1
計	0	0	0	3	3	3	1	0	0	10

○「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？（複数回答あり）

	男	女	記入なし	計
<input type="checkbox"/> 学校からの案内状	1		1	2
<input type="checkbox"/> 地域のお知らせ	1	5		6
<input type="checkbox"/> ホームページ				0
<input type="checkbox"/> その他		1		1
計	2	6	1	9

II. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	2	7	1	10
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい		1		1
2. よい	2	6	1	9
3. 短くしてほしい				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	2	4	1	7
2. 平日昼間		1		1
3. 土・日曜日		2		2
4. その他				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	1			1
2. よい	1	6	1	8
3. 少なくしてほしい				0
記入なし		1		1
計	2	7	1	10

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	2	6		8
2. 普通		1	1	2
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

(ご意見欄)

○一部、難しい内容があつて解らないところもあつたが、全体的な流れは解つた。ただ、環境問題に対して我々ができる事とはなになのか、少しわかりにくいところがあつた。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	2	5		7
2. 普通		2	1	3
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

一般教養 (文学・歴史・科学) …③ 一身田の町のなりたち

- 消費生活・経済・・・③ わかりやすい政治のからくり
- 医療・健康・・・③ 薬と健康（上手な薬の飲み方）
- 子育て・・・② ファミリーサポート事業など
- 自然環境・・・①
- その他・・・

IV. 意見・感想・要望など

- 初めて参加しましたが、今までの自分の生活を振り返り、これからの心の持ち方とか悪質商法への対応がわかりよかったです。歌も良く分かり楽しかったです。（40代女性）
- 民生委員として気をつけること、心がけることのとえ、例があげてあってよくわかった。訪問するときに注意してみようと思った。
- 前回は思いましたが、時間がないこともありますが、質問コーナー又は、それに応じることがあればと思いました。
- 良い会場で満足です。

第3期 第2回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題 目 どうなってるの？年金制度
 日 時 2007年6月15日（金） 19時30分～21時00分
 場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室
 参加者 32名（一般参加26名 一身田中教員4名 三重大学2名）

アンケート結果 n=15（男=8、女=7）

I 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男				2		3	3			8
女				4	2	1				7
記入なし										0
計	0	0	0	6	2	4	3	0	0	15

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？（複数回答あり）

	男	女	記入なし	計
<input type="checkbox"/> 学校からの案内状	4	3		7
<input type="checkbox"/> 地域のお知らせ	2	3		5
<input type="checkbox"/> ホームページ				0
<input type="checkbox"/> その他		2	1	3
計	6	8	1	15

民生児童委員

II. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい		1		1
2. よい	7	7		14
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	7	8	0	15

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい	1			1
2. よい	6	8		14
3. 短くしてほしい				0
記入なし	1			1
計	8	8	0	16

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	5	6		11
2. 平日昼間				0
3. 土・日曜日	1			1
4. その他		1		1
記入なし	1			1
計	7	7	0	14

金曜夜

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	4	4		8
2. よい	3	4		7
3. 少なくしてほしい				0
記入なし				0
計	7	8	0	15

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	4	6		10
2. 普通	3	1		4
3. よくなかった		1		1
記入なし				0
計	7	8	0	15

(ご意見欄)

○ 年金のことは、勉強してよかったと思いますけど、専門用語はちょっと理解しにくかったです。ためになるお話です。澤田先生がジレンマを感じて見える支給の申請のことは、声を大にして問題提起して欲しいです。改革への第一歩にな

ると思います。(まじめに年金を納めている人に
優しい制度をつくってください)

- わかりやすくよかった。少々専門用語もあり、
もっと自分自身が勉強しなければと感じました。
- 大変分かりやすく、良いお話を聞きました。少
し賢くなったような気がします。
- 分かりやすい話でよい。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	4	5		9
2. 普通	3	3		6
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	7	8	0	15

(ご意見欄)

○できればバリアフリーの一階の方が良いと
思う。

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

- 一般教養 (文学・歴史・科学) …④ 聖徳太子 地域の話題 学校問題のテーマについて
- 消費生活・経済…⑤ 年金は1回では理解しにくいので、2～3回シリーズにして欲しい。
- 医療・健康…④
- 子育て…②
- 自然環境…④
- その他…① 食育

Ⅳ. 意見・感想・要望など

- 今まで年金はまだまだと思い、あまり関心がなかったのですが、大変分かりやすいお話しでよくわかりました。
- 講師がどのような目線で話をされるかを興味深く聞いていました。国民一人ひとりをCSという目線でみるという意識を更に高めて欲しいというのが今の感想です。
- 年金がもらえるためには申請しなければならないというのがわかりました。年金制度がたくさんあり、そのすべてを統一することが難しいこともよくわかりました。今までの責任が今社会保険庁にきているのでかわいそうです。
- もう少し多くの出席者があるといいですね。チラシの工夫など、いまひとつ考えていただきたい。

第3期 第3回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

- 題 目 どうなる？一身田に大地震！
- 日 時 2007年6月29日(金) 19時30分～21時00分
- 場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室
- 参加者 22名 (一般参加 17名 一身田中教員 3名 三重大学 2名)

アンケート結果 n=16 (男=8、女=7)

I. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男				1	2	2	3			8
女				1		7				8
記入なし										0
計	0	0	0	2	2	9	3	0	0	16

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計	
<input type="checkbox"/> 学校からの案内状	4	1	1	6	
<input type="checkbox"/> 地域のお知らせ	3	4		7	
<input type="checkbox"/> ホームページ				0	
<input type="checkbox"/> その他	1	2		3	ポスター
計	8	7	1	16	

II. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	8	8		16
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	8	8	0	16

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい	1			1
2. よい	6	8		14
3. 短くしてほしい				0
記入なし	1			1
計	8	8	0	16

○開始時間帯	男	女	記入なし	計	
1. 平日夜間	6	6		12	
2. 平日昼間	1			1	
3. 土・日曜日	1			1	
4. その他		1		1	金曜夜
記入なし		1		1	
計	8	8	0	16	

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	3			3
2. よい	5	8		13
3. 少なくしてほしい				0
記入なし				0
計	8	8	0	16

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	5	5		10
2. 普通	3	3		6
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	8	8	0	16

(ご意見欄)

○一部、難しい内容があつて解らないところもあつたが、全体的な流れは解つた。ただ、環境問題に対して我々ができる事とはなになのか、少しわかりにくいところがあつた。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	5	7		12
2. 普通	3	1		4
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	8	8	0	16

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

- 一般教養 (文学・歴史・科学) …②
- 消費生活・経済…③
- 医療・健康…⑤
- 子育て…③ ○就学前に必要なこと
- 自然環境…③ ○地球温暖化 ○一身田の中の動植物
- その他…① ○迷信の影響

Ⅳ. 意見・感想・要望など

- とてもいい勉強になりました。ありがとうございました。
- もっと多くの人にPRをして (自治会、PTA、老人会、民生児童委員、組長、子ども会の親) などに連絡してはどうか。
- 自分は関係ない。自分は心配していない。の人が70%位いるが…困っている。
- 参加者が少ないのが残念です。
- 地域 (団地内) で地震マップを作りたい。

第4期 第1回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題 目 あなたの「子育て」応援します！

日 時 2007年10月5日（金） 19時30分～21時00分

場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室

参加者 15名（一般参加 11名 一身田中教員 3名 三重大学 1名）

アンケート結果 n=10（男=4、女=5、記入なし=1）

I. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男				1	1	2				4
女				2	2	1				5
記入なし							1			1
計	0	0	0	3	3	3	1	0	0	10

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？（複数回答あり）

	男	女	記入なし	計
<input type="checkbox"/> 学校からの案内状	1		1	2
<input type="checkbox"/> 地域のお知らせ	1	5		6
<input type="checkbox"/> ホームページ				0
<input type="checkbox"/> その他		1		1
計	2	6	1	9

II. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	2	7	1	10
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい		1		1
2. よい	2	6	1	9
3. 短くしてほしい				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	2	4	1	7
2. 平日昼間		1		1
3. 土・日曜日		2		2
4. その他				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	1			1
2. よい	1	6	1	8
3. 少なくしてほしい				0
記入なし		1		1
計	2	7	1	10

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	2	6		8
2. 普通		1	1	2
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

(ご意見欄)

○一部、難しい内容があつて解らないところもあつたが、全体的な流れは解つた。ただ、環境問題に対して我々ができる事とはなになのか、少しわかりにくいところがあつた。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	2	5		7
2. 普通		2	1	3
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	2	7	1	10

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

- 一般教養 (文学・歴史・科学) …③ 一身田の町のなりたち
- 消費生活・経済…③ わかりやすい政治のからくり
- 医療・健康…③ 薬と健康 (上手な薬の飲み方)
- 子育て…② ファミリーサポート事業など
- 自然環境…①
- その他…

IV. 意見・感想・要望など

- 少し空調が寒かった。
- 一身田には、子育てに関する環境があるということを再確認できた。子ども会・PTA・婦人会・老人会・自治会・商工会・消防団など、それぞれの団体が生き生きと活動している一身田。この私たちの町にNPOハウスが来ていただいたことは、個人的にとてもうれしいことです。自己肯定できる人間となり、自分も親育ちしながら子どもたちに向かっていける地域人になりたいものです。チャイルドラインの受け手となれるか疑問ですが、田部さんのお話を聞き、簡単なことではないと感じつつ、トライしてみます。
- チャイルドラインの活動により、たくさんの子どもが救われ、元気をもらって、また活動していると思うととてもありがたいと思います。
- 自分の子育てを振り返る良い機会となりました。もっと小さい頃に「こうすればよかった」と思うことがたくさんあります。ありがとうございました。
- むごたらしい事件がこんなにも多くあるのは、どう考えたらいいの？ 大きな大きな問題なのに、興味本位ばかりに報道されるこの頃・・・こんなカルチャースクールでこつこつとみんなが学んでいくことが近道なのか？大切な子育て！本当に皆真剣に考えなくては・・・と思う。ありがとうございました。
- チャイルドラインの仕事は大変だなと思っています。チャイルドラインにのってこない子どもたちをどう受け止めていくのか？ 自己表現ができずにチャイルドラインにのれない子も多くなります。この子達もチャイルドラインを利用してくれると・・・とおもいます。親が悩み、その悩みを子どもたちが子どもたちが悩みを持って、ひょうげんできなくなっている。親の悩みが子どもに乗り移っている。この子どもたちをどう確立した子にさせてやれるか、ともに考えていきたいです。

第4期 第2回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題 目 「介護」に対処する法！

日 時 2007年10月19日（金） 19時30分～21時00分

場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室

参加者 10名（一般参加5名 一身田中教員4名 三重大学1名）

アンケート結果 n=8（男=6、女=2）

I. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男		1		1	1	2	1			6
女			1	1						2
記入なし										0
計	0	1	1	2	1	2	1	0	0	8

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	1	1		2
□地域のお知らせ	3			3
□ホームページ				0
□その他	2	1		3
計	6	2	0	8

Ⅱ. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	6	2		8
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	6	2	0	8

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい				0
2. よい	6	2		8
3. 短くしてほしい				0
記入なし				0
計	6	2	0	8

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	5	2		7
2. 平日昼間	1			1
3. 土・日曜日				0
4. その他				0
記入なし				0
計	6	2	0	8

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	3	1		4
2. よい	3	1		4
3. 少なくしてほしい				0
記入なし				0
計	6	2	0	8

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	4	2		6
2. 普通	2			2
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	6	2	0	8

(ご意見欄)

○一部、難しい内容があつて解らないところもあつたが、全体的な流れは解つた。ただ、環境問題に対して我々ができる事とはなになのか、少しわかりにくいところがあつた。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	3	2		5
2. 普通	2			2
3. よくなかった	1			1
記入なし				0
計	6	2	0	8

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

- 一般教養 (文学・歴史・科学) …③ ○津市の歴史について
- 消費生活・経済…③
- 医療・健康…④
- 子育て…①
- 自然環境…②
- その他…

Ⅳ. 意見・感想・要望など

○ 家で介護できない親をかかえています。自宅を改修しようと思っています。近々相談しに行こうと思っています。

第4期 第3回一身田カルチャー・スクールアンケート結果

題 目 どう考えたらいいの？環境問題
 日 時 2007年11月2日(金) 19時30分～21時00分
 場 所 高田青少年会館 2階・第1会議室
 参加者 10名 (一般参加6名 一身田中教員2名 三重大学2名)

アンケート結果 n=9 (男=6、女=3)

I. 質問事項

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	記入なし	計
男		2		1	1	1	1			6
女			1	1		1				3
記入なし										0
計	0	2	1	2	1	2	1	0	0	9

○ 「一身田カルチャー・スクール」を、どうやってお知りになりましたか？(複数回答あり)

	男	女	記入なし	計
□学校からの案内状	2	1		3
□地域のお知らせ	2	1		3
□ホームページ				0
□その他	2	1		3
計	6	3	0	9

Ⅱ. 「一身田カルチャースクール」について

○開始時間	男	女	記入なし	計
1. 早くしてほしい				0
2. よい	6	3		9
3. 遅くしてほしい				0
記入なし				0
計	6	3	0	9

○講義時間	男	女	記入なし	計
1. 長くしてほしい				0
2. よい	5	3		8
3. 短くしてほしい				0
記入なし			1	1
計	5	3	1	9

○開始時間帯	男	女	記入なし	計
1. 平日夜間	5	3		8
2. 平日昼間	1			1
3. 土・日曜日				0
4. その他				0
記入なし				0
計	6	3	0	9

○講座回数	男	女	記入なし	計
1. 多くしてほしい	2	1		3
2. よい	3	3		6
3. 少なくしてほしい				0
記入なし				0
計	5	4	0	9

○講座内容	男	女	記入なし	計
1. よい	5	2		7
2. 普通	1	1		2
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	6	3	0	9

(ご意見欄)

○一部、難しい内容があつて解らないところもあつたが、全体的な流れは解った。ただ、環境問題に対して我々ができる事とはなになのか、少しわかりにくいところがあつた。

○会場	男	女	記入なし	計
1. よい	5	2		7
2. 普通	1	1		2
3. よくなかった				0
記入なし				0
計	6	3	0	9

Ⅲ. 今後、どういう講義を希望されますか。

- 一般教養 (文学・歴史・科学) …⑤ 近代史 一身田の町の歴史、ゆらいについて
 今後実行可能な市民レベルでの環境保全活動など 歴史的な分野
- 消費生活・経済…① 株式など
- 医療・健康…③ 成人病など
- 子育て…①
- 自然環境…
- その他…

Ⅳ. 意見・感想・要望など

- 人間の作った自然はうまくいかないと思います。
- 環境問題は、実は人間の生活を豊かにする中で起こってきたものですね。だったとしたら、人間の生活の豊かさをどう考えていくかが、環境問題の解決でしょうか。地球は、人間の開発に耐えることはできないのでしょうか。地球というものは、新しい環境を作り出すことは無いのでしょうか。

第3期・第1回カルチャースクール



第3期・第2回カルチャースクール



第3期・第3回カルチャースクール



第4期・第1回カルチャースクール



第4期・第2回カルチャースクール



第4期・第3回カルチャースクール



(3) 一身田中学校におけるキャリア教育の取組(中学校活動情報誌より)

「自分発見！ 14歳のジョブチャレンジ」は、2年生のキャリア教育の中心的な学習として毎年行われています。19年度は、9月19日(水)～21日(金)の3日間、津市内を中心に50事業所の協力のもと160名が職場体験を行いました。この学習のねらいは、生徒一人ひとりが働く人々に接し、姿や意見を見聞することにより職業の社会的な意義や役割、職業を通しての生きがい等を理解するとともに、体験を通して地域の人々との交流をはかり地域社会の一員としての自覚を高めるものです。また、就業体験を通して、自主性・独創性、責任感、コミュニケーション能力などの実社会における社会人としての適応力を高めるとともに、新発見や感動体験をもとに将来の進路選択について考える力を養うことを目指しています。

事前学習として三重大学教育学部の山根教授を講師に迎えて、「職業の種類」「働くことの意義」「職種と収入の関係」「職場体験学習での視点」などの職業体験を有意義に行うためのポイントについての講話を受けました。



特に働くことの意味について、生徒は「働くことは社会貢献である」「自分の仕事が世の中の人のためになるもの」「自分を必要とされること」といった自己と社会とのつながりについて考えを深めることができました。また、社会で働く人々が、仕事をする中で生じる

厳しさや難しさを乗り越えた先にある達成感や成就感を得ることで新たな勤労意欲が生まれることを知り、自己の将来の目標や生き方をしっかり考えるための第一歩を踏み出しました。

職業体験の一例

● 事業所名	吉田クリニック	住 所	津市栗真中山町
		電 話	059-232-3001

事業所紹介のキャッチコピー

笑顔の職場 笑顔の患者



吉田クリニックでは、職場の人たちにいろいろなことを教えていただきました。例えば、ポリープを発見するための大腸の内視鏡検査や胃カメラの検査法について説明していただきました。

また、3日目の北郊デイサービスでは、お風呂の手伝いやレクリエーションなどをさせていただきました。

吉田クリニックの皆さんは、明るく元気な人たちばかりでした。この体験を通して、人のために働くことの大変さや楽しさを学ぶことができました。

● 事業所名	マックスバリュート津北店	住 所	津市一身田上津部田 125-1
		電 話	059-233-6370

事業所紹介のキャッチコピー

安心第一、マックスバリュート津北店



マックスバリュート津北店の従業員の方々はとても親切で、いい体験をさせていただきました。職場体験では、あいさつを大きな声で出すこと、賞味期限などに気をつけて賞品を並べることなどの基本的なことを学ばせてもらいました。

スーパーの仕事は、すごく体力のいる仕事で、お客様への気配りがとても大切だということが分かりました。この経験を将来に活かしていきたいと思いました。

● 事業所名	つるや菓子店	住 所	津市一身田町 554-2
		電 話	059-232-2007

事業所紹介のキャッチコピー

子どもから大人まで親しまれる店



つるや菓子店は、幅広い年齢層の人たちに親しまれているお店です。

販売されている商品には、饅頭やケーキなどがあります。私たちが体験した仕事は、お菓子の箱詰めと栗の皮むき、あん玉づくり、チラシ配りでした。チラシ配りでは、1軒1軒のポストを探すのが大変でした。また、仕事のほとんどが立ち仕事で体力的にとっても疲れしました。

3日間で学んだことをこれからの生活に活かしていきたいと思っています。

[3] 平成 19 年度 の 取 組 (2)

(1)理科教育講座における取組

本年度、理科教育講座で実施した取組は以下の通りである。

- ① 一身田中学校および一身田小学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖&調理実習）の実施
- ② 一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施
- ③ 一身田中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展
- ④ 一身田小学校における理科の出前授業

以下に各活動の目的と概要を述べる。

1) 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム(解剖実習と調理実習)の実施

目的： 正しい生命観を身につける上で、小中学校の理科では「解剖実習」を行うことは大きな意義がある。しかし、生命尊重を重要視されるようになってから解剖はほとんど行われなくなり、指導要領にも記載がない。しかし、私たちヒトの体を知る上で、共通した体のつくりを実物でみることは初等中等理科教育で必要なことであるとは考えている。解剖の問題は、学習後に廃棄してしまう点にあるだろう。食材となる魚介類を用いて、解剖後に「調理実習」を行うことで食べれば無駄はなく、「命をいただいている」という食育の基本を学ぶことにもなる。教育学部の理科教育講座と家政科教育講座では、理科と家庭科のクロスカリキュラムとして「解剖&調理実習」の学習プログラムを検討している。昨年度は、材料としてザリガニ、ニジマス、バカガイを使って、一身田中学校2年生3クラスを対象に試行した。授業には理科と家政科の教員と補助学生が主に実施にあたった。その結果、生徒の反応はニジマスが最も良く、中学校教員からも内容について高い評価を得た。そこで本年度は、一身田中学校2年生5クラスすべてでニジマスを使った実習を行い、実際に中学校の理科と家政科の教員に実施をしてもらうことで、この実習の意義や必要性を感じてもらえるかどうか明らかにしたいと考えた。また、一身田小学校6年生を対象としても実施し、解剖実習を行うのに適した学齢期を調べようとした。

概要： 一身田中学校2年生5クラスで、ニジマスの解剖と調理実習を11月に行った。2年生は2学期はじめに動物の体のしくみについて学習するため、その後で実物をみせて理解を深めたいという理科担当の中川教諭の提案に基づいている。すでに昨年度に実施しているため、基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を1時間ずつ行った。解剖の授業は、最初の3クラスは大学の後藤があたり、後の2クラスは中学校の中川教諭があたった。調理についてはすべて中学校の安野教諭が授業を行った。生徒は6班に分かれて進めるために、各班に1名の教員または学生が補助にあたるようにした。大学からは家政科の磯部と吉本が参加した他、教育学部の大学院生および学部生（理科と家政科4—5名）があたった。活動は表の通りである。

実施日	時限	クラス	授業者	補助
11月1日	3,4	2年2組	後藤、安野	学生5名
11月2日	1,2 3,4	2年4組、5組	後藤、安野	磯部、吉本、学生4名
11月7日	1,2	2年3組	中川、安野	後藤、学生5名
11月12日	2,3	2年1組	中川、安野	後藤、学生5名

この解剖&調理実習の基本的なスタンスは、「魚介類の調理の前に、体の中をみてみよう」と調理が第一目的であり、その過程で体のつくりについて勉強し、命について考えることをねらいとしている。したがって、実習で用いるニジマスは身近な素材でかつ新鮮でおいしいものであることを生徒に示すことから始めている。解剖実習のポイントとしては、生きている動物を解剖して心臓の動きを見ることで、生命を実感することと、体のつくりの基本を消化器系の観察を通じて学び、ヒトとの共通性を理解してもらう点にある。また、調理実習のポイントは簡単でおいしいことに絞っている。

昨年度は、実習プリントを配付しても実習中に汚れて使えなくなることもあったため、本年度はカラー印刷でPP加工を施した4ページの実習プリントを作製した(資料1)。これは生徒が解剖をイメージでき、解剖中に実物と照合しながらの学習を進めることに役立ったと思われる。濡れても破損することがないために、その後の学習にも使用できる。

昨年度の2年生が解剖&調理実習を体験したことが生徒の間に広まっているため、この実習を楽しみにしていた生徒も多かったようだ。普段は不登校気味の生徒もこの日は来て参加していたことを聞いた。生きている魚を解剖するという経験をもつ生徒はほとんどいないため、最初は手をつけることができない生徒も、熱心に観察していた。また、すでに死亡したニジマスがいて、それを選んで解剖した生徒もいたため、生徒に合わせて材料を使い分けることも必要であることがわかった。実習の様子を資料2にあげた。本年度の理科担当の中川教諭は本年度はじめてこの実習に関わった。解剖実習の経験が少なかったためか、生徒の反応の良さに驚いたようであり、担当された2クラスの授業には熱意が感じられた。この授業は新聞でも報道され(資料3)、一身田中学校における「特色ある授業」の1つとして位置づけられる方向に前進したと考えている。

昨年同様、この実習前に生徒の食に対する意識、実習後ではこの実習の感想や食に対する意識に関してアンケート調査した。体のつくりがよくわかっただけでなく、他の動物の体のつくりについても関心をもった生徒が半数以上で、約半数の生徒が解剖した後で調理して食べることについて抵抗が少なく、解剖実習をした後でたべることはいいことだと回答していた。実習を終えて「命をいただいている」と感じた生徒が8割以上であったことから、生きた動物を解剖しているからこそ実感できることで、この実習の意義は大きいと言える。また、試験でも、動物の体のしくみに関する知識の定着率が高かったようだ。この実習の調理の指導にあたった安野教諭は、すでに昨年度経験していることから、特に事前の打ち合わせもなく進められた。この実践の一部は2007年度の理科教育学会で報告したので、資料4として掲載した。

また、6月25日には一身田小学校6年生を対象にこの実習を行った。ちょうど動物の体のつくりの単元を終えた時期であり、実際に実物を見ることの意義は大きい。担当の西村教諭との連携により、6月11日にはドジョウを用いた血流観察と心臓の観察、およびミジンコを用いた心臓の観察を実施し、この解剖&調理実習を迎えた。児童らはこの実習を楽しみにしていたようで、ほぼ全員が熱心に取り組んでいた。普段の授業では集中できない児童もいたようだが、むしろその児童が積極的に参加していた。解剖に関しては中学生よりも受け入れやすい時期であることが、アンケート結果からわかった。また、参加学生は理科教育コース3年の「生物学実験」の受講生であり、この授業の一環として各班に1名の割合で指導にあたった。2年生の時にニジマスの解剖実習の経験もある上に、「生物学実験」でも魚類を扱った実習をしている。前期であれば、この授業の一環として学生が指導に関わるのが可能である。

【資料1】ニジマスの解剖&調理実習プリント

ニジマスの解剖 & 調理実習

ニジマスとヒトの内臓は同じだった!!!

ヒトの祖先を約4億年たどると、魚に行きつくんじや。つまり、魚はヒトたちの先祖じゃから、からだのつくりはヒトとほとんど同じなのじゃよ。

へー、そーいうことだったんだ!!!

解剖の手順(料理する気持ちでやろう!)

- 1 肛門の前にハサミで切れこみを入れる
- 2 腹に向けておなかをまっすぐ切り進ば(ハサミの先をおなかの中に深く入れないこと)
- 3 線にそって切り進む
- 4 4片方の体の肉を切り取る
- 5 最後に腹のようにぐえらふたを切り取る

解剖の手順

ニジマスの解剖図

1

ニジマスの全体像

ニジマスの内臓

ニジマスの内臓(抽出)

2

ニジマスの鰓

※最も内側にある鰓弓(V)は、鰓弁がなく鰓耙のみ

ニジマスの排泄系

ニジマスの脳

3

ニジマスのムニエル

材料(3人分)

- ニジマス...3尾
- 塩...適量
- 塩こしょう...各少々
- 小麦粉...適量
- バター...10g
- サラダ油...大さじ1

レモンソース

- にんにく(みじん切り)...1片分
- サラダ油...小さじ1
- バター...20g
- しょうゆ...大さじ1
- レモン汁...大さじ1

準備ができた、調理に入ろう!!

- 1 ニジマスに塩をひとつまみふりかけて、クッキングペーパーで皮目をこすってぬれを取る。
- 2 皮と腹の中を洗い、クッキングペーパーで水気をとる。
- 3 塩こしょうをふり、小麦粉を薄く全体につける。
- 4 フライパンにバター、サラダ油を入れ弱火で熱する。
- 5 ニジマスの頭を右にして並べ、フライパンをゆすって、動かになったら弱火にして、ふたをして焼く。
- 6 こけ目がついたら、フライパンをうら返し、もう一度ふたをして、中に火が通るまで焼く。
- 7 焼けたニジマスをお皿に盛りつける。
- 8 ペーパータオルでフライパンをふいてから、サラダ油を入れてにんにくのみじん切りを弱火でこかさないように炒める。
- 9 香りが出たらバターを加え、溶けたらしょうゆを加えて、火を止めたレモン汁を加え、レモンソースを作る。
- 10 ニジマスにレモンソースをかけて、できあがり!!

資料作成:名古屋大学大学院農学研究科・京宮研究室
三重大学教育学部理科教育・後藤研究室
三重大学教育学部家政科教育・藤原研究室、吉本研究室

4

【資料2】 ニジマスの解剖&調理実習の様子



理科と家庭科 合同授業 ニジマス解剖し料理



解剖したニジマスを調理する生徒たち
 津市一身田中野の一身田中学校で

2
年
生
身
田
中

命の大切さを学ぼう

津市一身田中野の一身田中学校で12日、2年生31人がニジマスを使った理科と家庭科を一緒にした「クロスカリキュラム」授業を受けた。解剖に使ったニジマスを料理し、命の大切さを学んだ。

(吉田優美恵)

同校は三重大教育学部と連携して教育に取り組みしており、この日も理科の解剖実習と家庭科の調理実習で学生六人がアドバイザー役を務めた。生徒たちは理科の中川克巳教諭から解剖の手順の説明を受けた後、二人で一匹ずつニジマスを解

焼いてムニエルに利用

剖した。肛門(こうもん)の近くからはさみを入れて、腹を切り裂いた。マスが飛び跳ねると「キヤー」と悲鳴が上がっていたが、生徒たちは心臓や消化管の構造をじっくり観察していた。

この後、内臓を取り除いて洗い、塩、コショウ、小麦粉をつけてフライパンで焦げ目がつくまで焼いてムニエルにして味わった。

太田憲史朗君(ニ)は「解剖を思い出すとちょっと食べづらいけど、おいしい。命を無駄にしないで料理するのはいいことだと思つ」と話していた。

食材となる身近な魚介類を用いた解剖実習の試行

○中川敬史^A、磯部由香^B、吉本敏子^B、宗宮弘明^B、後藤太一郎^A

NAKAGAWA Keishi, ISOBE Yuka, YOSHIMOTO Toshiko, SOHMIYA Hiroaki, GOTO Taichiro
三重大学教育学部理科^A、三重大学教育学部家政科^B、名古屋大学大学院生命農学研究科^C

【キーワード】 解剖、調理実習、魚介類、生命観、食育

1. 目的

生命科学に関する初等教育において、生きものを解剖するという学習経験は、動物の体のつくりを理解するためだけでなく、生命を尊重する態度を育成する上でも重要な意味をもつ。また、魚介類など身近な食材について体のつくりを知ることは、生命科学への関心を高めるだけでなく、日本の食文化を培う上で、児童・生徒だけでなく社会人にとっても必要なことである。

本研究は、初等中等理科教育における動物の解剖実習を進めるために、食材となる身近な魚介類を用いた調理実習を目的とした家庭科の授業と、動物の体のつくりに関する理科の授業を連携させた実習を行ない、児童生徒が動物の体のつくりについて理解するために効果的な解剖学習プログラムを作成することを目的とした。

2. 方法

材料には、甲殻類としてザリガニ、魚類としてニジマス、貝類としてバカガイを使った。津市立一孝口中学校2年生3クラス(総計108名)を対象とし、各クラス1種の動物を使って平成18年度2・3学期に同校調理実習室で実施した。

解剖実習：解剖の意義を説明した後、外部・内部形態の観察を行った。内臓形態については、鰓、胃、腸管、肝臓等の消化管を観察して、消化器系が人と共通していることを気付かせようとした。また、心臓の拍動を見ることで生きていることを実感させようとした。

調理実習：短時間で調理ができるメニューを考えた。食中毒にならないよう解剖に用いた食材の洗浄と手洗いは特に徹底させた。料理は、ザリガニはカクテルサラダ、ニジマスはムニエル、バカガイはクラムチャウダーとした。

アンケート調査：動物の体のつくりへの関心度と食に対する意識について、実習の事前と事後

の2回アンケート調査を行った。

3. 結果・考察

事前アンケート結果から、身近な魚介類の体の構造を知っている生徒は少なく、解剖を経験したことのある生徒も30%しかいなかった。また、解剖を試してみたいという生徒は18%であった。3種の魚介類の解剖実習では、熱心に取り組む生徒がいる一方で、解剖することを選ばない生徒もいた。しかし、自ら解剖しない生徒も他の生徒が行っている様子を観察していた。

ザリガニの実習では、80%の生徒が解剖することに抵抗があったが、91%の生徒が体のつくりがおかかったと回答していた。他の動物の体のつくりに関心を持った生徒は31%であった。料理については、おいしいと回答したのは32%と低かったが、これはザリガニ自体より調理の味が悪かったようだ。ニジマスの実習では、解剖に抵抗があったのは63%で、積極的に解剖に取り組む様子が見られた。やはり97%の生徒が体のつくりについてわかり、他の動物の体のつくりについても66%の生徒が関心を持つようになった。料理も66%がおいしいと満足していた。バカガイの実習では、解剖することに69%の生徒に抵抗があったが、実習後には98%の生徒が体のつくりについてわかったようで、52%の生徒が他の動物に対しても興味を持ったと回答していた。料理も83%が満足していた。

身近な魚介類であっても、材料により解剖することへの抵抗に差があったが、興味関心と料理の味とも関係しそうだ。また、この解剖実習を通して、命をいただいて自分たちが生きていることを感じる体験にもなったようだ。今後は、選択理科などの授業で同じ生徒を対象として、3種類の身近な魚介類を使い、さらに効果的な実習を検討する計画である。

2) 一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施

目的： 三重大学教育学部理科教育講座では、年間を通して、学生が一身田中学校の理科授業の観察・補助を行い、また学生による授業を行う試みを行っている。この試みを通じて、教育現場に基礎を持つ教師養成教育（school-based teacher training）のモデルを構築し、また地域の学校教育への貢献となることを目指している。

概要： 一身田中学校との連携は既に昨年度から始まっているが、授業に日常的に参加し、授業支援を行ったり、授業の一部を分担させていただく活動は今年度から始まったものである。

対象は一身田中学校の1年生4クラスで、連携に参加したのは、理科教育ゼミナールの受講生（3年生8名、4年生1名）である。一身田中学校の授業に参加したのは、前期が6月上旬～7月中旬、後期が12月である。その間、3年生は4週間の教育実習を経験している。

前期に扱った単元は、「植物のくらしとなかま」と「身近で起こる不思議な現象」であり、通常授業では、生徒が学習課題の解決に困っているときにアドバイスを与えるなど、ティーチング・アシスタントとしての役割を担当した。実験指導では、スケッチの仕方、顕微鏡のピントの合わせ方などの個別指導を行い、全体への指導を行っている理科教師を補佐した。

後期の活動においては、教育実習を経験しており、その経験を生かして、全体指導を行った。扱った単元は「身のまわりの物質」である。

学生が担当したのは、アンモニアの噴水実験の演示である。アンモニアは、代表的な気体の一つとして教科書にも取り上げられている。水に溶解しやすく、また溶液が塩基性を示す性質がある。この性質を効果的に理解させるには、それを劇的に示すことが出来るアンモニアの噴水実験が適当であると考え、実施した。実験に際しては、事前に、授業の中でのアンモニアの噴水実験の位置づけを確認し、予備実験を行い、生徒達の反応を予想するなど周到な準備で臨んだ。

前期、教育実習後、後期のそれぞれの活動後に、活動を振り返るアンケートを行って学生の意識の変容を見ている。代表的なものを例示してみる。

前期を振り返ったアンケートで学生Aは「班活動でも自ら動こうとしない生徒がいて、いったいどう声をかけていいかわからなかった」と答えていた。学生Aは生徒指導の不安を抱えていたことがわかる。しかし、教育実習を終えてからのアンケートでは「人と人との関わりが経験でき、積極的に子どもたちに接しようとするようになった。」と答えており、教育実習後には、生徒との積極的な関わりができるようになったことを実感している。このアンケートは教育実習だけでなく、前期の授業連携もあわせて振り返ることを求めているものなので、以上の変化は教育実習だけでもたらされたものではなく、前期の不安をもととした成長であると考えられる。

また学生Bが前期を振り返ったアンケートでは「学生ではなく教師側として、ある程度毅然とした姿勢で接することが出来た」と答えている。学生Bは教師の視点を一定程度獲得していることがわかる。一方、教育実習を終えてからのアンケートでは「生徒の目線というものを学ぶことが出来

た」と答えている。学生Bは教育実習後には、生徒の視点でも授業を見ることができたと感じている。以上の変化は学生Aと同じく、前期の授業経験をもととした成長だと考えられよう。

授業連携活動全体を振り返った結果では、学生Aは「子ども達は今何を考えているのか読み取り、授業の流れをそのクラスに応じて変えていかなければならないと思えるようになった」と答えており、学生Bは、「生徒に向かって授業することが楽しく思えた」、「状況に応じて作戦を練るのが楽しく思えるようになった」と答えている。表現は若干異なるが、学生Aも学生Bも、子どもの実態を読み取り、それをもとにして、次の手立てを考えることができるようになってきたと言える。

以上の例は、学生の成長が比較的読み取りやすいものであるが、すべての学生が多かれ少なかれ、1年間の授業連携を通じて自分の成長を実感しており、授業連携の有用性が実証できたと思われる。

3) 一身田中学校「選択理科」における「青少年のための科学の祭典」への出展

目的： 児童・生徒を対象とした様々な科学啓発活動が全国的に行われている。その中でも「青少年のための科学の祭典」は最も規模が大きく、三重県でも毎年4カ所で開催されている。参加者の多くは小学生であるが、毎年約5,000名の参加者がある。小学生の時に科学の祭典の楽しさを体験したことのある中学生は、科学の祭典で小学生を指導する立場となることで、一層理科学習への取り組みが高まっている。三重大学では毎年「青少年のための科学の祭典」三重大学大会を開催しており、2日間で約3,000名が参加する大きな大会となっている。そこで、一身田中学校の2年生選択理科の受講生が実験ブースを出展し、理科を楽しく教える立場となる体験をしてもらうことを目的としている。

概要： 本年度の「青少年のための科学の祭典」三重大学大会は12月1、2日に開催された。2年生選択理科の受講生による出展は、児童に人気の高い「スライムづくり」を大学教員から担当の中川教諭に提案した。実験解説書に掲載したものを次ページに掲載する。中川教諭は選択理科の授業の中で2回練習を行った。開催日には14名の受講生が指導に当たり、2日間で約700名の児童がこのブースを訪れた。



出展ブースでの光景

【資料5】 青少年のための科学の祭典・三重大学大会で参加者に配布された実験解説書の掲載文.

【No. 4】

スライムを作ろう

津市立一身田中学校 中川克巳

●どんな実験なの？

スライムってどんなものか知っていますか？ゼリーのような感触で、固まっているようで固まっていないものです。身近にある洗濯のりとホウ砂という材料で簡単に作ることができます。おもちゃになるだけでなく、どうしてこのようなものができるのか、化学の勉強にもなります。好きな色をつけて作ってみましょう。

●実験のしかたとコツ

【材料】プラスチックカップ、割りばし、洗たくのり(PVAと書いてあるもの)、色水、ホウ砂水溶液(飽和)

【作り方】

- ① 水をカップに1/3ほど入れ、色素で着色する。
- ② 洗たくのりをカップに1/3ほど入れて(水と同量)、割りばしで混ぜる。
- ③ ホウ砂水溶液を少しずつ入れてよくかき混ぜる。
- ④ 適当なかたさになったら、手の上で転がすようにまとめる。

●気をつけよう

- ・ 食べ物ではないので、口に入れないでください。
- ・ 洗たくのりなので、紙や布の上に置くと、くっついて取りにくくなります。服につけないように。
- ・ 水分がなくなると干からびてしてしまいます。ビニール袋などに入れて保管しましょう。
- ・ 遊んだ後は、手を洗いましょう。

●もっとくわしく知るために

同じ分子が結合して、鎖のようにつながった分子をポリマーと呼びます。このスライムは、もともとポリマーだったPVA(ポリビニールアルコール)が砂によってつながり、さらに大きな分子になったものです。

4) 一身田小学校における理科の出前授業

現代 GP 一身田小学校 3 年生 出前授業「おもしろ理科実験」 授業者：牧原義一

2008 年 2 月 28 日（木）10：45～12：15（90 分）

教室：一身田小学校 理科教室，人数 40 名（3 年 1 組），6 班に分ける

補助：学生 3 名（小山勝弘，杉本佳隆，山下大輔；理科教育コース 2 年生）

<目的>

3 年生理科の単元「6. じしゃくのふしぎをさぐる」の内容について，簡単な実験器具を用いて，磁石の基本的な性質（磁極）を調べる実験とデモンストレーション的な実験を行い，子供たちの磁石に対する興味と理解を深めさせる。

<概要>

下記の授業内容に示すように，磁石の性質についての簡単なお話のあとに，3 つの実験を行った。それぞれの実験について，授業者が演示実験を行って実験のやり方を簡単に説明したのち，各班で子供たちが実験を行った。遊びの要素も含む実験であったため，子供たちは自分たちのアイデアも実験に加えながら，楽しそうに実験を行っていた。

<授業内容>

(1) 磁石の性質についての説明

磁石のいろいろな性質について，磁石と磁鉄鉱（磁鉄鉱を各班に配る）について

(2) 実験

・実験する際の注意事項の説明。以下の○は，授業が始まる前に実験台の上に置いておく。

実験 1：いろいろな磁石の N 極，S 極の観察

- 「メモレ BR」を使用して N 極と S 極を色の違い（N 黒，S 赤）として観察する，各班にメモレ BR を 2 個ずつ配る，使い方の説明
- ・磁石セットの磁石の観察，リング磁石，丸磁石，板磁石の観察
- ・切れる磁石（割れる磁石）の切る（割る）前後の磁極の観察（ハサミ（金づち）使用）
- ・磁極の性質のまとめ



実験 2：パイプ中のネオジム磁石の落下実験

- アクリル，アルミ，銅パイプとネオジム磁石球を使用，各班にパイプ各 1 本，磁石 2 個を配る
- ・演示実験（ネオジム磁石の強さ説明）
- ・各班で同じ実験，それぞれのパイプでの速さの比較なども
- ・アルミチャンネルの中を落とす（演示実験）



実験 3：ガウス加速器／ガウスライフル

- レール（1 本），鉄球（5 個）を各班に配る
- ・演示実験
- ・各班で同じ実験（交替しながら），標的に当てる，2 段加速 など

(2) 家政教育講座における取組

食に関する授業における小・中学校との連携

家政教育講座 磯部由香

1. 小学校での取り組み

(1) 栗真小学校での「牛乳」を題材にした授業

小学校の教員からの提案により、5、6年生を対象とし、総合的な学習の時間および家庭科の授業において、牛乳を題材とした食に関する指導を実践した。まず、小学校の教員と大学の教員で協議しながら授業計画を作成した。「牛乳を使った調理実習」では、児童が自分たちで調べ学習から牛乳を使った料理を考え、実際に調理して試食した。実習時には家政教育コース4年生が補助に入った。「牛乳についての実験」については、大学教員が授業を行い、家政教育コースおよび消費生活科学コースの4年生が補助を行った。

(2) 一身田小学校でのさつまいもの授業

小学校からの要請により、2年生の生活科において、「さつまいもにチャレンジ！～みんなでさつまいもパーティー」をテーマにさつまいもを題材とした食に関する指導を実践した。まず、家政教育コース4年生が授業案および生活科と食に関する指導の評価を作成し、これを元に小学校教員と協議し授業計画を作成した。学生は、「さつまいもの収穫」、「調べ学習」の参観をさせていただくとともに、栄養についての紙芝居の実践を行った。調理実習については、大学で試作を重ねてさつまいもを使ったお菓子のレシピを完成させ、手順の説明を担当し、実習時には補助を行った。

上記、2つの活動を通して、学生たちは学年に応じた実習の指導方法や調べ学習の方法を知る機会を得ることができた。また、実習や実験といった体験活動の学習における有効性についても実感したようである。詳しくはフォーラム in 一身田でのポスターを参考にされたい。

2. 中学校での取り組み

一身田中学校での弁当づくり実践は、「弁当」という教材の家庭科および食に関する指導における有効性を明らかにしたいという私の希望を中学校の家庭科担当教諭が受け入れてくださるという形で実現した。この取り組みを行うにあたっては、昨年度の実践から、生徒、現場教員、教育学部生、大学教員の四者すべてにとって意義があるように、目的を明確にして実践したいと考えた。それぞれの目的は下記のとおりである。

- ・中学生：弁当づくりを通して食に関する知識を身につけ理解を深める
- ・中学校教員：大学教員と協同して新しい授業を創造する

- ・大学院生：一身田中学校という現実の場を活用して、食育や家庭科教育の理解を深める
- ・大学教員：家庭科における食に関する指導の有効性について研究する

具体的には、大学院生の立てた授業案を元に中学校教員が授業を実践し、この授業の記録を元に大学院の授業の中で授業研究を行った。また、主菜、副菜の調理実習では家政教育コースおよび消費生活科学コースの4年生が補助に入った。なお、この実践にあたっては、家政教育講座家庭科教育担当の吉本敏子教員にご指導いただいた。

研究の内容としては、中学校における食に関する指導において、重要な役割を果たす中学校家庭科の食物分野の実践について、食教育の視点も含めての検討を行った。授業で学んだ知識や体験を生活の中で活かすことができる「実践力」を育てることを最終的な目標として、生徒にとって身近な素材である「弁当作り」を題材として設定した。実践前後の変容を家庭科および食に関する指導の目標のそれぞれの項目で評価したところ、ほとんどの生徒が改善方向に変容したことから、本実践の有効性が示唆された。本研究の成果については、三重大学教育実践センター報告に掲載される予定である。

また、大学院生の立場からの意義についてはフォーラムin一身田で発表したポスターに詳細を記載してある。

3. 今後の課題

中学校での取り組みは、大学院の授業と関連させて取り組むことができたため、単に実践を行うだけでなく、深く省察し、研究的な側面でもとらえることが可能となった。小学校の実践は、大学の授業における活動として位置づけることができず、取り組みごとに希望する学生を募るという形になったことから、実践的指導力を持った教員の育成という視点としては、効果的に行うことができなかった。単発の取り組みではなく、今後も継続して実践するためには、大学の何らかの授業の中で行うという形をとるべきであろう。

また、それぞれの授業について、小学校、中学校現場と事後に十分な検討会を持つことができなかった。より効果的な実践を行うためには、必ず事後の省察を行う必要があるだろう。

(3) 保健体育講座における取組

19年度の保健体育講座の取組は表1の通りで、三つに大別される。第一に、一身田小学校における「授業研究会（3年体育科）」の開催である。第二は、一身田中学校の保健体育科授業にラート運動を導入するために、教員を対象に開催した「ラート研修会」である。第三は、栗真小学校と白塚小学校において開催した「親子活動（体ほぐしの運動）」である。その他の取組としては、一身田小学校における「キャンプファイア一時のゲーム活動検討会」、夏休み中における「学生による水泳指導」である。

ここでは、教師の学びを中核とした取組である「授業研究会（3年体育科）」と「ラート研修会」について報告を行う。これらの取組は、本プロジェクトのテーマである「学生の実践的指導力の育成」から一見、離れたものであるように受け止められよう。しかし、こうした教師たちの学びの中へ学生が参加するという営みは、将来の自分と重ね合わせる体験として有意義であることがうかがえた。重要なことは、「教師してどう学ぶか（生きるか）」というアイデンティティ形成を促すことと推察される。

(文責:岡野 昇)

表 1

月日	曜日	時	場所	対象	内容	児童・生徒	学校教員	学部生	院生	大学教員	備考
1	5月31日	(木) 5限目	栗真小	栗真小3年/児童・保護者	親子活動(体ほぐしの運動) 学生による企画・実践	27名	1名	7名(3年)	0名	1名(岡野)	保護者26名参加
2	6月19日	(火) 16時~18時	三重大	一身田小/5年担任	キャンプファイア一時の ゲーム活動検討会	0名	4名	0名	0名	1名(岡野)	
3	7月25日	(水) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導①	約100名		1名(3年)	0名	1名(岡野)	
4	7月26日	(木) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導②	約100名		1名(3年)	0名	0名	
5	7月27日	(金) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導③	約100名		1名(3年)	0名	0名	
6	7月30日	(月) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導④	約100名		1名(3年)	0名	0名	
7	8月1日	(水) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導⑤	約100名		1名(3年)	0名	0名	
8	8月6日	(月) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導⑥	約100名		1名(3年)	0名	0名	
9	8月6日	(月) 14時~16時	一身田中	一身田中/保体科教員	ラート運動の導入検討会	0名	5名	0名	0名	1名(岡野)	
10	8月7日	(火) 午前	一身田小	一身田小/全学年児童	夏休み中における 学生による水泳指導⑦	約100名		1名(3年)	0名	0名	
11	9月27日	(木) 17時~20時	一身田小	一身田小/3年担任	授業研究会(体育)の 事前検討会	0名	3名	2名(4年)	0名	1名(岡野)	
12	10月12日	(金) 5限目	白塚小	白塚小/2年児童・保護者	親子活動(体ほぐしの運動) 大学教員による実践		1名	10名(1~4年)	1名(2年)	1名(山本)	保護者参加
13	10月18日	(木) 16時~18時	三重大	一身田中/保体科教員	第1回ラート研修会 大学教員による実技研修	0名	4名	0名	0名	1名(後藤洋)	
14	11月16日	(金) 5限目	一身田小	一身田小/3年2組児童	第1回授業研究会(体育) 大学教員による授業実践	38名	3名	2名(4年)	1名(2年)	1名(岡野)	
15	12月7日	(金) 5限目	一身田小	一身田小/3年3組児童	第2回授業研究会(体育) 大学教員による授業実践	39名	3名	2名(4年)	1名(2年)	1名(岡野)	
16	12月27日	(木) 13時~17時	一身田中	一身田中/保体科教員	第2回ラート研修会 講師による実技研修	0名	4名	2名(4年)	0名	2名 (後藤洋、岡野)	講師1名(日本ラート協会) 助手1名(中京大学学生)
17	1月25日	(金) 5限目	一身田小	一身田小/3年1組児童	第3回授業研究会(体育) 学生による授業実践	39名	3名	2名(4年)	0名	1名(岡野)	

マット遊び(基本の運動)/Gボールのように転がる

授業者:岡野 昇(三重大学)、齋藤隆彦(一身田小学校 3年2組担任)

アシスタント:矢戸幹也(大学院2年)、植野このみ・加納岳拓(保健体育科4年)

1. 子どもたちの実態

器械運動に対しては、前転や後転などの運動に対して恐怖感が先に立ち、自然に運動ができにくい場面が子どもたちのなかにある。

2. 目標

運動への取り組みを楽しく行い、体の基本的な動きや、恐怖感のない自然な動きで取り組むことができるようになる。

3. 授業の様子と子どもたちの反応

いつもは担任1人で体育をすることがほとんどである。今回は体育館へ入るなり「今日は4人もおる」という声が聞かれ、何が起こるのかという期待と、先生(指導者)が4人いるという安心感が子どもの表情から感じられた。授業で初体験のことが次々と登場しても不安な表情は見せず、興味と意欲が先行していた。さらに、不安なことがあっても近くに必ず指導者が支援や声かけをしてくれるので、安心感の中で課題に自然に取り組んで行けたと思う。

手をつないで全員に力を合わせるゲームや、人とのふれあいを自然に行うことで和んでいく様子が見えた(写真1)。特に船長さんの命令ゲームでも、今まで教室でやったことはあったが、打ち解けた雰囲気で行われたことと、間違えたときに中心者が真似をするのでさらに笑いを誘い盛り上がりを見せていた。

Gボールを使っての運動では、Gボールの鮮やかな色を見て「楽しそう」「きれいな色」といった声が聞こえ、見ているだけで楽しそうに思えるほどの気分が高まってきていることを感じた。予想通りGボールと転がることで痛さや恐怖感がなくなり、「ボールになるんだよ」という指導者の声にも素直に反応していた(写真2)。特に、ボールなしで前転したときは、通常のマット運動で回りきれなかったI男が友達から「幽霊みたい」と声をかけられ「幽霊前転」と名づけられたことで脚光を浴びていた。なかなか、体育で目立つことのない児童が注目されたのは、指導者側の観点が大きいと感じた。



写真1



写真2

やってみて感じたことを全員で共有する場面を設け、人が転がっているときに見学者から「痛っ！」という声が出たのは共有している証拠だと感じ、課題に向かって集中していることを感じた。

課題を確認する集合場面では、整列させたりせずに、近くに集まって座ろうという親近感を感じた。体育授業という集合、整列ということに力を入れてしまいがちなので、苦痛に感じないで子どももリラックスしていた。

4. 授業後の様子

Gボールがとても好きになり、その後の体育館での授業は、必ずどこかでGボールを使っている。マットを使っての前転も大きさを変えるというよりは、色を変えるという感覚で子どもたちには馴染んでいる。授業後の子どもたちの感想で、特に心に残ったものをあげる。

N女： わたしは体育が苦手だけどとても楽しかったです。1年のころからみんなが体育は楽しいといってるけど、なにが面白いんだろうと思っていました。でも体育はこんなに面白いんだと思いました。

他にも、「楽しい」「ありがとう」という言葉がたくさん聞かれましたが、上記のN女の感想がすべてをあらわしていると思う。「3組、1組の体育の授業に勉強に行ってきます」とクラスで伝えると、「先生だけずるい」と大騒ぎになる。

本単元以外では、体育館全面を使ってのボール運動も行っている（写真3・4）。3組で実施されたコーン倒しでは「まず、名前が格好悪いから、かっこいい名前にしよう」とネーミングから始まった。最終的にコーンにシュートするから「コーンシュート」に全員一致で決定した。子どもたちの声を集約してGボールを使っての「天下」というゲームも行っている。ルールは以下の通りである。

- ・ ドッジボールと同じルールでコートなし、当てられた人はステージに上がる。
- ・ 当てた人がアウトになったら生き返る。
- ・ 投げるときに歩く歩数は3歩。
- ・ 後ろからは当てない。

逃げ続ける子ども、ボールを追いかけすぎてアウトになる子ども、それぞれ自分で動きを決めてGボールを追いかけしている。



写真3



写真4

(文責: 齋藤隆彦)

ボールゲーム(ゲーム)/コーン倒しゲーム

授業者:岡野 昇(三重大学)、駒田明美(一身田小学校 3 年 3 組担任)

アシスタント:矢戸幹也(大学院 2 年)、植野このみ・加納岳拓(保健体育科 4 年)

1. 子どもたちの実態

ドッジボールにおいて、勝敗に執着するあまり、あてられた子が責められる場面が見られる。また、得意な子だけが活躍し、逃げる子は逃げに徹して運動している実態がある。

2. 目標

コーンをねらってボールを投げたり、コーンを守ったりするおもしろさを味わいながら、得点を競い合うことを楽しむことができる。

3. 授業の様子と子どもたちの反応

まず、「船長さんの命令ゲーム」や手をつないで「風船」や「大きな風船」を蹴り合ったり頭でうけ合ったりして体ほぐしの運動を準備運動として行った(写真 1)。そして、友だちと自然に協力したり触れ合ったりすることができて、和んだ雰囲気の中で授業がスタートした。

次に「シュートゲーム」である。これは、相手の陣地に立てられたコーンを、ボールを使って倒していくゲームである(写真 2)。一度に 3 人ずつコートへ入っていき、ボールを持って走ったり味方にパスしたりしながら、相手チームのコーンを倒していく。一分間で何回も交代していくので、どの子どもも 20 分ほどの時間を目一杯コート内を走り回っていた。当初の子どもたちの実態であるボールゲームの苦手な子どもたちも、得意な子どもたちも、何ら関係なく生き生きと運動していたのが感動的であった。

45 分の授業のなかで 4 種類の運動内容があったが、どの運動も知らず知らずに人とのかかわり合いや協力していかざるを得ない状況にもっていくアイデアのすごさに驚かされた。



写真 1



写真 2

4. 授業後の様子

普段勝敗にとってもこだわる一部の子どもたちも、簡潔なルールのなかで目一杯体を動かしてとても楽しくゲームをすすめることができた。また、ボール運動が苦手な子どもたちも、ボールに触ることができなくても弾むように体育館を行ったり来たりしていた姿が印象的だった。特別な用具を使わなくても、学校にある用具を工夫して使うことで、あんなに子どもたちの意欲を高めることができるのだということを見せていただいた。

あの後、もう一度同じゲームをしてみた。ルールは前にあったルール以外に付け足したいものはないか相談した結果、「相手の服や体をひっぱったりひっかけたりしない」というルールだけを付け加えてゲームを行った。2回目なので、各チームとも出る順番を工夫したり選手の交代もスムーズにできたりと、どの子ども動きがよかった。前回よりも仲間にボールを回す姿も見られた。その分、相手の動きを見る余裕が出てきたのか、「円から中へ入ってシュートをしていた」という声も相手チームから出てきた。

三回目は、「教師の笛の数で出る人数が決まる」という新たなルールを付け足してゲームを進めた。一度に出る人数がその都度ちがうので、対戦する相手や自分のチームのメンバーもその都度違って、子どもたちは三回目でも楽しく意欲的に運動することができた。

今後ゲームをする際には、子どもたちと話し合っって新たなルールをつくっていこうと考えている。

5. 別の学級での子どもたちの様子

同じ内容でコーン倒しを体育館で実践してみた。大喜びで、予想を遙かに超えた子どもの反応に感動した。1分間という短い時間と繰り返される歯切れやリズムの良さ、そして自分たちで決めたルールでの運動に満足そうであった。終了時に集合したときの子どもからは、「先生、なんなんこれ、めちゃくちゃ楽しい」「あ〜、楽し。なんやこれ、まだまだやりたい、次の時間もやろ」と大盛況だった。

また、同じ週の水曜日（13日）に運動場体育であったが、○だけ書いてやってみた。前時から変えたところは、「ビブスを全員着用し、出場順に番号を着る」「教師の笛の数で出る人数が決まる」「ボールをラグビーボールで行う（転がる間のゲーム進行停止を避けるため）」の三点である。

ルール説明をしているとき子どもたちから「コーン倒し」の名前をつけたいと言い出し、話し合いの結果「コーンシュート」に決まった。ボールが不規則に弾むため、かえっておもしろく運動場で大騒ぎだった。不思議なのは、運動の苦手な子どもも楽しいと大声を出すことである。

授業終了後、他の学年の先生から「楽しそうやったなあ、何をしとったん？」と問い合わせがあるほどであった。懲りることなくまだまだやりたいと子どもからは声があがっている。

本当に、教師側の謙虚に学ぶ姿勢の大切さと、やってみる事の必要性を感じている。

（文責：駒田明美）

一身田小学校 3年1組 実践報告/2008年1月25日(金)実施

マット遊び(基本の運動)/Gボールと一緒に転がる

授業者:植野このみ(保健体育科4年)、富田幸代(一身田小学校3年1組担任)

アシスタント:岡野 昇(三重大学)、加納岳拓(保健体育科4年)

1. 子どもたちの実態

体に力が入ったまま回転運動に取り組む様子が見られる。そこで、リラックスした状態で自然に回転することを体験させたい。

2. 目標

Gボールを使って転がることを楽しみながら、マット運動での体の使い方を身につける。

3. 授業の様子と子どもたちの反応

3年2組の授業の後で、Gボールを使った運動をしてみた。二人にひとつボールを使うようにした。

子どもたちは、初めて見たカラフルなボールに触るのがうれしい様子で、意欲的に取り組むことができた（写真1・2）。その一方で、うまくボールと一体になれない子どももいた。

今回は、直径の大きいボールもたくさん用意していただいたため、2学期に使ったものと合わせると子どもたち一人ひとりが自分の気に入った大きさのボールを持つことができた。倉庫にあるマットを全部出して、体育館の一角に敷きつめ、色も大きさも様々なボールがたくさん出てきたことで、子どもたちはワクワクした様子であった。ボールに乗ってバランスをとってみる事から授業が始まった。バランスをとるのはなかなか難しく、コロコロと転がっていた。二人で、列車のようにつながると、人数を増やして行くと、友だちといっしょに転がるのも楽しそうであった。

次に、ボールを抱えて回転する運動を行った。一人ひとりがボールを持っていることで待ち時間がなくなり、運動量が保障できていた。また、思い思いの方法で回転運動をすることで、それぞれの力に応じた運動ができていたと思う。途中で大きさのちがうボールに変えてみている子どももいた。

最後に、自分の転がり方を発表した。よく似た転がり方でも、腕や脚の使い方の違いを見つけてもらい、「〇〇転がり」と、発表者の名前をつけてもらったことで、次への意欲につながった。



写真1



写真2

4. 授業後の様子

子どもたちは、Gボールが大好きで、マットを敷きつめる作業も全員で協力して手早くすませるなど、大変意欲的である。友だちの転がり方に挑戦したり、新しい転がり方を見つけたり、教え合ったりしている。25日の授業では、気になったAさんも、中くらいの大きさのボールを使ってバック転型の転がり方に挑戦していた。また、後転を試みた子もいたが、ボールより体の方が重たいので、勢いをつけないと起き上がれないことが分かったようであった。

3組で実施されたコーン倒しも、子どもたちは大好きである。初めからあったルール他に、「ボールを持っている人から無理にボールを取らない」というルールができました。ボール運動が苦手な子どもも、楽しそうにボールを追いかけている姿に感動した。

Gボールは他の学年でも使っていて、3年生ではどんな使い方をしたのかと問い合わせがある。教えていただいたことを、少しでも発信していけたらと思っている。

（文責:富田幸代）

保健体育科授業にラート運動を導入するという取り組み

講 師:後藤洋子(三重大学)、西井英理子(日本ラート協会総務部長)

参加者:一身田中学校保健体育科教員、保健体育科学生

1. ラートとは

「ラート」は1925年にドイツで酒樽の外枠をヒントにして子どもの遊具として考案された器具である。誰でも簡単に転がれる特性を持ち、後に競技種目として発展していった。現在、ヨーロッパを中心に生涯スポーツとして、また高度な技術を追求する競技スポーツとして実施されている。

日本では第二次世界大戦時に「フープ(操転器)」として航空操縦士養成の訓練活動に用いられていたが、大戦後は「軍事訓練」に繋がる活動と見なされ一切姿を消した。1989年、当時東海大学の長谷川聖修氏(現筑波大准教授)が留学先のドイツから日本に持ち帰り、ニュー・スポーツとして再び普及活動が開始された。

2. ラート運動の特性

2.1 ラートに合わせること、情報を受信すること

ラート運動の特性は、見かけは器械運動や体操競技と類似しているが、ラートの運動に合わせて自分の身体を操作する必要があるという点が異なっている。つまりラートを操作するためには、ラートから積極的に情報を受信することが重要である。運動者が主体的にラートを操作するとともに、ある程度ラートに身を任せることが必要であり「自由に操ろう」という意識が強過ぎると上手くいかない。この「合わせる」ことと「積極的に情報を受信する」ことが不可欠な点がラート運動の特性の一つである。

2.2 仲間の協力が不可欠

ラートは鉄製の大きな器具である。直径が概ね運動者の身長+30cm、重量が約50kgあるため、操作には慎重を期す必要がある。誤った使い方や緊張感を欠いた態度は大きな事故に繋がる危険性を持っている。一方、ラート運動はスポーツ種目としては、まだマイナーな存在であるため、技術習得や練習用の補助器具が殆ど発達していない。従って、安全性の確保や練習の際の補助は専ら仲間(補助者)の協力を頼るしかない。

3. 期待される効果

3.1 身体面に対して

ラートの中で回転する運動は、様々に変化する体勢で、腹筋や背筋などを締めて正しい姿勢を保つことが大切なポイントとなるので、姿勢の劣化が問題となっている子供たちに推奨できると考えられる。また、ぶらさがり健康法と同様の、血行促進、肩凝り・腰痛の予防、背骨の矯正などの効果が期待されるので、生涯スポーツとしても位置付けられる。さらに身体の平衡感覚や空間に対する位置感覚が重要であり、運動の慣性、遠心力、重力などをうまく利用することで、逆さまになったり転がったりする感覚を始めとする、非日常的で新しい運動感覚を味わうことで身体感覚の向上が期待できる。

3.2 精神面に関して

大きくて重いラートを操作するので危険が伴うため、集中して取り組む必要がある。運動中にお互いに補助したり協力したりして技術を習得していくという活動を通して、コミュニケーション力や信頼関係を築くことが期待される。また、逆さまになることでの開放感はストレスの解消になるようである。

さらに、勇気を出して回転した時の喜びと達成感は、自閉的傾向を持つ人や精神障がいを持つ人の自信にも繋がると報告されている。

4. これまでの取り組み

一身田中学校の体育授業にラートを導入するにあたって、授業担当者および関係者にラート運動の概要、特性を理解してもらうために、研修会を2回開催した。

4.1 第1回ラート研修会

平成19年10月18日(木)16時から18時まで、三重大学屋内運動場にてラートのオリエンテーションを兼ねた研修会を開催した。参加者は一身田中学校保健体育教員4名と三重大学教員1名であった。研修内容は以下の通りであった。

(1)説明：ラートの概要（器具の名称、ベルト装着方法、諸注意）など

(2)実技研修（基礎）

- ・ラートを押し回して止める、回っているラートを止める。
- ・リングの中を歩く。
- ・ラートで回転する。
- ・二人組でシーソーをする。

(3)VTR視聴

日本ラート協会編のビデオ「ラート検定級ビデオ」を視聴した。



写真1

4.2 第2回ラート研修会

平成19年12月27日(木)11時から昼食を挟んで17時まで、一身田中学校体育館で技術習得を中心とした研修会を開催した

(写真1)。参加者は一身田中学校保健体育教員4名、三重大学教員2名、三重大学学生(保健体育科4年生)2名で、講師として日本ラート協会総務部長の西井英理子氏を、アシスタントとして中京大学4年生1名を招き、ラート検定5級の技を中心に実習した。また、本研修が「中学生の体育授業」に繋がるという趣旨から、ラート運動の技術だけでなく(写真2)、導入的な扱い(写真3)、体づくりや動きづくりに関連する内容も併せて紹介してもらった(写真4・5)。



写真2



写真3



写真4



写真5

5. 今後の展望

ラート運動がもたらす利点は理解できるが、学校体育に実際に導入するにあたって、様々な問題点が存在することも事実である。例えば以下のような点である。

①安全性の確保

運動中の安全確保が必要である。不適切な扱いで大きな事故に繋がるため、慣れるまでは安全管理に非常に手が掛かる。

②保管場所の問題

器具そのものが大きいため、保管場所にそれなりのスペースが必要である。さらにラートが転がったり倒れたりしないよう、固定する必要があるため、適切な場所が必要である。

③高価な器具

実施者の身長によって使用するラートのサイズが異なるため、生徒の身長に対応するラートが必要である。1台約20万円は手軽に購入できるものではない。

④指導者の不足

安全性の確保、学習の成果という面からも、複数の指導者あるいはティーチング・アシスタントの参加が望ましいが、ラート指導ができる指導者は決して多くはない。

以上のような障害が存在するため、これまで学校体育にラートを導入しているケースは大学体育での選択種目として、あるいは課外活動の体験として取り入れられた例が僅かに見られるが、中学生の体育の授業として取り入れられた実践は見られない。

今回、上記の問題点①～③については解決されている。問題点④について今後、三重大学で実施される関連授業科目の中で学生のラート運動に対する経験と習熟を積み、学生がティーチング・アシスタントとして授業に関わるという仕組みを構築しようとしている。

(文責:後藤洋子)

6. 参加者の感想

下記の感想(抜粋)は、研修会に参加した一身田中学校保健体育科教員と保健体育科学生(4年)によるものである。感想からは、「誰もがゼロからのスタート」「危険であるがゆえに生起する自然な助け合い」「本物性(演技・道具)に触発される学習動機」「道具や人に身をまかせるという身体体験」などを読み取ることができる。こうしたラート運動が拓く世界は、今日の学校教育が喪失した「学習」世界に通じるものがあるように思われる。学校教育における「学び(=真似び=マネび)」と「習い(=倣い=ナライ)」の復権は、子どもたちの真似てみたい人やなりたいたい人への憧れ、やってみたいことや倣ってみたいことへの挑戦を生成し、何かのために「学習しておく」というより、いま取り組んでいることがおもしろい(自分にとって意味がある)から「学習する」という状況をつくりだすものと思われる。

来年度は、単に新しい「教材」としてラート運動を子どもたちに提示するのではなく、先人たちが大切にしてきた「学び方」や「習い方」を包括した「学習財」としてのカリキュラム開発に臨みたい。

○ 最後には、模範演技を見せていただきました。「ええっ!あんな事まで出来るの。」という技もあり感動しました。後で、今回の講習会のビデオや写真を見ると、私の実技の時には西井さんを始め多くの方々が心配そうにフォローしてくださっていました。ありがとうございました。

今回の講習会を体験してみて、ラートは楽しく学習できる教材だと思います。ただ、乱暴な活動になってしまうと危険なこともあるので十分に安全に配慮して活動させたいと思います。始めのうちは、少人数で教師の目が届く状態で指導していくのがよいと思います。さらに、練習をして、一身田中学校保健体育科教員が話し合い、研修を深め、近い将来ラートを授業に取り入れていきたいと考えています。(一身田中学校教員)

○ 子ども達にとってはラートという競技をみたことがないと思うので興味はあると思います。始めはこの講習会でもやっていたラートになれることや、ラートの基本知識からやっていこうと思います。それができるようになれば実際に5級の技の練習に入り、少しでも多くの技を教えていきたいと思います。でもそのためには自分自身がま

ず技を習得したり、指導できるようにならなければなりません。そのためにもこのような講習会を何回もやってもらい授業ででてきた問題を解決していきたいと思います。(一身田中学校教員)

- 本校の生徒に体育の授業でラートを導入するには、教員が今後も講習会に参加しながら自ら生徒の手本となれるレベルまで技術を習得することや、授業の体系(生徒人数や活動の流れ)の綿密な打ち合わせが必要で、まだまだ課題はありますが、ぜひこの楽しく、不思議なラートを生徒に体験させてあげたいと思うので勉強を進めていきたいなと思います。(一身田中学校教員)
- 体操競技に自信のあった自分は「側転や、斜転なんか簡単だろう」と調子に乗っていました。直転をするのも側転の感覚で簡単にできるだろうと思っていましたが、手を突っ張って側転を行う感じで直転に臨んだら回転が途中で止まってしまい元に戻ってしまったのを覚えています。足をピンと伸ばして手は突っ張らずグリップを引っぱるようにして、肘の曲げ伸ばしで進行方向を決める体重移動を教えてもらってからは簡単に回転することができました。自分の中にはない全く新しい感覚でした。器械体操にはない新しい感覚が今でも残っています。(一身田中学校教員)
- ラートを中学校の授業に取り入れていくということにあたり感じたことは、私自身にとってもラートは初めての活動であり、好奇心が湧き、心が躍ったように、子どもたちにとっても初めての活動であり、魅力を感じ、好奇心を駆り立てられるものであるだろうということである。授業を行っていく上で大切なことは、毎回の授業に“！”や“？”をつけることであると私は思う。今日、学校授業で取り入れられている種目がいけないとは決して思わないが、中学生にとって授業で行われる球技などの種目は日常的になりつつあり、授業中に驚きや疑問を感じる場面は少なくなってきたのではないだろうか。

そこで、ラートを導入することで、授業に「新鮮さ」を加えることができると考えられる。多くの子どもたちが初めて見て、初めて触れるラートを扱うことで、まず「どのように使うのか？」など、子どもたちに“？”をつけることができるだろう。次に実際に演技を見せることで私自身も感じた“！”を子どもたちにつけることができ、授業開始の時点で子どもたちの心を掴むことができるだろう。興味を持ったものへの取り組みとそうでないものへの取り組みでは、大きな差が見られるため、授業の導入段階ではラートは有効な活動であると考えられる。その後の授業展開でも、初めて挑戦する技ができたときの感激や、思うように操作できない歯がゆさやその解決法を考えることなど、常に“！”と“？”つけた授業を行うことができると考えられる。また、研修会でも言われていた内容であるが、ラートは身長別に分かれて活動を行う必要があるため、男女関係なくグループを作ることができ、たくさんのコミュニケーションをとる機会を作ることにもつながっていくだろう。

もう一つ大切なことは、安全面への配慮である。ラートは楽しく新鮮な活動の反面、危険もたくさん潜んでいる。例えば、ラートの保管方法をしっかり実践する、目の届かない場所で実践させない、ラートの重みを感じさせる活動を取り入れる、初めて行う技には補助をつけるなどラートに潜む危険を理解させ、事故のない活動が行えるよう十分に配慮していかなければならない。

これまでに見られない新しい授業を考えていく上で、授業に新鮮さを加え、多くの驚きと疑問を感じることのできるラートを取り入れた実践は1つの有効な手段であると思う。(保健体育科学生)

(文責:岡野 昇)

一身田中学校における「教育実地研究基礎」

根津知佳子（音楽教育講座）

1年生11名が初めて一身田中学校を訪ねたのは、夏の終りのことであった。半年前まで、高校生として「学ぶ側」だった1年生が、「実地研究基礎」では、生徒達に寄り添い、時には指導をする立場になった。そのため、不安や戸惑いを感じていた学生も多かったようである。

最初は、緊張した面持ちであったが、いざ、自分の担当のクラスの生徒達と出会い、練習が始まると、懸命にクラスに溶け込もうとする姿がみられた。

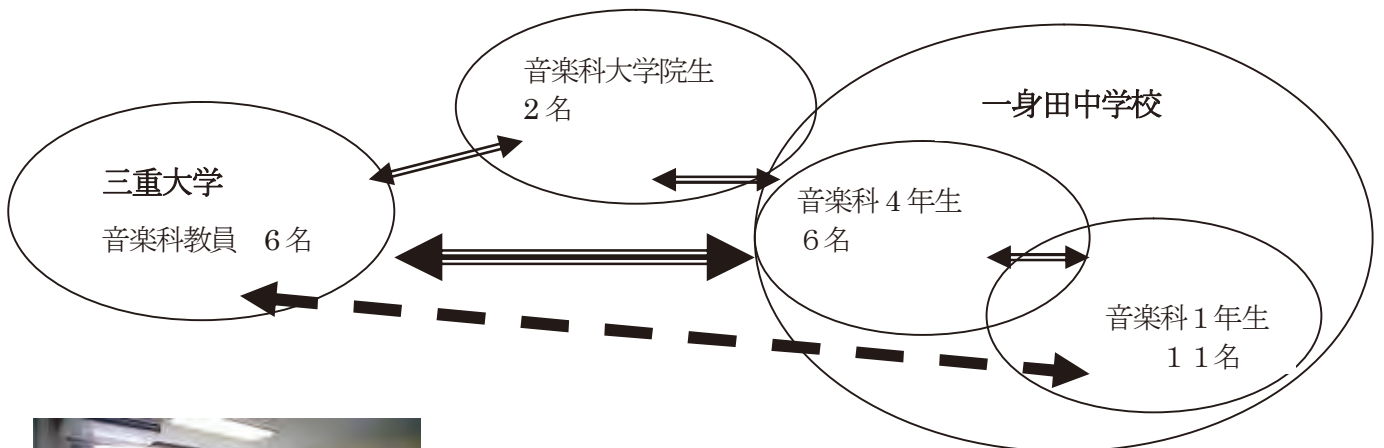


【写真1. 中学校の説明】



【写真2. クラス・合唱の説明】

2007年度は、2006年度の『ジョイント音楽祭』の取組をさらに深め、中学生の合唱練習を大学生が支援するという形態をとった。しかし、3学年15クラスを担当するためには、1年生11名では人数も指導にも限界があった。そこで、下記のように、大学院生、4年生がチューターとしての役割を担ってもらう体制をとった。



【写真3. 学年をこえた体験・学び】

日々の活動は、下記の観点で記入してもらい、個別のファイルに綴じていった。

- ①今日の指導の様子
- ②今日の活動で考えたこと
- ③今日の活動に集中していた (全くあてはならない～非常にあてはまる 9段階)
- ④自分の課題に取り組み、それを十分に成し遂げたと感じた
(全くあてはならない～非常にあてはまる 9段階)
- ⑤その他の感想
- ⑥次回の課題

今年度は、特に『コラボ音楽祭』を目指し、17日間にわたり合唱支援を行った。ここでは、シラバスと照合した上での省察(課題)を記す。

- ① 実地研究の概要：
地域の小中学校と協働し、「音楽会」を企画し、構築する経験をする。その体験を通して、児童・生徒の生活世界や実践現場を理解する。
- ② 受講条件他：
音楽会の舞台表現だけではなく、企画や舞台裏の準備などを含むため、音楽的な能力を問わない。演奏以外の運営企画は10名以内とする。
- ③ 内容：

(1) 音楽会の企画	2コマ
(2) 音楽会の内容の構成	2コマ
(3) プログラムの練習・アレンジ	5コマ
(4) 開催学校との交流・交渉	2コマ
(5) 音楽会の実施	3コマ
(6) 音楽会の振り返り	1コマ

- * ③の(1)(2)に関しては、中学校ですでに決定しており、(3)に関しては、音楽専科の先生や非常勤の先生、担任の先生との連携を十分にとることはできなかった。
- * したがって、今年度は、③の(3)に重点をおいた「実地研究」であったといえる。
- * 毎回の記録提出や検討会を実施したが、中学校と共有するに至らなかった。
- * (5)の実施にエネルギーをかけたが、(6)が十分ではなかった。

音楽科教員の話し合いの結果、今後の課題として挙げるのは、以下の3点である。特に、1年生の体験のレディネスについては、慎重に検討する必要があると考える。

- * 体験の系統性・平等性
一年生に合唱指導は難しい。変声期・心理的側面などの知識も必要である。
クラスや学年によって、意欲・仕上がりなどが異なる。
- * 評価方法
他の教科専門との評価方法の検討
- * 運営の合理化
交通手段・安全面の保証

2008年度も、今年度の課題を考慮し、よりよい「協働(コラボ)」を目指したいと考えている。

(5) 幼児教育講座における取組

－ 身田現代 GP 事業を進めて

幼児教育講座 中西智子

♪ 幼児と 1 年生の大学生

幼児教育コースの「リトミック」受講生 1 年生 12 名の 2 名は、4 月から 7 月までの火曜日午前中に、白塚幼稚園でリトミック的活動の計画で参加することになった。幼稚園から渡された保育計画に沿い、2 名は 4 歳児クラス(12 名)と 5 歳児クラス(18 名)に分かれて、園児のリズム遊びのピアノ伴奏を受け持った。学生はピアノの練習をして臨んだにも関わらず、当初の演奏では保育を進める先生の間合いに合わせることや、幼児の動きのタイミングを予測することに戸惑うばかりであった。しかし、少しずつ幼児の状況を見ながら担任との阿吽の呼吸など、“幼児とともにある【音楽】”の有り様を会得することができた。

園児が“お姉さん先生”に関心を持ってくれたことと、担任とのアイコンタクトなどができるようになったことで、伴奏者の役割を続けることができた。1 年生からのこの経験は、一身田現代 GP に参加した大きな成果であった。学生は園児から「先生」と呼んでくれることに戸惑いがありながらも嬉しくて、「本物の先生に向かって勉強を頑張る気持ちが強くなった」と勉学への意気が高まった。

1 年生の他の 10 名は、津西幼稚園で 5 歳児の園児と「音遊び・身体運動・音楽作り」の活動で 4 月から 6 月まで関わり、7 月には大川幼稚園の 5 歳児と「音遊び」で交流をした。1 年時から毎週の指導計画をたてる苦勞は「幼児の表現活動」に関して、「発達と学びの生の姿」を勉強させていただいた。

♪ 幼児と 3 年生の大学生

7 月には、幼稚園と保育所の一体化施設（白山と香良洲）と幼稚園（白塚と津西）で 2 本の『音楽物語』を上演した。4 月から保育内容の指導法「表現 I A」を受講生 17 名が 2 チームに分かれて制作を始めた。『音楽物語』の制作を進める過程では、幼稚園や保育所の乳幼児と交流経験がある幼児教育コースの 3 年生と、経験の無いコースの受講生と一緒にそれぞれの学生の学習暦や子どもの頃の記憶、子どもへのメッセージ性など、彼らの知恵・知識・経験を討論しながら完成を目指した。

上演ではそれぞれの施設の園児数の大差に戸惑いながら、幼児が喜んで鑑賞する反応の差異に適時対応して上演を成し遂げた。各施設の先生達からは学生の試みは好評であった。教育実習を前にした幼児教育現場への訪問は、学生には幼児の多様な生の姿を学び、施設ごとの保育者の姿を学ぶ手応えを得た。

♪ 児童と先生

白塚小学校から特別支援教室でのリズム指導「リズム遊び」への参加打診があった。小学校の時間割の関係で、中西が一人で参加することになった。2ヶ月が過ぎた頃から、担当の先生から以下のような意見が届いた。生徒達が、

- ① 太鼓・鈴等のリズム楽器にとっても興味を持った。
- ② 教師の手作り太鼓を含めた色々な太鼓を存分に叩く事により、音色や打ち方の違いを聴き取ることができるようになった。
- ③ リズムにのって楽しく体を動かす事ができるようになった。
- ④ 友だちのリズムを聴いたり、順番を守ったりと言う約束事がきちんとできるようになった。
- ⑤ リズム通りに音を出そうと努力する姿がみられた。
- ⑥ 生徒全員が連打して最後の音が揃って終わった瞬間には各人の満足感、達成感が高まるようで、友だちの音を聴き、友だちの音へ合わす気持が育った。

以上のように、生徒自身が思うようにできなかった事へ出来るようになった手応えは、予想以上の教育成果を得ているようである。教師が驚く程に生徒が飽きずに取り組む姿から、太鼓の指導を発展的に継続する計画である。

幼児教育講座における取組

幼児教育講座 滝口圭子

1. 白塚幼稚園：未就園児保育ぴよんちゃんクラブの運営

(1) ぴよんちゃんクラブとは

- ・母親と子ども（0歳～3歳）が参加
- ・毎週木曜日実施（学生の参加は2007年5月10日から2008年1月24日まで）
- ・運営グループメンバー
白塚幼稚園園長浅田美知子先生
白塚幼稚園保護者ボランティア（10名）
幼児教育コース3年生（前期10名，後期3名）
- ・ぴよんちゃんクラブの当日の流れを表1にまとめた。

(2) 幼児教育学演習Ⅰ（前期）及び幼児教育学演習Ⅱ（後期）との連動

- ・幼児教育コースの学生は、幼児教育学演習Ⅰ（前期）及び幼児教育学演習Ⅱ（後期）の授業の一環として参加した。
- ・参加学生は、毎回の活動後に、当日観察した子どもや保護者の様子を実践記録ノート（通称ぴよんちゃんノート）にまとめて提出した。前期のみ参加の学生は約3か月が、前後期とも参加の学生は約1年が過ぎる中での子どもや保護者の変化をとらえられると望ましいと伝えた。提出された実践記録ノートは、毎回滝口が目を通し、必要に応じてコメントを書き込み学生に返却した。毎回の実践記録ノートのコピーを白塚幼稚園園長に提出した。また、前後期とも参加の学生には、全ぴよんちゃんクラブ終了後、最終レポートの提出を求めた。自らのぴよんちゃんノートを見返しながらか、以下の点について記述するよう指示した。①よかった点・課題点・反省点
・全体のまとめ ②約4か月を経て何が変わったか、または変わらなかったのか。変わったとしたら、変容の具体的内容、変容の契機、時期、理由等。

表1 ぴよんちゃんクラブ当日の流れ（上段から下段へ時系列に並べた）

9:30～10:25am	登園（毎回共通） ・挨拶をする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び（毎回共通） ・おままごと・お絵描き・ブロック遊び 等
10:25～10:35am	片付け
10:35～11:00am	設定遊び（活動日により異なる） ・手遊び ・リズム遊び ・読み聞かせ 等
11:00am～	降園 掃除 片付け 反省会

- ・参加学生が主体となり，三重大学教育学部 FD 委員会主催の第 11 回教員と学生が語る会：教育学部の底力 3『学生・教員による様々な取り組みの交流：教育学部の底力をポスターセッションで！』（2007 年 12 月 5 日開催）及びフォーラム in 一身田（2008 年 2 月 27 日開催）において，2007（平成 19）年度びよんちゃんクラブの活動についてポスター発表を行った。



(3) 学生の最終レポートの紹介 <最終レポート 1>

1 年を通して白塚幼稚園の未就園児保育の運営に関わらせていただき，様々なことを学んだ。白塚幼稚園での未就園児保育の活動は，子どもと保護者に留まらず，子ども，保護者，学生，お母さん先生，それに園長先生のすべてをつないだ，大きな関係に支えられていたように思う。このような周りの人々との関係づくりと日々の保育の運営とは切り離せないものであり，私たちが実際に現場に出てもそのことを念頭に置いておきたい。私たち学生がほぼ毎週幼稚園に出向く中で，子どもたちはもちろん，先生や保護者の方たちとの信頼関係を少しずつだが着実に築くことができたのではないかと感じた。この信頼関係がなければ，保護者の方たちが私たちに子育ての中で感じることなどを話してくれることはなかったのではないだろうか。こうして回を重ねることで，朝の出会いの場面でも色々な言葉がけができるようになったと思う。子どもに関しての話題だけでなく，保護者自身に関する話題など，その内容も広がっていった。

また、保育者だけでなく、色々な人が保育に関わるということは、子どもたちの豊かな育ちにも結びつくのではないかと感じた。自由保育の時間、保護者の方は自分の子どもはもちろんのこと、自分の子ども以外の子どもとも遊んでいた。その中で保護者同士のつながりが強まっていくこともある。そしてまた、その関係が保育に返っていく。このようにすべてがつながって、子どもをみんなで大切に育てるということに向かっていくのではないかと感じるようになった。

更に、この1年を通して、未就園児保育の持つ子育て支援の側面についても考える機会をいただいた。保護者の方と話したり関わったりする中で、自分の子どもを客観的に見るということがどれほど難しいことなのかを感じる事ができたように思う。保護者の方々が不安に思うことや疑問に思うことがあるのは当然のことである。そんな時に、子育ての先輩であるボランティアのお母さん先生や幼稚園の保育者に対して不安などを話すことができれば、それだけでも気持ちが軽くなると思う。実際にぴよんちゃんクラブで何度か会う中で、表情や雰囲気明るくなった保護者の方もいた。子どもが成長したことをはじめ、他の理由もあるかもしれないが、保護者自身が変わったところもあるのではないだろうか。また、私たち学生に、子育ての中で経験したどうしようもない気持ちを打ち明けてくれた保護者の方もいた。私はその話を聞いて、子育て支援が今、本当に必要なものなのだとということを実感した。この保護者の方は、これから先、専門的に保育に関わろうとする私たちに、このような現状を認識した上で保育にあたって欲しいという思いを持っていた。私はこのような思いを聞く機会を持てたことをありがたく思った。保育は、単に子どもたちと向き合うということだけではない。保護者の方たちの思いも受け止めていけるような保育者になりたいと思うようになった。

加えて、日々の保育の環境を設定する時の様々な工夫についても学ぶことができた。特に前期のクリエイト係としての活動の時に、ままごとコーナーを作る衝立や椅子な



ど、様々なものを作ったのだが、その過程で現場の先生方の工夫やアイデアを聞かせていただくことができた。2007年5月の運営開始当初に比べると、遊戯室の環境構成は随分と変わってきた。そして、その環境の変化によって子どもの活動にも変化がみられたように思う。環境構成の重要性についても改めて考えさせられた。

自分自身の反省点も多い。設定保育の時間に、私が保護者の方に安心してもらおうとかけた言葉が断片的であったために、私が伝えたかったことをしっかりと伝えられなかったことがあった。逆に戸惑わせてしまったと言ってもいいかもしれない。言葉というのはとても重要で、同じことを話していても、伝え方一つで伝わり方が全く異なってくる。この先、保育者として自分の意見を話す時には、適切な言葉を選んで使わなければならないと切実に感じた。このことはこれからの自分の課題としたい。また、設定保育で前に立った時に、ふれあい遊びの動作の説明をうまく言葉で説明できなかったこともあった。技術的な面ではあるが、こういったことも現場に出る前に確実に身につけておきたいことである。

1年を通して私たちが温かく受け入れてくださった先生方や保護者の方々に感謝するとともに、この経験を今後子どもや子どもを取り巻く人たちと関わっていく中で生かしていきたいと思う。

<最終レポート2>

2006年10月から2007年2月まで、三重大学教育学部附属幼稚園の未就園児保育であるコアラの会のお手伝いをさせていただいたので、未就園児保育の運営に携わるのは今回で2回目でした。コアラの会の経験もあり、未就園児がどのような姿かある程度予測をしながら活動を考えていくことができたと思います。

コアラの会とぴよんちゃんクラブでは異なっている点はいくつかありました。附属幼稚園と公立幼稚園では保護者ボランティアであるお母さん先生の人数や保育内容の時間配分、周りの保育環境なども異なるので一概には比較できませんが、大きく異なっていた点の1つとして、コアラの会が隔週であったのに対し、ぴよんちゃんクラブは毎週行われていたということが挙げられます。コアラの会の保護者アンケートでも「毎週やってほしかった」との声があったので、毎週同じ時間に実施されていると「この日はぴよんちゃんの日」と保護者も子どもも認識しやすく、また私たちと関わる機会も増えるので、よりよい未就園児保育の在り方を考えていけるのだろうと思いました。

また、1学期は学生10名の参加であったため、月ごとにコミュニケーション係（子どもや保護者と直接的に関わる）とクリエイト係（会運営に必要なものを製作する）に分かれて活動していきました。特にクリエイト係として、遊戯室の壁面構成を考えたり、牛乳パックで製作したりしたのは初めてのことで、とてもよい経験となりました。壁面構成については、子どもたちからどう見えるか、大きすぎないかもしくは小さすぎないかなど、実際に遊戯室の様子と照らし合わせながら考えていくことが重要なのだと学ぶことができました。牛乳パックを使用したままごと用の椅子や仕切りの製作も、子どもたちの姿を予測した上での活動であり、学生やお母さん先生方と相談しながら1人ではなかなかすることの難しい活動をさせていただきました。

全参加ではなかったのですが、1学期、2学期、3学期と1年を通して子どもたちに

関わるということは初めての経験でした。そして1年間、未就園児保育に関わったからこそ、子どもたちやお母さん方の姿を頭で認識するだけではなく、自分の身体でも経験することによって学び取れたことがたくさんありました。

1年を通して、私は絵本に対する認識が変化したと思います。1学期の頃は「お話聞いているかな」「きちんとこっちを向いているかな」などという点に注意が向けられていたのですが、ぴょんちゃんクラブで絵本の読み聞かせを行って行く中で、絵を見て楽しむ子ども、絵本の中の保育者が読み上げる音を楽しむ子どもなど、子どもによって絵本の楽しみ方が様々であることを実感しました。毎回行われていた読み聞かせで、その都度異なった子どもたちの姿が見られ、考えさせられる機会も多くありました。また、絵本に対して子どもたちはどのような気持ちを抱いているのかも毎回異なってくるため、保育者は子どもたちの様々な楽しみ方を確実に捉え、次回の保育へとつなげていくことが必要なのだと感じました。また、ただ目や耳で楽しむというばかりではなく、お話自体を楽しむことも大事なので、場面によってしっかりとしたねらいを定めて読み聞かせることもしていかななくてはならないと思います。

そして、1年間を通してほぼ同じ親子と関わる事ができたことで、ごくわずかではあると思いますが、信頼関係というものを築くことができたのではないかと感じました。2学期、3学期と時が経つにつれて、お母さん方の笑顔が増えてきたり、お母さんの方から話しかけてくださったりと、お母さん方と話しやすい雰囲気が次第に作られていったような気がします。お母さんと話をしていくことで、家庭での子どもの様子が見えたり、お母さんの子どもに対する悩みを知ることができたり、また自分のことも知ってもらえる機会となっていきました。3学期にはある程度顔見知りのメンバーが定着し、気軽に話せる人がいて子どもも楽しく遊べる場所という雰囲気が生まれ、その雰囲気がお母さん同士やお母さんと幼稚園の先生、お母さんと子ども、お母さんと学生などそれぞれの関係に影響を与えたのだろうと考えました。

子どもたちの様々な変化を見ることができたことも大きな喜びとして感じられましたし、また、保育に対しては園長先生やお母さん先生方と毎回反省会を行って振り返り、次の保育へと意識を深め、実践していくということの大切さを改めて感じました。子どもの成長を一番近くで見られることは、保育者の一番の生きがいなのではないかと私は思います。わずかですが、その一面をこのぴょんちゃんクラブで感じる事ができ、もっと子どもが成長していく姿を見守っていきたいと思えました。成長が見られて「嬉しい」と感じて終わりなのではなく、保育は連続的なものであるため、その成長を促した要因は何であったのかという経過の振り返りを徹底し、その子どものこれからを見通して保育していくという姿勢を持ちながら、子どもの保育に携わっていきたいと考えています。園長先生の「とにかく実践してみて、だめだったらまた次回から考えていけばいい」という言葉は、その時々の子どもの姿を捉えながら保育を考えていくという姿勢につながるのではないかと思います。失敗しそうだと思ってもやってみると意外にうまくいったり、成功するだろうと思っても子どもたちが食いついてこなかったりと、やってみないとわからないということはほとんどの保育に当てはまると思います。わからなければ実際にやってみる、やってみてから考えていくという姿勢を大事にしながらこれからの保育につなげていきたいです。

<最終レポート 3>

約1年間ぴよんちゃんクラブに参加させていただき感想を書いてきた。今ノートを見返すと、子どもたちだけでなく自分の成長も感じることができる。始めのうちはクリエイティブだったということもあり、子どもたちの姿を見ることよりも、自分の活動に精一杯だったように思う。2年生の時にコアラの会を経験しており、その様子を思い浮かべながら活動に当たったので、始めは違いに戸惑った。自分は何をしたらいいのかということは、その日、その場の様子を見て判断しなくてはならない。コアラの会では前もって自分の担当が決められている活動が大半を占めていたので、自分で判断して動くことがなかなかできなかった。しかし、これまでほとんど経験をしたことがなかった壁面構成や衝立作りといった製作活動に取り組む中で、また、毎回の反省会で浅田先生やお母さん先生方の話を聞く中で、子どもたちの姿以外のところでもとても多くのことを学ぶことができた。

これまで衝立作りや壁面構成をしたことがなかったので、始めはどうしたらきれいにできるのかも、どうしたら早くできるのかもわからなかった。しかし浅田先生やお母さん先生方からヒントをいただき、その後も自分たちでよい方法を考えながら作ることができた。牛乳パックをまっすぐ貼り合わせることなど、経験してみなければわからないことはたくさんある。クリエイティブとして活動をしたのは前期だけであったが、とてもよい経験ができた。

お母さん先生方との関わり合いについては、始めとはずいぶん違っているように思う。始めはお互いに距離があって伝えたいこと、時には伝えるべきこともうまく伝えられなかった。しかし長期間一緒に活動をさせていただいて、その合間に色々な話をして、言いたいことを伝えやすい雰囲気になったように思う。運営者側の雰囲気がいいと参加してくださる親子も安心していられるのではないだろうか。会の雰囲気がどんどんよくなっているという話が反省会の時によく出ていたが、お母さんや子どもたちが慣れてきたということ以外に、私たち学生とお母さん先生方との雰囲気がよくなっていったことも一因ではないかと思う。時間のある時に雑談をするなど、楽しい雰囲気で活動していくことはとても大切なことだと感じた。そうすることで、活動についての話し合いや打ち合わせ、申し送りなどもよりスムーズにできるようになり、反省会もより内容の濃いものになっていくと思う。

また、感想を読み返してみて、現在のぴよんちゃんの部屋の環境は、お母さん先生方の努力があってできたものであることを改めて感じた。衝立や椅子を作るために牛乳パックの回収を呼びかけてくださったり、時間を見つけて椅子やテーブルを作ってくださいたり、家で使わなくなったものを持ってきておままごとコーナーを充実させてくださったりなど、お母さん先生方はいつもぴよんちゃんクラブがよりよくなるように考えてくださっているなと思った。

子どもたちの姿においては、始めは子ども同士が関わり一緒に遊ぶといった姿はほとんど見られなかった。しかし物の貸し借りや同じ場所で遊ぶことを通してだんだん子どもたち同士が関わり合うようになり、どんどん一緒に遊ぶ姿が増えてきた。私たちが参加した最後の会では、友だちと一緒に遊んでいることを意識した言動がたくさん見られた。始めは私たちが話しかけてもなかなか話をしてくれなかった子どもも、

最後には自分が作ったものを離れたところにいる私たちに見せに来てくれるほどに変化していた。また、参加者のお母さん方も、当初よりリラックスして参加しているように感じた。参加するメンバーが決まってきて顔見知りになったということも要因だろう。私たちにもとても気軽に話しかけてくださるようになったように思う。私もなかなかお母さん方とは話ができなかったのだが、回を重ねる毎に自然と話ができるようになってきた。やはりまだお母さん方との会話は少し緊張してしまい、うまく話せない時もあるが、活動開始時と比べると自分自身も成長できたと思う。

子どもたちの前に立って手遊びをしたり絵本を読んだりする時、台本なしで話することも初めての経験だった。始めはとても緊張していた。しかし、実習を経験したことで落ち着いて子どもたちの前に立てるようになった。お母さん先生方にも、実習に行ってから表情が柔らかくなって話しかけやすくなったと言われたことがあった。やはり、何事においても経験をすることはとても重要なことだと思った。

子どもたちがこれほどまでに成長する姿を見ることができたのと同時に、自分の成長も感じることもできたのは、1年間という長期間子どもたちと関わることができたからだと思う。今まで1年もの長い間、同じ子どもたちと関わってきたことはなかった。1年間で子どもたちは驚くほど成長する。ぴよんちゃんクラブは週1回であり、共に過ごす回数としては極めて多いとは言えないが、子どもたちの成長を近くで見ることができ、とてもよい経験になった。来年度はお母さん先生方も替わり、また新しいスタートとなる。今年度学んだことを生かしてよりよい会にし、自分もより成長していきたいと思う。



2. 白塚幼稚園：土曜参観日の親子のふれあい時間の担当

(1) 開催要領

- ・日時：6月16日（土）
- ・時間：親子土曜参観日の午前9時半から10時半の1時間
- ・場所：白塚小学校体育館
- ・対象：白塚幼稚園年少児及び年長児とその保護者
- ・内容：親子で体を使って楽しむゲーム
「ねじりんこひねりんこ」「なにがなんだか」「じゃんけん貨物列車」
「バイバイバイ」等
- ・司会進行：幼児教育コース3年生8名
- ・幼児教育コースの1年生8名，2年生9名も，サポーターとして参加した。

(2) 保護者及び教職員からの感想と意見

<保護者>

- ・とても楽しかった。
- ・皆さんの笑顔がとてもよかった。
- ・学生さんが一生懸命，頑張ってくださっていたことがよくわかった。
- ・学生さんたちの若いパワーを感じ，自分が元気になれたような気がする。
- ・本多先生（白塚幼稚園年少児クラス担任）の動きを見て，学生さんたちには若いからか照れがあるなあと思った。自分は動きを真似るのも恥ずかしかったが…。
- ・子どもたちのいつもと違う顔を見ることができてよかった。
- ・お父さんは恥ずかしかったと言っていた。
- ・もっとハードかと思っていたがそうでもなく，筋肉痛にもならなかったのでよかった。
- ・もっと動きたかった。子どもたちだけの貨物列車があったが，親も見ているだけではなく参加したかった。

<教職員>

- ・1年生から3年生まで多くの学生に来ていただけてよかった。
- ・色々と考えていただいたことがよくわかった。
- ・細かい部分で，打ち合わせをするとよかったのではないかと。例えば，時間配分のことや，子どもの発達のことなど（就園して間もない年少児クラスの子どもたちにはじゃんけんは難しかったかもしれない），伝えられることもあったと思う。
- ・時間的な部分でつかみきれていなかったことは反省点ではあるが，その反省を次に活かして欲しい。今は学生。そんな時のために私たちがいると思って欲しい。私たちも学生から学ぶし，学生も学べる場所は積極的に学んで欲しい。

(3) 学生の感想レポートの紹介

<感想レポート1>

親子参観というものに参加させていただくこと自体が初めてである上に，更に企画，運営まで学生に任せていただけるということで，期待と不安の両方を持って臨んだ。まず，企画の段階では，親子だけではなく，祖父母や兄弟姉妹が参加する可能性も考

慮し、誰でも簡単に楽しく活動できる内容を考えた。

体育館に参加者が入場して整列した時は、活動場所（白塚小学校体育館）が普段と違い、また今から何が始まるのかわからなかった為か、とても緊張した空気が漂っているように感じた。また実際、私も緊張していた。まず、準備運動として、歌に合わせて軽く体を動かす活動を行った。次に「なにがなんだか」というゲームで親子の触れ合いを目指した。ねらい通り「なにがなんだか」は親子のコミュニケーションのよいきっかけになったと思う。また2人組のみならず、3人組でもできる運動だったので、両親が参加している家庭やきょうだいの小学生が参加している家庭にも楽しんでもらえたように思う。ここでやっと参加者の緊張がほぐれた様子であった。親子が触れ合うことで、子どもの緊張も、親の緊張も和らぐことがわかった。最初の活動から緊張がほぐれるように、準備運動にも親子で触れ合う内容を取り入れればよかったと思った。

次に私が担当した「じゃんけん貨物列車」を実施した。「じゃんけん貨物列車」は経験がない子どももいると思ったので、丁寧に説明をすることにした。1つ前の「なにがなんだか」が少し激しい動きだったので、休憩を兼ねて説明の前に手遊びを行ったのだが、手遊びもあとひとつぐらいあってもよかったと思う。「じゃんけん貨物列車」が始まり、マイクで司会進行をしていたのだが、現在の列車の様子を把握することと、次に作る列車の指示で頭がいっぱいで、自分がどのように話しながら進行していったのかをほとんど覚えていないのだが、なんとか終わることができた。活動の時間配分がしっかり把握できておらず、予想以上に早いペースで進んでいたため、急遽「じゃんけん貨物列車」を3回することになったのであるが、3回中まず1回目は子どもだけ、残り2回を保護者も合わせての列車にすればよかったと終わってから気がついた。



「じゃんけん貨物列車」も含め、土曜参観を運営しての全体の反省点は、ある程度は台本通りに進めることも可能ではあるが、それ以上に、その時々で周りの状況をよく見て、今は、そして次は何をするべきなのか、何ができるのかを考えて行動する必要があったことである。例えば、最初に参加者が整列した時に少し冷静に見渡せば、保護者の方が荷物を持っていることにも気づけただろうし、「座る・立つ・集まる」「ばらばらで」「親子で」などの具体的な指示もできたかもしれない。この点では白塚幼稚園の先生方に助けていただいて私たちはやっと気づくことができた。白塚幼稚園の先生方の状況把握力は本当に優れていて今後更に学んでいきたいと思った。

最後に、今回、私たちにこのような機会を与えてくださり感謝しています。今回の土曜参観を自分も楽しむことができ、またみなさんから楽しかったという温かいお言葉をいただき本当に嬉しかったです。時間配分をはじめたくさんご迷惑をおかけしましたが、アドバイスをいただき、また大学での反省会でたくさんのことを考えることができ、自分自身の成長につながったような気がします。ありがとうございました。

<感想レポート2>

時間的なことは、本当に反省すべきことだと思った。学生同士で活動を分担した時に、各活動にかける時間を明確に決定しなかったことが原因の1つだと思う。また、大学での練習や白塚小学校体育館でのリハーサルの時に、時間が結構かかったこともあって、当日の活動途中で時間が余りすぎていると気がつくまで、時間を気にしていなかったことも問題だと思う。

私は「ねじりんこひねりんこ」と「なにがなんだか」の担当だった。「ねじりんこひねりんこ」の時はあまり子どもたちの様子を見ることができていなかったと思う。また、司会進行の時も、事前に考えた台本に固執しすぎて、台本を間違えないように言おうという意識が強くなり、淡々と進めすぎたと思った。その時の目の前の現状を見ながら、自分の言葉でうまく伝える力をつけたいと思った。また、ビデオを見て、もう少しゆっくり話さなければいけないと感じた。「なにがなんだか」はもう少し回数を繰り返してもよかったと思う。さらっと終わってしまった感じがした。大学での反省会で出た「1個目の活動をふれあい遊びにした方がよかった」という意見にも納得した。確かに、私たちも含め、全員が緊張していて固かったので、リラックスするためにも、最初をふれあい遊びにすればよかったと思った。

「じゃんけん貨物列車」は、こじんまりとしていた印象がある。サポーターの学生が作るトンネルを、近い場所に固めるのではなく、体育館全体にまばらになるように配置すればよかったと思う。そのことは事前に1,2年生に明確に伝えておくべきだった。途中で「体育館いっぱい使おう」というような言葉がけがあってもよかった。色々な生き物になって「じゃんけん貨物列車」をしたのはよかったと思う。みんなとても楽しそうであった。また「今度はお母さんやお父さんも一緒にやってみよう」と言った時に、一斉に子どもたちが保護者のところに行ったのを見て、やはり子どもたちは親が大好きなのだと感じた。

活動全体を通して、もっと臨機応変に現状を見ながら声かけをすることの大切さに気づいた。例えば、保護者が荷物を置いている時に、全員が落ち着くのをただ待っているだけではなく、色々と声かけをしながら待った方がよかった。誰も何も言わない

時間が続くのはあまりよくないことがビデオを見てわかった。具体的な指示のない時間が長く続くと子どもたちもざわついてしまうし、集中力も途切れてしまうと思う。私たちが準備してきた活動が予想以上に早く終わり、時間が余ってしまい、急遽、幼稚園の先生に活動を担当していただいたのであるが、言葉がけや活動の進行もスムーズで、その場に応じて対応できていてすごいと感じた。本多先生の動きは大きくて、分かりやすかったし、表情も豊かだった。モデルとなる動きは誰からも見えるように大きくしないと伝わらないこともあるし、私たちが引っ張っていくぞという気持ちでやらなければならないと感じた。実際に幼稚園の先生のわかりやすく澁刺とした動きを見ることができて良かった。

色々と反省点はあるが、自分自身が楽しめたことはよかったと思う。子どもたちの楽しそうな様子や保護者の方々が温かく見守ってくださっている様子が、とても支えになった。大勢の前で話すという機会はあまりないので、とてもよい経験になった。

<感想レポート 3>

白塚幼稚園の土曜参観のお手伝いをさせていただき、子どもたちと一緒に活動してとても楽しい一時を過ごすことができ、また様々なことを学ぶことができました。

私自身、土曜参観に参加するに当たって、表情豊かにはきはきと話すこと、そしてまず私たち自身が楽しむということを大事にしていこうと考えていました。うまく話せるか、学生同士で打ち合わせたようにきちんと進めていけるかなど不安要素はたくさんありました。しかし、私たちが不安に思っていればそれは表情に出るし、子どもたちにも伝わります。私たちが子どもたちの前に堂々と立つことで子どもたちは安心し、遊びが展開していきだろろうと考えます。今回の土曜参観の運営では、学生ひとり



ひとりが堂々と子どもたちの前に立つことができていたのではないかと思います。幼稚園の先生方のお話の仕方、子どもたちと関わる際の動きなど、実際に経験して学んだことだけでなく目で見えて学ぶ機会もたくさんありました。先生のプロの動きを見て、私たちも将来プロとして子どもたちの前に立つ時のために様々なことを目で見えて、経験して、自分の知識として積極的に取り込んでいきたいと思います。

親子で触れ合うリズム遊びである「なにがなんだか」では、「抱っこでギュ」「タッチでホイ」など、親子同士で体全体や体の一部で触れ合うことができたのではないかと感じました。子どもたちの嬉しそうな笑顔が印象に残っています。私は「バイバイ」を担当させていただきました。自分の説明が子どもたちや保護者の方にうまく伝わっていたかどうか不安でしたが、前に立って子どもたちと一緒に体を動かしているのはとても気持ちよく、また子どもたちの動きや表情も前から見ることでよかったです。体育館という広い場所で前に立って子どもたちや保護者の方に向かって言葉をかけながら活動を進行していくという貴重な経験をさせていただき、反省点も多くありますが、とても勉強になったと思います。

全体を通して振り返ってみると、活動の流れを正確に予測して準備しておくことや、その場での活動を見ながら子どもたちの様子や活動の流れを把握することの重要性を改めて実感しました。以上の点については、今後、このような活動を企画・運営していく時のみならず、自分自身の保育活動においても生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

<感想レポート4>

体育館のような広い空間で活動することも初めてであり、加えてマイクを使って話したり歌ったりすることも初めてであったので、とても緊張した状態で土曜参観がスタートした。そのような緊張状態で私の担当が始まったせいか、私はその場の状況を把握しきれず、準備運動を始めるのに保護者の荷物が邪魔になるということ先生に指摘されるまで気づけなかった。余裕を持って活動するのはなかなか難しいことではあるが、その時々現状を冷静に把握して行動することをもっと心がけていきたいと思った。

活動の時間配分に関して、時間が余った時のために活動を余分に用意しておくことはそれまで考えたこともなかったので、非常に勉強になった。しかしそれ以前に、今回は計画の段階でそれぞれの活動にどのくらい時間をかけるのかということをしっかり決めることなく時間配分が曖昧なままそれぞれの活動について計画してしまったことが問題だったと思う。1時間という長い時間を任されたのに、そういう部分を明確に決定しておらず、自分たちの計画の甘さを痛感した。急遽、白塚幼稚園の先生に2つの活動を担当していただいたのであるが、急に決まったことなのに落ち着いて臨機応変に動く姿、注目のさせ方、説明の仕方など多くのことを学ぶことができた。先生のように動けたらと思う。

反省点は多々あったが、全体を通して緊張はしていたものの笑顔でしっかり話せたことはよかったと思う。また、お父さん、お母さんに向ける子どもたちの笑顔や、一緒に活動する時のとても嬉しそうな顔から、子どもにとってのお父さん、お母さんの存在の大きさに改めて気づくことができた。親子で触れ合うことの大切さも知ること

ができた。今回は、親子が普段の生活ではしないような触れ合い遊びをしたので、その後の親子の遊びにおいて生かされていくといいなと思った。また、保護者の方から「楽しかった」という感想をいただいたことも嬉しかった。活動の時間配分のことをはじめ多くの至らない点があったが、子どもたちや保護者の方に楽しく参加していただくことができよかったと思う。また、私たち自身も参加者の皆さんと一緒に楽しい時間を過ごすことができよかった。反省点やよかったこと、学んだことを改めて自分の中で整理し、次へと生かしていきたいと思う。



3. 白塚小学校：4年生の学年活動での親子のふれあい時間の担当

(1) 開催要領

- ・日時：11月14日（水）
- ・時間：10:40am～12:20pm
- ・場所：白塚小学校体育館
- ・対象：白塚小学校4年生とその保護者
- ・内容：親子で体を動かす遊び
「しっぽとり」「変身じゃんけん」「アルゴリズム体操」等
- ・司会進行：幼児教育コース3年生6名

(2) 保護者からの感想（一部）

今日は本当にありがとうございました。親子ともどもとても楽しく参加させていただきました。子どもたちの心をグッとつかむ言葉がけやその内容。さすがだな…と感心しました。子どもに今日の感想を聞いたら「めっちゃ楽しかった～」と喜んでいました。他の保護者からも「今年の学年活動はすごくよかったよ」と言っていただきました。

4. 一身田小学校：1年生生活科「ようこそ一小へ」の活動支援

(1) 開催要領

- ・日時：10月24日（水）
- ・時間：10:00～11:00am
- ・場所：一身田小学校
- ・対象：一身田小学校1年生
- ・内容：生活科「ようこそ一小へ」の支援
一身田小学校1年生が、生活科の授業として、近隣の幼稚園、保育園の年長組の子どもたち約100名を招き、一身田小学校での生活を紹介した。その活動において、1年生全5クラスに、幼児教育コースの2年生9名、3年生6名、4年生3名が3～4名ずつ入り、活動の支援をした。
- ・10月24日（水）当日までに、下記に示す事前活動日2日間にそれぞれ1時限ずつ計2時限、学生が担当クラスに入り、子どもたちの様子及び活動の様子を把握した。また、前日のリハーサルにも全員参加した。
 - 事前活動日① 10月16日（火）3・4限（10:45～12:25）
 - 事前活動日② 10月18日（木）1・2限（8:45～10:25）
 - 前日リハーサル 10月23日（火）1限（8:45～9:30）

(2) 教職員からの感想

- ・昨日、本日より多くの学生さんに支援していただきありがとうございます。元気過ぎる子どもたちで細かな支援を必要とする場面がたくさんありますが、ご支援いただき幼稚園・保育園児が楽しめる「ようこそ一小へ」となるようにしたいと思います。
- ・今日は、とても楽しい「ようこそ一小へ」の会を持つことができました。本校児童もいきいきと活動し、保育所・幼稚園児もはじめは1年生の児童の多さに戸惑いもありましたが、すぐに楽しそうに各コーナーを回っていました。多くの学生さんにこれまでの準備にも参加していただきまして、本当にありがとうございました。
- ・先日は、無事「ようこそ一小へ」の取り組みを終えることができました。1年生は勿論、保育園、幼稚園の子どもさんたちにも満足して帰ってもらうことができました。準備段階から数多くの学生さんに来ていただき、各グループに上手に指導していただきました。子どもたちは来ていただくことをとても楽しみにし、本番を迎えることができました。子どもたちの意見を尊重しながらも、それぞれのコーナーの製作では、具体的な作り方まで教えていただき、満足のいくものに仕上げることができました。感謝しています。学生さんにもよろしくお伝えください。

(6) 数学教育講座における取組

1) 栗真小学校・白塚小学校・一身田小学校における「教育実地研究基礎」の取組

教育学部では、平成 18 年度に新授業科目「教育実地研究基礎」（1 年生対象）が開講されたが、数学教育コース学生 16 名、学校教育コース学生 5 名がこの授業科目を履修し、一身田校区の 3 小学校で活動したのは、平成 19 年度が最初である。また、3 小学校が「教育実地研究基礎」の受講生を受け入れるのも初めてであったから、準備から実施にいたるまで暗中模索の状況であった。以下、実施にいたるまでの経過を整理して報告する。

まず、4 月 18 日に学生対象のガイダンスを行ない、「教育実地研究基礎」とはどのような趣旨の授業科目であるかを説明した。翌 4 月 19 日に 3 小学校の現代 GP 担当者との打合せを実施し、「教育実地研究基礎」の趣旨を理解していただき、その実施のための具体的日程を協議した。「教育実地研究基礎」の趣旨は、「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援活動や教員のアシスタント活動をすることによって、子ども理解、学校理解を深めつつ、教職への意識を高める」というものである。

大学と小学校の授業時間帯が異なるため、学生に対する説明資料として、小学校の授業時間帯一覧表を作成した。5 月 9 日に、再度、学生ガイダンスを実施し、小学校の授業時間帯一覧表を配布して、自分の大学での授業時間帯を考慮して、小学校へ行くことのできる時間帯の調査を行なった。それをもとにして、割り振り一覧表を作成し、5 月 15 日に栗真小学校へ、5 月 16 日に一身田小学校へ、5 月 22 日に白塚小学校へ、学生が大学教員の引率で行き、初顔合わせを行ない、各学生が学習支援に入る学級が決定された。そして、学生の活動が開始されたのは、栗真小学校と一身田小学校では 5 月 21 日、白塚小学校では 5 月 24 日であった。各学生は毎週一回、決まった小学校へ行き、学習支援・教育アシスタント活動を行なった。学生の割り振り一覧表は以下の通りである。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日
1 時間目 8:45～9:30	門脇昌也(栗) 梶屋慶子(白)	梅谷 高正(一) 高崎 俊彦(一) 長谷川勇斗(一) 平野はるな(一)		窪 鮎美(栗) 宇野哲矢(栗) 田中里奈(白) 濱口貴行(白) 横道大介(白)
2 時間目 9:40～10:25		安藤康晃(栗) 大西康太(栗)		篠永小百合(白) 松岡 朋宏(白) 佐野 俊彦(白) 瀧川静夏(一) 渡部菜摘(一) 中井政貴(一) 中山健太(一)
3 時間目 一身田小・栗真小 10:45～11:30 白塚小 10:45～11:25				
4 時間目				
5 時間目 13:50～14:35	野田恵利(一)			
6 時間目				

(一)は一身田小学校、(白)は白塚小学校、(栗)は栗真小学校、を意味する。

「教育実地研究基礎」の実施にあたっては、下記のような記録ノートを作成するように指示した。

「記録ノート」について

1. A4版のノートを使用
2. 表紙（右枠）

2007年度 教育実地研究基礎 記録ノート
数学教育コース 学籍番号 氏名

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究に行なった小学校名
2. 実地研究に行なった月日、時間帯
3. 実地研究に行なった学年、組、児童人数、担任教員の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の4.について、自分の得たこと、反省、感想等
6. その他

「記録ノート」からは、学生は下記のような多様な活動を行なったことがわかり、その感想も概ね肯定的なものであった。

行なった活動内容

- ①算数の計算のプリント学習のとき、アドバイスや、まる付けをする。(写真1)
- ②マット運動のときのアドバイスを。
- ③テスト直しのときに質問してくるので、それに答える。
- ④授業を見学する。
- ⑤スポーツテストのとき、整列させるなどの補助をする。
- ⑥休み時間に子どもと一緒に、こおり鬼、ケイドロなどをして遊ぶ。
- ⑦朝のスピーチをする。
- ⑧運動会の練習のとき、補助活動をする。綱引きの準備や後片付けをする。
- ⑨保育園児を迎えて遊ぶときの補助活動をする。
- ⑩プールサイドで子どもたちを見守る。(写真2)
- ⑪図工の時間で、ボンド付けなどして、子どもの活動をサポートする。
- ⑫七夕の飾り付けを子どもたちと一緒にする、鶴の折り方を教える。(写真3)
- ⑬児童集会で、子どもを整列させるなどの補助活動をする。
- ⑭体育のリレーでのゼッケンの準備や、子どもの誘導をする。

学生の意見・感想

- ① 先生が注意をすると、生徒はきちんと言うことを聞いていた。先生と生徒の信頼関係の良さに感心させられた。
- ② どうやって教えたらいいいのか、自分は当たり前と思っているから、なかなか難しい。でも、「わ

かった」と言ってくれたときの笑顔がかわいく、たまりませんでした。

③ 七夕の準備は楽しそうだったが、その中でも、安全は保たなければならない先生の責任は重く、楽しいだけではダメなんだと思った。

④先生という職業が改めて“いいな”と思えた日でした。



写真1



写真2



写真3

2) 一身田中学校における学習支援・教育アシスタント活動・SAS 活動

授業科目「数学科教育法」の受講生（3年生）が一身田中学校において、生徒の学習支援・教師のアシスタント活動を行なった。SAS 活動とは「study after school」の略称で、放課後の生徒学習支援の活動のことである。実施にいたる経過は以下の通りであった。

5月2日の学生ガイダンスにおいて、趣旨説明を行ない、5月11日に一身田中学校数学科教員と日程の打合せを行ない、5月25日に学生を引率して、中学校の教員と顔合わせを行なった。このとき、各学生が支援に入る学級が決定し、6月1日から活動を開始することとなった。

学生の割り振り一覧表は次ページの通りであった。また、「教育実地研究基礎」と同様に、実施にあたっては、下記のような記録ノートを作成するように指示した。

「記録ノート」について

1. A4版のノートを使用
2. 表紙（右枠）

「記録ノート」に記録する事項

1. 実地研究に行なった小学校名
2. 実地研究に行なった月日、時間帯
3. 実地研究に行なった学年、組、児童人数、担任教員の氏名
4. 実施した活動内容
5. 上記の4.について、自分の得たこと、反省、感想等
6. その他

2007年度
数学科教育法実地研究
記録ノート

数学教育コース
学籍番号
氏名

一身田中学校数学科 大学生指導支援 時間割

		月	火	水	木	金
1	8:50 ～ 9:40	1-4 新美 2-5 3-3	 3-5 野崎・長嶋	1-5 2-5	 2-1 前田悠・堀部	2-3
2	9:50 ～ 10:40	2-2 高木 3-2	1-1 林 2-1 西口 3-1 安達・牧戸	2-4 山口 3-5	1-5 3-4	1-3 柏木 2-5 永井・山川 3-1
3	10:50 ～ 11:40	1-2 片岡・松岡 2-3 高木・池山	1-2 川口・林	1-4 2-3 山口 3-4	1-3 3-3	2-2 永井・山川
4	11:50 ～ 12:40	1-1 片岡・松岡	2-2 3-4 前田憲・村井	1-2 2-1 3-1 東	1-4 3-2	1-1 2-4 加藤・榊原 3-5 岩瀬
5	13:20 ～ 14:10	道徳	1-3 3-3 勝又・松本	2-選択 今西 3-2 東・渡辺	2-4 3-選択	1-5 総合
6	14:20 ～ 15:10		総合		学活	
SAS	15:00 ～ 16:00	内藤・荒川 東出				新田・堤 齊藤

学生が行なった活動

- ① 因数分解、方程式の解法、1次関数などの学習で、生徒が練習問題などに取り組んでいるとき、
机間指導して、サポートする。
- ② 生徒が演習問題を解いているとき、巡回しながら、赤ペンによる○付けをする。
- ③ 授業を見学する。
- ④ 放課後の学習機会である「寺子屋いっちゅう」(15:00-16:00)において、生徒の数学学習をサポートする。

学生の意見・感想

- ① 授業中は、特に生徒を指導したりする場面はなかったが、生徒らの柔軟な発想には驚かされた。
附属小や附属中とは違い、教師の質問に対して、生徒らが口々に答えている様は、「これが普

通なんだな」という印象を受けた。

- ② 図を書いて説明してあげると、「なるほど」とわかってくれる生徒がいて、図を書いて説明することは、目に見えて変化がわかるので、良い方法だと思った。
- ③ 実際の教育現場を見て、教師による授業工夫の重要性を感じた。これから、いろんな視点から授業を観察し、あらゆる発見ができたらいと思う。
- ④ 後半の問題の解答は生徒たちが黒板に書いたが、意外だったのは、その板書する生徒たちが普段はしゃべってばかりいて、ノートも出してない生徒たちだったことだ。でも、彼らはきちんとした解答を書いていたので、解き方は理解しているのだと感心した。そして、板書された解答に対しても、もし答えが間違っていたとしても、計算の仕方などが合っていれば、「やり方はこれで合っているから、いいよ」と褒めてあげることが大切だということを学んだ。
- ⑤ 自分がわかっているからといって、それを相手に押しつけようとする、失敗するということを学びました。次回をもっとうまくできるように頑張りたいです。
- ⑥ 宿題を当然のことのようにしてこない生徒がいることがわかった。私が教師になったときは、生徒が宿題をしてこないかもしれないと考えて、授業目標などを考えて作る必要があると感じた。

学習支援活動



SAS 活動



3) 一身田小学校における授業研究

一身田小学校は算数科における学力向上の取組の一環として、各学年ごとに指導案検討を行ない、それにもとづく公開授業を実施し、事後検討会を開催したが、この取組に大学教員（数学教育講座上垣渉教授）が支援を行なった。

8月6日、7日の2日間、各学年団が指導案検討会を開催し、そこで練られた指導案を8月30日の全体研修会において発表し、意見交換を行ない、最終的な指導案の作成にとりかかった。これらの指導案にもとづいて、下記の日程で、公開授業及び事後検討会が開催された。

- ①10月3日、第1学年「どちらが長い」
- ②11月2日、第4学年「分数」

③11月7日、第3学年「かけ算のしかたを考えよう」

④11月30日、第5学年「面積の求め方を考えよう」

⑤12月5日、第2学年「かけ算(3)」

4)一身田中学校における授業研究

一身田中学校は数学科における学力向上の取組の一環として、「授業づくり研究会」を開催し、それにもとづく公開授業を実施したが、この取組に大学教員（数学教育講座上垣渉教授）が支援を行なった。以下に、一身田中学校が作成した情報誌の記事を掲載する。

数学科では、三重大学教育学部の上垣教授に参加していただき、合同の研究会を実施しています。研究会では、よりわかりやすくするための授業の進め方や教具の使い方、中学生が苦手とする「数学的な見方・考え方」を伸ばす授業の工夫、学習してきた内容が生活の中や身近な問題に利用できることに気づくことをねらいとした授業をテーマに1～3年の担当者が原案を考え、数学科全員で検討して授業づくりを行っています。

例えば1年生では、「ネットの袋に入ったみかんの重さと個数をヒントに、箱の中に入っているみかんの個数を箱を開けずに当てる」という授業を行いました。『比例・反比例』で学習したことを使って、見事に箱の中のみかんの個数を当てることができ、昼食の時間に甘いみかんを食べることができました。各学年とも、当日の授業もお互いに見学しあい、指摘しあって指導力の向上を目指しています。



大学教員と一身田中学校教員との
「授業づくり研究会」



一身田中学校3年生の授業

[4] 公開活動

(1)現代 GP のホームページ

三重大学・現代 GP の広報宣伝活動の一環として、平成 18 年 12 月 22 日に、ホームページを立ち上げた。アドレスは、<http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp/> である。

リニューアルしたホームページのトップページは下記のようにあり、そこでは、現代 GP に関する「取組の概要」、「活動内容」、「運営組織」、「公開活動等」、「資料」などを公開した。

現代 GP ホームページのトップページ

現代的教育ニーズ取組支援プログラム
～教育実践力の育成と学校・地域の活性化～
三重大学

取組みの概要 活動内容 運営組織 公開活動等 資料 リンク

PHOTO 新着情報はこちら

map

地図を拡大できます

三重大学
教育学部
一身田校区連携推進委員会
Tel : 059-231-9347
Fax : 059-231-9352
E-mail : i-chiren@edu.mie-u.ac.jp

Copyright (C) 2006 三重大学教育学部一身田校区連携推進委員会 All Rights Reserved.

現代 GP の Moodle の開設

Moodle (Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment) は、e-learning システムの1つであり、そこでは電子掲示板 (フォーラム)、情報共有フォルダ、情報提示用スペース、ポートフォリオ、アンケートモジュールなどを設置・利用することができる。

本現代GPでは、2007年1月10日にMoodleを設置し利用を行っている。現状では、大学教員と一身田中学校区の教員、教育委員会の担当者間で情報交換やファイルの共有のために利用している。現状の利用法については、メーリングリストなどでも実現可能であるが、話題ごとにフォーラムを使い分けることができ、情報が整理された形で保管される。そのため、後から情報にアクセスするのが非常に容易である。

(2)「第2回 フォーラム in 一身田」の開催

平成 19 年度の取組及び成果と課題を広く公開するとともに、次年度の取組を展望するために、平成 20 年 2 月 27 日（水）に「第 2 回 フォーラム in 一身田」を、三重大学講堂（三翠ホール）の小ホールを会場として開催した。大学関係者、学生、一身田校区の幼小中の教員、教育委員会関係者、報道関係者など約 140 名の出席があった。

フォーラムは、13：30 から 14：30 まで、教育学部の根津知佳子准教授（音楽教育講座）の司会進行のもとで、「ポスターセッション&学生の体験発表」が行なわれ、続いて、山田康彦教育学部長の開会挨拶の後、「幼・小・中大連携の成果と課題」と題して、岡野昇准教授をコーディネーターとして、パネル・ディスカッションが行なわれた。パネリストは、本多啓子（白塚幼稚園教諭）、渡邊 史（白塚小学校教諭）、林口友香（栗真小学校教諭）、中川淳子（一身田小学校教諭）、中川克己（一身田中学校教諭）、上垣 渉（教育学部教授）の諸氏であった。

パネル・ディスカッションでは、上垣教授から現代 GP のテーマである「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」についての解説、岡野准教授からパネル・ディスカッションのテーマである「幼・小・中大連携の成果と課題」についての解説がなされた後、上垣教授から平成 19 年度の全体的な事業報告がなされた。続いて、白塚幼稚園、白塚小学校、栗真小学校、一身田小学校、一身田中学校の各教諭から、それぞれの学校園における取組内容及び成果と課題が報告された。

幼稚園からは、多くの学生が参加することによって、活気ある活動が展開でき、一人一人の幼児にも目が行きとどき、楽しい雰囲気の中で親子とともに有意義な時間を過ごすことができているという成果とともに、取組を始める前段階の準備に改善の余地があるとの指摘がなされた。小学校からは、児童の学びにつながる取組ができたこと、多様な取組が児童だけでなく保護者にとっても有意義であったこと、これまで経験できなかった実験や実習が取り入れられ、生の体験をすることができたこと等の成果とともに、小学校と大学とのより綿密な連絡が必要であるとの課題が指摘された。中学校からは、学校の教育目標に沿って、基礎・基本の定着を図る教育活動、創造性や社会性を育むための教育活動、教員の資質向上を高める取組、学びの拠点としての取組、特色ある教育活動などを推進するために、現代 GP の取組は大いに意義があったと報告された。また、大学教員からは、幼・小・中学校園と連携することによって、幼児・児童・生徒の理解が深まり、自分自身の教育活動にとって得ることが多くあったという意見が述べられた。

討論の時間は少なかったが、現代 GP の取組の最終年度である平成 20 年度の後をどうするかという問題について意見交換がなされた。各学校園とも、この取組を継続していきたいとの意見がだされ、教育学部としても、引き続き人的・物的の両面で連携・協力を進めていく予定であるとの見解が示された。

最後に、「大学と学校・地域の連携はどうあるべきか」と題して、福井大学教育地域科学部長である黒木哲徳先生の講演が行なわれた。最初に、三重大学の現代 GP の取組が全国的にも例が少ない貴重な取組であり、この取組を成功させていただきたいとコメントされ、その後、福井大学の基本的な方向の解説、大学 4 年間の一貫した学生の学びの場としての「教育実践研究」の取組、教職大学院に関する考え方、実際の学生の活動などが紹介された。それらの内容については、本報告書の「〔6〕資料」を参照されたい。

「第2回 フォーラム in 一身田」のポスター

平成19年度
三重大学・現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)



第2回
**フォーラム
in
一身田**

教育実践力の育成と
学校・地域の活性化

13:30～14:30
ポスターセッション&学生の体験発表

14:40～16:30
パネル・ディスカッション
テーマ「幼・小・中・大連携の成果と課題」
【コーディネーター】岡野 昇(教育学部教授)
【パネリスト】本多 啓子(白塚幼稚園教諭) 中川 淳子(一身田小学校教諭)
林口 友香(桑真小学校教諭) 中川 克己(一身田中学校教諭)
渡部 史(白塚小学校教諭) 上垣 渉(教育学部教授)

日時 平成20年
2/27水
13:30～17:30

会場
三重大学講堂(三翠ホール)
小ホール

16:45～17:30
講演「大学と学校・地域の連携はどうあるべきか」
【講師】黒木 哲徳 先生(福井大学教育地域科学部長)

主催：一身田校区連絡協議会
後援：津市教育委員会

問い合わせ先／三重大学教育学部総務係(TEL.059-231-9347)



フォーラムでは、参加者にアンケートを実施したところ、48名の回答が寄せられた。これらを整理した結果を以下に掲載する。

「第2回 フォーラム in 一身田」のアンケート結果

○参加者の内訳

性別	20代	30代	40代	50代	合計
男	6	2	3	6	17
女	7	8	8	8	31
合計	13	10	11	14	48

○「フォーラム in 一身田」を、どうやってお知りになりましたか。

	男	女	無記入	合計
学校からの案内状	11	23		34
地域のお知らせ				
ホームページ				
その他	6	8		14
合計	17	31		48

○「フォーラム in 一身田」について、ご感想、ご意見をお聞かせください。

開始時刻	男	女	無記入	合計
早い方がよい	1			1
よい	13	24		37
遅い方がよい	2	6		8
無記入	1	1		2
合計	17	31		48

フォーラムの時間	男	女	無記入	合計
長くしてほしい				
よい	7	16		23
短くしてほしい	10	14		24
無記入		1		1
合計	17	31		48

フォーラムの構成	男	女	無記入	合計
よい	7	18		25
普通	9	12		21
よくなかった	1	1		2
無記入				
合計	17	31		48

平成 19 年度の取組の報告について	男	女	無記入	合計
よい	8	13		21
普通	8	17		25
よくなかった				
無記入	1	1		2
合計	17	31		48

パネル・ディスカッションについて	男	女	無記入	合計
よい	7	14		21
普通	10	17		27
よくなかった				
無記入				
合計	17	31		48

講演について	男	女	無記入	合計
よい	4	3		7
普通	5	17		22
よくなかった	4	1		5
無記入	4	10		14
合計	17	31		48

会場について	男	女	無記入	合計
よい	12	20		32
普通	5	6		11
よくなかった		1		1
無記入		4		4
合計	17	31		48

意見・感想など

○途中参加だったが、一身田地区での積極的な取組が知れてよかった。講演が独立していて、勿体ないと感じた。

○パネルでフロアからの意見を出せる時間がほしかった。

○連日勤務時間を大幅に超えて仕事をしております。有意義なフォーラムではありますが、できるだけ早く終わってほしい。

○パネルが後ろの方が見えにくい。大学側のメリットはとても感じられたが、幼稚・小・中は成果もあるものの、負担もあることを強く感じた。やる気のある学生はいいものの、やる気のない学生にはあまり意味がないように感じる。もう少し学校・地域の活性化に力を入れてほしい。(活用の仕方を教えてほしい)

○駐車場がよくわからなかった。人数のわりに机が少ない。

○学生の実践力の向上と学校・地域の活性化につながる。大学側の理想と現場の意識、方向性をどのように融和させていくかが問題だと思う。

○開始時間を早くして、5時までに終わるようにしてほしい。講演は必要ないと思う。

○講演について、大学側で今考えられている大学と地域連携のシステムの構築のお話を伺うことができ良かった。現場にいると外側の大きな世界、枠組みの中で、これから自分たちはどういう活動を行なうべきであるかが時として近視眼的になるからである。

○地元の大学と幼稚・小・中の現場が連携して教育実践の試みを行なうということは、今までできそうでできなかった有意義なことだと思います。ただ、現場が日々の活動のみでも多忙で、学生や大学の先生方と十分な事前の検討や事後の反省、次の課題の確認等ができているのか、また、該当の教科以外の教員にも還元できているのかが課題のようにも思います。また、地域の方々にもより積極的に参入参加いただくことで、結果的には(長い目で見れば)地域の活性化につながるのではないか。

○学校の活性化という面では大きな成果があったと感じるが、地域の活性化という面ではあまり成果が見られないように感じた。

○パネル・ディスカッションは、内容については資料に書かれているので、成果と課題の発表だけでもよかったのではないか。人数が多いので、会場を広いところにしてはどうか。

○実地研究が単位を取るためならば、学生の都合(大学祭の準備や用事など)で休むのはどうかと思う。このような学生には単位を与えないでいただきたい。こちらの授業に魅力がないのか、メモをとることもなく、外を見たり、自分の服装を常にチェックしたり、やる気がないように感じるが多々ある。教室に落ちているゴミを拾うことなく通りすぎ、このような学生が本当に教師を目指すのか疑問を感じる。

○実地研究では積極的に子どもたちに接してくれ、子どもたちも来てくれるのを楽しみにしていた。学生さんにいろいろ子どもたちの手助けをしてもらったが、学生さんの持っている力をもっと発揮できるよう活用させていただきたいと思った。

○家政科・体育科(Gボール、シュートゲーム)・・・等、子どもたちが楽しめる授業に興味を持ちました。どこへ連絡をとったらよいか、どんな活動ができるかなど、わかる資料があればと思います。活動が活発になると、大学側の方も忙しいのに、お願いしてもよいのかという気持ちもあり

ます。その調整はどうするのでしょうか。

○昨年に比べて、活動内容の裾野が広がったという印象を受けました。先日、総合の時間に児童が企画したゴミ拾い活動をしました。地域の方にもたくさん参加してもらいましたが、三重大生にも声をかけるべきであったと今になって思います。学校（児童）が地域と大学（学生）をつなぐことが更なる現代 GP の発展につながると思います。

○大学生、大学の先生方、幼・小・中の子ども達、幼・小・中の教員すべての者にとって、現代 GP は良いということが改めて今日わかりました。時間的には打合せの大切さとは裏腹にきびしい面はありますが、メリットの方に目を向けて、ぜひ発展継続していければと思います。

○やっと軌道に乗って来たので、来年度以降もぜひ続けていって欲しい。GP の取組には生徒達も前向きだし、教師側も大変なこともあるが、それぞれの向上のために努力する価値があると思う。

○会場の空調が寒いので風邪をひきそうです。体力勝負の日々なので風邪といえどもあなどれない。そんな気持ちで日々仕事、教育実践を行なっていないといけないですね。他校の頑張っている報告を聞いて思いました。

○13：30 開始ということでしたが、各学校としては出にくい時間であったかもしれません。

○学校にとりましても、大学生に授業の支援に入っていただくことはもちろん、大学の先生方に各教科の専門性を生かした指導技術につて学ばせていただくことができ、教師の力量を高めるといふ点で大変意義があったと思います。（現代 GP の中だけでなく、様々な事業の中で三重大の先生方には、いろいろご協力、ご指導いただいております。ありがとうございます）

○カルチャースクールに関しては、何度か参加させていただきましたが、特に子育て支援に関わるお話しなどは子育て最中の若いお母様方にもっとたくさん聞いていただきたいなと思いましたが、夜の開催ということで、そのあたりが難しいと思いました。

○この2年間の取組の中で、大学と幼、大学と小、大学と中という連携のパイプはかなり太くしていただいたと思います。今度は幼・小・中の横のつながり、あるいは大学も含めて地域としての p 一つのまとまりをどのように築いていくかが課題ではないかと思いました。

○現職の小中教職員を対象とした出張講座等が小中学校の研修会の場で実現できると、より新しい教育法、指導法を私たち教員が学べる場となり、児童・生徒に還元できるのではないかと考える。

○大学からの発信、小中学校へ出張講座・教育アシスタントとともに、小中から大学の方への訪問等を相互に行なうことが地域の活性化には必要ではないか。また、三重大生による地域の運動会等（体振主催等）への参加もあれば、一層地域にも親しまれるのではないか。

○やはり、この「現代 GP」を、3年間の実践後どのような形で継続が可能かを考えていくことが大切であると思う。地域の中核校となる三重大学がこれからも地域とともに歩む大学として存在していけるように、あらゆる可能性を求めていければいい。

○やはり、反省、事後研修の時間をとりたい。

○方法としては、これまでの取組でよいと思う。ただ、近い大学と学校園という「地域」の観点だけでなく、地域を学ぶという視点も入れた取組を通した「育成」「活性化」を考えていけるとよいと思う。

○大学の先生とは何度かお会いして、打合せ、意見交換、まとめができたが、実際に来てもらった学生さんとは、そうした時間がとれていない。ざっくばらんに話し合う時間がとればよいと思う。

○大学と地域の学校との連携の中で、いろいろな試みがなされていること、すばらしいことだと感じました。

○内容が盛りだくさんなので、時間は妥当と思う。児童を帰らせてからの参加になるので、途中からの参加しかできないが、終了時刻を考えると開始時間は妥当と思う。

○パネル・ディスカッション、各校の取組の報告をもっと手短かにしてもらおうとよかった。

○講演では、理由はわかりませんが、マイクが使われなかったので、後方の席は聞きづらかった。

○パネル・ディスカッションの最後に、岡野先生が言われた、学生への指導という視点が自分にはなかったことに気づかされた。

○(幼稚園や小中の教職員の資質の向上への寄与について、最後に岡野先生が言われましたが)「学生さんが来てくれて助かる」「大学の先生のおかげで質の高い授業ができ、子どもたちの学びが深まった」という感想はわかりますが、現場の教員が種々の取組から何を学び、それを次にどう生かすかという視点がとても重要であると思います。事業が終わっても、連携をさらに深めていけたらとてもありがたいですが、一方で、個々の教員が情熱をもって「子どもたちが本気になる授業」の創造に向けて、自分の課題をはっきりさせ努力することが何より大切だと考えます。

○大学と幼・小・中それぞれの連携は充実してきましたが、幼・小・中異校種間の連携も深まっていくと、地域全体の教育の活性化につながるのではないかと思います。

○パネル・ディスカッションにおける各校園の取組の説明の時間が長かったように思います。将来は、一身田校区だけでなく、もっと広い範囲の幼・小・中との連携が実現するとよいと思います。旧津市以外、特に僻地・複式校の教育の活性化のための取組が期待されます。

○取組をしていることを、いろいろな人に知ってもらえるようにしたいと思います。

○メモを大きく写し出して下さい。メモをホワイトボードに書いてくれていたので、大きく見たかったです。

○現代 GP により、たくさんの三重大生が学校に来て、アシスタントをしてくれるので、子どもたちにとっても教師としてもとてもプラスであると思う。岡野先生や学生さんのみなさんに体育の実践をしていただいたが、現場の教師もとても勉強になり、還流することで指導力の向上につながることになるので、今後も交流していくことが大切であると考えます。

○今回のフォーラムは報告会のような形式であったので、読めばわかるようなことばかりだったので、もっと交流できるような内容がよかったような気がします。例えば、分科会にして、すべての校種をミックスして今後について考えたり、現状を話し合った方がもっといい方向に進んでいける気がしました。

○初めてフォーラムに参加させていただきました。自校の取組しかわからなかったもので、他校の取組を見せていただいて、いろいろな視点があるのだな、と気がつきました。GP の取組は大学側も地域学校側も、課題はあるものの、とても意義あるものと考えます。予算面も 21 年度以降あるかもわかりませんが、ぜひ続けていっていただきたいと思います。

○講演はなくてもよかったのではないかと。パネル・ディスカッションで挙げられた課題について、もう少し検討する必要があるように思う。フォーラムで得るものが少なかった。

○課題に挙げられていた「時間のない中でどう行なっていくか」という事について、それをこえる成果はあったが、深刻な問題である。フォーラムのあり方も見直すべきだ。取組は読めばわかるの

で、学生・教師・大学の先生が交わって意見交換をできるような場があってもよかった。

○小学校現場の者が参加しようと思えば14:30-17:15の時間帯となる。フォーラムについては、他校の取組等を知ることができて、とても参考になった。構成で意見を言わせていただければ、上記の時間帯に「学生の体験発表」と「パネル・ディスカッション」をもってきていただけると、さらに学生側の思いや考えを知ることができ、さらに有意義なものになったと思う。

○人材、教材等のデータバンクを作ること、大学・現場・学生が自由に意見交換、情報交換できるネットワークを作ること、そして窓口となる人材確保が必要になってくると思う。

○中間報告になってもよいので、長期休業中にしてもらいたい。

○大学 ←————→ 学校園、お互いにとって大変有効であると思われたが、どのような実践にしる、相互の考えの交流が必要。事前・事後ともに。

○平日の午後だったので、教員は子どもたちを帰すまで参加できない。ポスターセッション、学生の発表がまったく聞けない時間だったのが残念。開始時間をもう少し遅くしてほしい。

○教員を目指す学生さんたちが教育実習のみでなく、現場の様子を実際に見る機会があることは大変プラスになると思う。学生さんに来てもらう学校側も学生さんの力が大変役立っています。教育実地研究基礎で来てもらう学生さんには、事前の打合せの時間が取れないこともあり、十分活用しきれない点が残念です。

○1年生を現場に出す上での留意点や大学での準備研修はどのようになっているのかについて知りたいと思いました。

○細かいことですが、学生としてであれ、学校現場に出て行くうえで、髪型（前髪が長すぎると表情が見えず、子どもも不安になることもある）なども指導していく必要がある・・・のかもしれないと、ぼんやりと思いました。

○勤務時間内み終わることが基本ではないでしょうか。それがとても残念に思えました。せつかくの貴重な会が不満の声が出てしまう会にはしてほしくないと思いました。

○学生の立場からすると、実際の中学校の中を見て思うものが大きいと思う。授業を進めていくときには、理想を追い求めることを学生はやりがちだが、授業に入らない生徒、平気で私語をしている生徒を見ることで、教えることの難しさや、生徒の現状を知ってもらえる、それが本当に教員として働くときに役立つと思う。

○もっと現場と大学との連携を図って、実践活動を行う機会を充実してくることを望みます。

○ポスターの体験発表時間をもう少し長くしてほしい。自分の所属するコース以外も、皆さん熱い気持ちで取り組んでおられることがわかりました。そのような活動を知れてよかったです。現場に入って活動に参加させていただくことは、私たち学生にとって非常によい経験となります。打合せの時間がなかなかとれないなどの課題は私自身も痛感したところです。しかし、教育実践力は、やはり現場に出てこそ培われるものだと思うので、このような機会を与えていただき、感謝しますとともに、これからもこのような場を提供していただけたらと思います。

地域連携教育で成果

三重大学の研究会が発表

三重大が津市の一身田一
中学校区内の幼稚園や小
中学校とつくる連携教育
の研究会「フォーラム in
一身田」が二十七日、
三重大で開かれた。市内
の幼稚園や小中学校教
諭、学生ら約百二十人が
参加した。

三重大は二〇〇六年か
ら文部科学省の支援を受
け、地域と連携する「現
代的教育ニーズ取り組み
支援プログラム」を開
始。本年度は教員による
理科や保健体育、家庭科
などの特別授業や、学生
による学習支援などに取
り組んだ。

報告会では福井大の黒
木哲徳教授の講演や三重

大の学生による体験発
言があった。一身田中



連携教育の成果を報告するパネリスト＝津市の三重大で

校区の幼稚園や小中学校
の教諭ら六人が参加し
たパネルディスカッション
では、各校が支援プロ
グラムの取り組みを報
告。
白塚小の渡部史教諭は
同大の体育科教員と学生
から二年生の児童と保護
者が親子で楽しめる「体
ほぐし運動」を教わった
ことなどを紹介。「親子
の触れ合いの機会をつく
る手法などが学べた」と
成果を話した。
(井波和夫)

ポスターセッションの風景



体育科学生・音楽科学生のポスター



理科学生・家政科学生のポスター



幼児教育コース学生の体験発表



フォーラム開会の挨拶をする山田康彦学部長



パネル・ディスカッションの風景



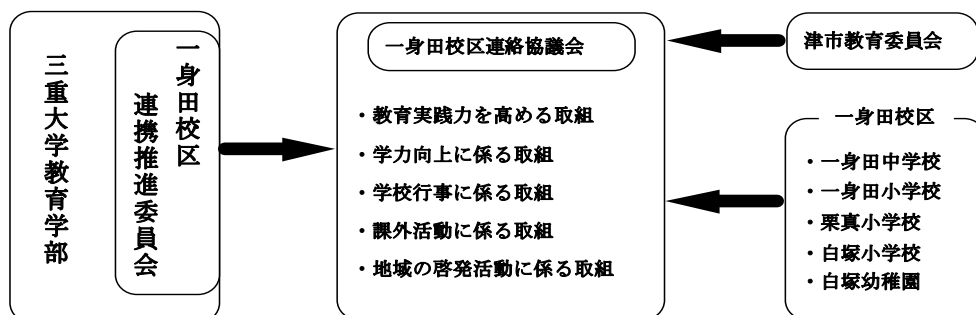
講演される福井大学教育地域科学部長の黒木哲徳先生



[5] 現代 GP の運営組織及び活動日誌

(1)現代 GP の運営組織

平成 19 年度の取組を企画し、運営した組織は、三重大学教育学部の「一身田校区連携推進委員会」の委員（5 名）、一身田校区の 5 校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）からの代表（各 2 名）、津市教育委員会の担当者（2 名）の合計 17 名から構成される「一身田校区連絡協議会」であった。その組織図は下のとおりである。



平成 19 年度の取組に関して、一身田校区連絡協議会は 3 回開催されたが、その内容については、本報告書の「[2] 平成 19 年度の取組(1)」の「(1) 一身田校区連絡協議会の開催」の項を参照していただきたい。

三重大学教育学部の一身田校区連携推進委員会の体制

平成 19 年度の連携推進委員会は、数学教育講座の上垣教授を代表とした総計 6 人の教員によって構成されるとともに、担当職員数名が事務的業務を担当した。

連携推進委員会

代表 上垣 渉（数学教育講座）

委員 兼重直文（音楽教育講座、教育学部・地域連携担当）、後藤太一郎（理科教育講座）、

岡野 昇（保健体育講座）、荒尾浩子（英語教育講座）、中西良文（学校教育講座）

担当職員代表 堀 芳人（教育学部チームリーダー）

財務担当職員 内田 正（事務局財務部管理チームチーフ）

(2)現代 GP の活動日誌

平成 19 年

3 月 13 日（火）一身田校区連絡協議会の開催（平成 19 年度の事業計画の策定）

4 月 20 日（金）第 3 期一身田校区カルチャースクールのポスターが納品

5 月 10 日（木）白塚幼稚園未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の運営開始、7 月 12 日（木）まで、毎週木曜日に実施（滝口圭子先生、3 年生の学生 10 名）

5 月 21 日（月）栗真小学校、一身田小学校における教育実地研究の開始

（数学教育コース学生（1 年生）16 名、学校教育コース学生（1 年生）5 名）

5 月 22 日（火）白塚幼稚園における「ドレミランド」の実践の開始、7 月 10 日（火）まで、毎週火曜日に実施（中西智子先生、幼児教育の 1 年生 2 名）

- 5月24日(木) 白塚小学校における教育実地研究の開始
(3小学校合わせて、上垣先生、数学科1年生が16名、学校教育の1年生が5名)
- 5月31日(木) 栗真小学校において、「親子ふれあい活動」(「親子で井(ドーン)」)を実施
(岡野先生、「総合演習」の受講生が6名)
- 5月31日(木) 「お弁当作りのポイントⅠ」 一身田中学校 (吉本先生、磯部先生)
- 6月1日(金) 一身田中学校における学習支援活動及び「寺子屋いっしんでん」(放課後学習支援)の開始 (上垣先生、数学の4年生が2名、3年生が12名、技術の4年生が1名、情報の4年生が5名、3年生が14名)
- 6月1日(金) 第3期第1回目の一身田校区カルチャースクールの開催 (参加者31名)
- 6月4日(月) 一身田中学校における1学年理科の観察・実験補助の開始
(荻原先生、平賀先生指導)
毎週月曜日(1, 3, 4限目)、火曜日(1限目)、金曜日(2, 3, 4限目)
理科の3年生(理科教育ゼミナールの受講生10名)が、毎時限4名補助にあたる
1学期は7月中旬まで
- 6月14日(木) 「お弁当作りのポイントⅡ」 主菜・副菜の献立作成
一身田中学校 (吉本先生、磯部先生)
- 6月15日(金) 第3期第2回目の一身田校区カルチャースクールの開催 (参加者32名)
- 6月16日(土) 白塚幼稚園において、「親子で体を使って楽しむゲーム」の取組を実施
(滝口先生、幼児教育の3年生が8名、2年生が9名、1年生が8名)
- 6月19日(火) 三重大学において、「キャンプファイアー時に全員で楽しめるゲーム指導」の検討会を実施 (岡野先生、一身田小学校5年担任4名)
- 6月21日(木) 「主菜作りの調理実習」の実施
一身田中学校 (磯部先生、家政4年1名、消費4年3名、学教4年1名)
- 6月25日(月) 栗真小学校6年生において、「ニジマスの解剖&調理実習」を実施
(後藤先生指導)
理科の3年生(生物学実験の受講生5名)および理科教育専修2年(生物学実験のTA2名)が補助にあたる
- 6月27日(木) 栗真小学校5年生において、「牛乳を活用した調理」の実践を実施
(磯部先生、家政科の4年生が6名)
- 6月29日(金) 白塚幼稚園における「音楽物語」の訪問上演を実施
(中西智子先生、幼児教育3年生10名・保健体育1名・家政教育1名・人間発達科学課程4年生6名)
- 6月29日(金) 第3期第3回目の一身田校区カルチャースクールの開催 (参加者22名)
- 7月5日(木) 「副菜作りの調理実習」の実施
一身田中学校 (吉本先生、磯部先生、家政4年3名、消費4年2名)
- 7月11日(水) 栗真小学校6年生において、「牛乳を活用した調理」の実践を実施
(磯部先生、家政科の4年生が6名)

- 7月25日～8月7日 一身田小学校の水泳指導7回(保健体育科学生1名、岡野先生)
- 8月2日(木)「お弁当の献立作成」及び「お弁当作りの調理実習」の実施
一身田中学校(吉本先生、磯部先生、家政教育専修1年生1名)
- 8月6日(月)岡野先生と一身田中学校・体育科教員との連絡協議会の開催
- 8月6日(月)一身田小学校の算数科に関する研修会の開催(指導案検討)
- 8月7日(火)一身田小学校の算数科に関する研修会の開催(指導案検討)
- 8月7日(火)第1回一身田校区連絡協議会の開催
- 8月17日(金)一身田中学校の数学科に関する「授業づくり研究会」の開催
- 8月30日(木)一身田小学校の算数科に関する研修会の開催(指導案検討)
- 9月7日(金)一身田中学校のキャリア教育講演会(中学校2年生対象、山根栄次先生)
- 9月10日(月)一身田中学校における「教育実地研究基礎」の開始
(音楽科1年生11名、および4年生6名、大学院生2名)
- 9月19日(水)、20日(木)、21日(金)一身田中学校2年生の職場体験学習
- 9月27日(木)一身田小学校3年生体育授業事前検討会
(一身田小学校3年生担任3名、保健体育科4年生2名、岡野先生)
- 10月1日(月)一身田小・白塚小・栗真小における後期「教育実地研究基礎」の開始
(数学教育コース学生(1年生)16名、学校教育コース学生(1年生)5名)
- 10月3日(水)一身田小学校における算数授業研究の実施(小学校1年生「長さ」の授業)
- 10月5日(金)第4期一身田校区カルチャースクール第1回講座開催(参加者15名)
- 10月11日(木)白塚幼稚園未就園児保育「ぴょんちゃんクラブ」の運営参加開始
1月31日(木)まで、ほぼ毎週木曜日に参加
(滝口圭子先生、幼児教育3年生3名)
- 10月11日(月)一身田中学校における「教育実地研究基礎」終了 全17日間
(根津先生コーディネート、高瀬先生、森川先生指導)
- 10月12日(金)一身田小学校2年生生活科「さつまいもの収穫」(家政教育コース4年、3名参観)
- 10月12日(金)白塚小学校2年生親子活動(山本俊彦先生、保健体育科4名、消費4名、音楽科2名、保健体育専修院生1名)
- 10月16日(火)一身田中学校とのコラボ音楽祭のための合唱指導
(音楽科全員対象、弓場先生)
- 10月16日(火)一身田小学校2年生生活科「さつまいもについて調べよう」
(家政教育コース4年が教材を作成、紙芝居による栄養教育の実践、磯部・学生2名参加)
- 10月17日(水)一身田中学校とのコラボ音楽祭の開催
- 10月18日(木)一身田小学校2年生生活科「さつまいもの料理について調べよう」
(家政教育コース4年が教材を作成、さつまいも調理実習の説明、学生1名参加)
- 10月18日(木)一身田中学校教員を対象としたラート講習会の実施
(一身田中学校保健体育科教員4名、後藤洋子先生)

- 10月19日(金) 第4期一身田校区カルチャースクール第2回講座開催(参加者10名)
- 10月23日(火) 一身田小学校2年生生活科「さつまいもの調理実習」
(磯部・家政教育コース4年生4名・消費生活科学コース4年生1名)
- 10月24日(水) 一身田小学校2年生生活科「さつまいもの調理実習」
(家政教育コース4年生5名・消費生活科学コース4年生1名)
- 10月24日(水) 一身田小学校 1年生 生活科「ようこそ一小へ」の支援
(滝口圭子先生、幼児教育2年生9名 3年生6名 4年生3名)
- 10月25日(水) 一身田小学校2年生生活科「さつまいもの調理実習」
(家政教育コース4年生3名・消費生活科学コース4年生1名)
- 10月25日(木) 白塚小学校 なかよし学級 「リズムで遊ぼう」授業開始
(中西智子先生コーディネート)
- 10月29日(月) 一身田中学校における後期「数学科教育法実地研究」の開始
- 11月1日(木) 一身田中学校における「解剖&調理実習」の実施(3、4限目 2年2組)
(授業者:後藤、安野先生 補助:理科教育専修院生2名、家政科学生3名)
- 11月2日(金) 一身田中学校における「解剖&調理実習」の実施
(1、2限目2年4組、3、4限目2年5組)
(授業者:後藤、安野先生 補助:磯部、吉本先生、
理科教育専修院生2名、家政科学生2名)
- 11月2日(金) 一身田中学校数学科 授業研究「1次関数」(中2)
- 11月2日(金) 第4期一身田校区カルチャースクール第3回講座開催(参加者10名)
- 11月7日(水) 一身田中学校における「解剖&調理実習」の実施(1、2限目 2年3組)
(授業者:中川、安野先生 補助:後藤太一郎先生、理科教育専修院生2名、
家政科学生3名)
- 11月12日(月) 一身田中学校における「解剖&調理実習」の実施(2、3限目 2年1組)
(授業者:中川、安野先生 補助:後藤太一郎先生、理科教育専修院生2名、
家政科学生3名)
- 11月14日(水) 白塚小学校4年生の学年活動での親子のふれあい時間の担当
(滝口圭子先生、幼児教育3年生6名)
- 11月16日(金) 一身田小学校3年2組 体育科授業「基本の運動(器械・器具を使つての運動)」
と授業研究
(授業者:岡野、斉藤隆彦先生 保健体育科学生2名、保健体育専修院生1名)
- 11月19日(月) 一身田中学校の数学科に関する「授業づくり研究会」
(上垣先生、一身田中学校数学科教諭6名)
- 11月27日(火) 一身田中学校数学科 授業研究「比例と反比例」(中1)
5クラス×2時間の公開 ~12月11日(火)まで
- 11月28日(水) 栗真小学校5年生家庭科「実験・牛乳のひみつを知ろう」
(磯部先生、家政科学生5人)

- 12月1日(土)、2日(日) 一身田中学校・選択理科受講生が「青少年のための科学の祭典・三重大学大会」で実験ブース「スライムをつくろう」を出展
(一身田中学校理科教諭2名、後藤太一郎先生)
- 12月3日(月)～12月13日(木) 一身田中学校・1学年理科における実験補助と授業実践
(荻原先生、平賀先生指導)
期間中の月曜日(3、4限目)、火曜日(2限目)、木曜日(3、4限目)
理科の3年生(理科教育ゼミナールの受講生10名)が、毎時限2-3名参加
- 12月4日(火) 白塚小学校 なかよし学級 研究授業「リズムで遊ぼう」
(中西智子先生コーディネート)
- 12月7日(金) 一身田小学校3年3組 体育科授業「ゲーム(ボールゲーム)」と授業研究
(授業者:岡野、駒田明美先生 保健体育科学生2名、保健体育専修院生1名)
- 12月27日(木) 第2回ラート研修会(一身田中学校にて)
(後藤洋子先生、西井英理子さん(日本ラート協会総務部長)、
参加者:一身田中学校保健体育科教員5名、岡野先生)

平成20年

- 1月7日(月) 一身田中学校公開授業(数学)のための指導案検討会
(上垣先生、内地留学生、中学校数学科教員6名)
- 1月8日(火) 第2回一身田校区連絡協議会の開催
- 1月17日(木)、18日(金) 明治大学での教職GPの取組に関する実地調査(上垣先生)
- 1月25日(金) 一身田小学校3年3組 体育科授業「基本の運動(器械・器具を使つての運動)」と
授業研究(授業者:保健体育科学生1名、岡野先生、富田幸代先生 保健体育科
学生1名)
- 2月9日(土)、10日(日) 横浜で開催された「大学教育改革合同フォーラム」への参加
(笠原一身田中学校長、中川栗真小学校長)
- 2月13日(水) 「第2回フォーラム in 一身田」でのパネル・ディスカッションに関する打合せ
- 2月27日(水) 「第2回フォーラム in 一身田」の開催
- 2月28日(木) 一身田小学校3年生 理科「おもしろ理科実験」
(授業者:牧原先生、補助:理科教育2年生3名)
- 2月29日(金) 栗真小学校「6年生を送る会」への特別出演
三重大生による「ミニコンサート」
(授業者:根津先生、音楽科学生4名)
- 3月7日(金) 一身田中学校の「教育活動情報誌」発行
- 3月下旬 平成19年度・現代GP報告書の作成

[6] 資料

(1)「第2回 フォーラム in 一身田」の資料集

「ポスターセッション&学生の体験発表」に関する資料

授業科目「幼児教育学演習Ⅰ・Ⅱ」

白塚幼稚園での未就園児保育の運営

ぴよんちゃんクラブ:みんなで子育て

谷田真希・中山郁絵・平田 梢
三重大学教育学部幼児教育コース3年
指導教員: 滝口圭子

ぴよんちゃんクラブとは?

- お母さんと子どもが参加
- 子どもの年齢:0~3歳
- 毎週木曜日

9:30 ~ 10:35	登園 ・あいさつをする ・出席ブックにシールを貼る 自由遊び ・おままごと・お絵描き・ブロック 等
10:35 ~ 11:00	設定遊び ・絵本・手遊び・歌・ふれあい遊び 等
11:00 ~	降園
11:10 ~	掃除・反省会

活動の様子(前期)



運営グループメンバー

- ・白塚幼稚園園長
- ・白塚幼稚園保護者ボランティア10名
- ・幼児教育コース3年生
前期10名・後期3名

最終レポートのごく一部紹介

白塚幼稚園での未就園児保育の活動は、子どもと保育者に留まらず、子ども、保護者、学生、お母さん先生、それに園長先生のすべてをつないだ、大きな関係に支えられていたように思う。このような周りの人々との関係づくりと日々の保育の運営とは、切り離せないものであり、私たちが実際に現場に出てからそのことを念頭に置いておきたい。ほぼ毎週幼稚園で活動する中で、子どもたちや、先生、保護者の方たちとの信頼関係を少しずつだが着実に築くことができたのではないかと感じた。この信頼関係がなければ、保護者の方たちが私たちに子育ての中で感じることなどを話してくれることはなかったのではないだろうか。こうして回を重ねることで、朝の出会いの場面でも色々な言葉かけができるようになったと思う。

未就園児保育をより理解する3つのポイント

遊びの様子

ぴよんちゃんクラブ

- 室内での活動が多いので、学生が親子に関わりやすい
- 手遊び→絵本など、毎回決まった流れがある
- 親子が触れ合う時間を取り入れている

附属幼稚園コアラの会

- 自然物での遊びや園児との交流が見られた
- コーナー遊びや読み聞かせなど、活動内容が多彩である
- 親と子それぞれの活動時間を設定する回もあった

毎回の参加ではなかったのですが、1学期、2学期、3学期と1年を通して子どもたちに関わるということは初めての経験でした。そして1年間、未就園児保育に関わったからこそ、子どもたちやお母さん方の姿を頭だけで認識するのではなく、自分の身体も使って共に色々なことを経験することができ、そのことによって学んだことがたくさんありました。私は絵本に対する認識が変化したと思います。1学期の頃は「お話を聞いているかな」という点に注意が向けられていたのですが、1年間を通して、絵を見て楽しむ子ども、絵本の中の保育者が読み上げる音を楽しむ子どもなど、子どもによって絵本の捉え方が様々であることを実感しました。また、絵本に対して子どもたちはどのような気持ちを抱いているのかも毎回異なってくるため、保育者は子どもたちの様々な楽しみ方を捉え、次回の保育へとつなげていくことが必要なのだと感じました。

子どもたちの前に立って手遊びをしたり絵本を読んだりするとき、台本なしで話をするのも初めての経験だった。はじめはとても緊張していた。お母さん先生方に、実習に行ったら表情が柔らかくなって話しかけやすくなったと言われたことがあった。…中略… 子どもたちがこれほどまでに成長する姿を見ることができたのと同じように、自分の成長も感じることができたのは、1年間という長期間で子どもたちと関わることができたからだと思う。今まで1年間も長い間同じ子どもたちと関わってきたことはなかった。1年間で子どもたちは驚くほど成長する。回数にしたらあまり多いとは言えないが、子どもたちの成長を近くで見ることができ、とてもよい経験になった。来年度はお母さん先生方も替わり、また新しいスタートとなる。今年度学んだことを活かしてよりよい会にし、自分もより成長していきたいと思う。

子どもたちの様子

ぴよんちゃんクラブ

- 参加者を固定せず、途中からでも自由に参加できる
- 0歳から参加でき、子どもたちの年齢の幅が広い
- 自由遊びの場所は主に室内

附属幼稚園コアラの会

- 参加者を事前に募り、毎回同じ参加者が集まる
- 自由遊びの場所は主に園庭

考察

- 保護者が未就園児保育に対して求めるものは一様ではなく、それぞれの思いがある
- 保護者が未就園児保育の会で楽しい気持ちになったり、安心感を得られれば、子どもにもよい影響を与えることになる
- 未就園児保育の会は、保護者のニーズに合わせた保育や育児相談を実施することで子育て支援の場として有効に機能する

保護者の思い

ぴよんちゃんクラブ

- 親子で遊びたいほっとしたい
- 子どもを集団に慣れさせたい

そこで、私たちは…
親子の遊びの仲立ちをしたり、保護者との会話を大切にするように心がけた

附属幼稚園コアラの会

- 幼稚園入園に向けて、子どもを集団に慣れさせたい
- 親から離れて遊びに参加して欲しい

そこで、私たちは…
子ども同士、親同士で楽しめる空間を考えるよう心がけた

未就園児保育と子育て支援

子どもが楽しめることを大切にしながら、保護者の思いに応えた保育をすることによって、未就園児保育の意義のひとつである「子育て支援」が実現される！！

Thank you for your watching !

三重大生と中学生の音楽祭 ～“ジョイント”から“コラボ”へ～

概要: 2006年度から現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)の一つとして、津市立の中学校の文化祭の一部である“合唱コンクールに音楽科の学生が参加している。

	2006年ジョイントコンサート	2007年コラボ音楽祭
活動の概要	合唱コンクールの最後に音楽科生も参加し、2曲合唱した。	・学生1人1クラスの担当を決め、9月～本番まで週2～3回程度中学校に通った。また、1回1回記録を残し、大学教員からのアドバイスをもらいながら、大学での振り返りを行った。 ・前年度と同様、合唱コンクールの最後に音楽科生の合唱を披露した。
メンバー	学部1年～4年生全員	支援メンバー：学部1年(教育実地研究基礎)11名、4年7名、院1年2名 計20名 合唱メンバー：学部1年～4年生全員+院生2名



♪ジョイント
コンサート

Jointとは・・・？
合同、連合すること。



♪コラボ音楽祭

コラボとは・・・？
協力、協同、合作。

ジョイントからコラボへの道のり

●9月

初めての学校訪問

真剣に中学校の先生の説明に耳を傾けます。↓



初めて耳にする中学生の歌声。生徒との出会いを控え緊張気味です。



●10月



←生徒たちとも少しずつ打ち解けられるようになりました。練習にも熱が入ります。

本番舞台だけを共にした昨年に加え、今年は中学校に通い、生徒たちに寄り添い、一緒に歌い、時には悩み、本番を迎えた。様々な想いを持って迎えた本番では、生徒たちの心に響く歌声に涙したり、ベストを尽くせたことを共に喜び合うことができた。ジョイントからコラボへ・・・2006年度の“ジョイント”合同音楽祭を経て2007年度の音楽祭はまさに“コラボ”、協同だった。

この活動で大学1年生は始めて現場を経験した。どうやって生徒と関わっていいのかわからない悩み、手探りで取り組んできた毎日。しかし、共に合唱コンクールに向けての日々を過ごしたことで、改めて一緒に音楽することの楽しさ、つながることのすばらしさを感じることができた。

●本番

中学生の発表



生徒の歌声に涙する学生も。本番に向けて練習してきたことが頭をよぎります。

大学生の発表



一身田小学校・三重大学連携体育授業

発表者：三重大学教育学部4年 植野このみ 加納岳拓 指導教員：山本俊彦 岡野昇

■はじめに…

今回現代GPの取り組みで、一身田小学校の3年生の体育授業に関与することになった。2回は授業アシスタントとして、授業の中で子どもたちと共に活動し、1回は授業者（植野）として子どもたちの前に立った。教育実習を終えると、なかなか子どもたちと触れ合う機会がない。このような機会をいただけたことに喜びを感じる。

■マット運動 11月16日(金) 授業者：岡野先生 授業アシスタント：植野、加納、他(大学院2年)1名 38人



実践は上図のような前転の流れに基づいて行なわれた。ボールを抱えたまま前転を行なうと、スムーズに転がる子もいれば、鼻や頭を打って痛そうにしている子もいた。しかし、ボールなし—幽霊前転となっていくうちに、何度も挑戦する姿が見られた。



前転系とは…
①順次接触と②伝導が含まれている。

左：ボール前転
右：幽霊前転

事後研より…
現在の体育

運動目的論

「運動が楽しいからやる」

マット運動
「転がるのが気持ちいい」この追求
→①、②の要素→技として確立

■ボール運動 12月7日(金) 授業者：岡野先生 授業アシスタント：植野、加納、他(大学院2年)1名 39人

ボールゲームのルールは「ボールでコーンを倒したら1点」「1ゲーム3人」「1ゲーム1分」「攻めるコーンは決まっている」「円の中には入れない」の5つである。ドッジボールしかやりたいと言わない子どもたちが、授業の中では、夢中になってコーンにボールを当てようとする姿が見えた。



左：球戯
右：球技

事後研より…

中心的なおもしろさ

子どもはここに惹かれている

ボール運動の場合…
「的当て」「鬼遊び」「陣取り」の要素が含まれる。今回のゲームは「的当て」の「当てる—当てさせない」というおもしろさが中心とされていた。

■マット運動 1月25日(金) 授業者：植野(教育学部4年) 授業アシスタント：加納 39人

「転がるということ」をテーマにこの回はボールを使って様々な転がり遊びを探した。「転がる」とは、左右軸、上下軸、前後軸という3つの軸から成り立っている。ボールを用いて「軸」をつくりだし、より「転がり」やすくした。子どもたちがそれぞれに「自分の転がり」を探していた姿が見られた。



左：遊びの発見
中：遊びの共有
右：遊びへの挑戦

事後研より…

遊びの発見

遊びの共有

遊びへの挑戦

普段の子どもたちの遊びにはこのようなサイクルが見られる。授業の中では、子どもたちから生成された遊びを大切に、教師が意味づけする必要がある。その際、「中心的なおもしろさ」から外れないようにする。

■実践から…

私たちは、子どもたちが活動に参加できなかつたり、動けなかつたりしたとき、その子どもがよりよい形で参加できるように声をかけたり、積極的にかかわることで意欲を出させようとしてきた。しかし、その子どもが「夢中になる」とか「やりたくない」ということは、周りの関係も大きく影響していることである。すなわち、個人を変えようとするのではなく、そこでの関係を変えていく必要があるのではないかと感じた。それは、今回の授業で、なかなか活動に参加しなかった(できなかった)子どもたちが、グループが変わったり、友だちに声をかけられたりすることで、自然に輪の中に入ってくるという姿を見たからである。教師はあくまでも意図的に、活動を考える必要があり、活動に入らないことを、その子ども一人の所為にしてはならないのではないかと考える。周りの状況、周りとの関係、活動の内容など、関係を変える、関係をつくるという方法はどの指導書にもなく、子どもを前にした教師にしか出来ないのではないかと考える。



自己紹介

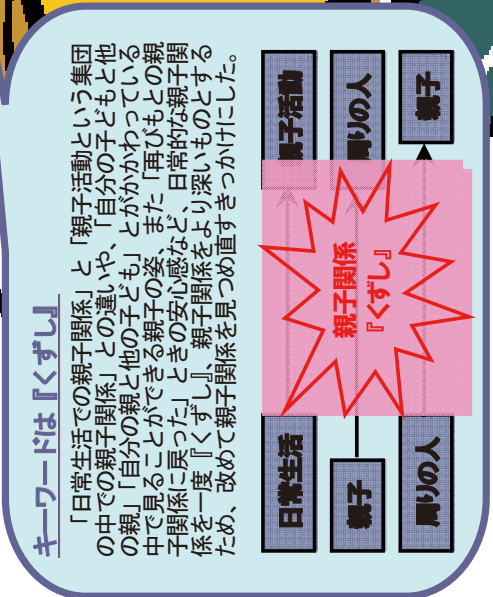
まな板洗い

卵割り

卵割り

具材決め

活動の足跡
 2007年5月31日(木)、津市立栗真小学校PTA親子活動に児童3年生(27名)とその保護者(26名)、教職員(1名)、三重大学教育学部3年生(7名)が参加した。
 今回の活動では、「親子でスキップをとったりあいながら、体と心をときどきくす」ことを目的とした。



親子だけに『親子丼』
 『親子丼』をコンセプトに親子をその具材と見立て、一連の活動内容を「親子丼作り」の調理過程として企画・運営した。

栗真小学校 PTA親子活動 親子でドーン!

「親子丼」スタート

1. 手洗い・まな板洗い
【全身心マッサージ】
2. 卵割り・卵割り
【風船を使ったゲーム】
3. 具材決め・具材集め
【レシビで集合ゲーム】
4. 具材ミックス
【円形コミュニケーション】
5. 具材炒め
【みんなであーハッハッ】

感付け【親子丼】

振り返ると...
 栗真小学校から頂いた感想では、体を動かすことにより「心ほぐし」に繋がりが、最初はやや緊張気味であった子どもも保護者も最後のほうでは、体も心もほぐれ楽しそうな笑顔が印象的でした。また、三重大学が学んだこと、計画通りに企画・運営することの難しさや経験の少なさなど、目の前の親子関係を見ること自体に手一杯になってしまい、自分の親子関係を見ることが出来ていなかった。
 今回の活動では、3つの『くずし』により、日常的な親子関係では見られない「距離」「触れ合い」のきこちなさやギョチャップを見つめ直し、互いに向かい合い、身を寄せ合える親子関係を築けるようにしたが、結果としては、表面的な親子関係には変化が見られなかった。しかし、親子活動を通して、親子同士の内なる関係に『くずし』が行われ、自分自身も知れない。今後このような視点をも大切に、実践を行っていききたい。



レシビ

具材集め

具材ミックス

さらに...

具材炒め

発表者：山本大進 安藤遼太郎 大日方政之 日比野達紀 山本洋也
 指導教員：山本俊彦 岡野昇

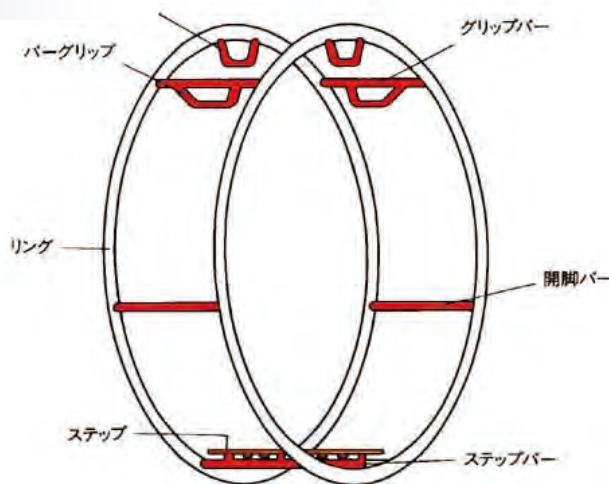
一身田中学校の保健体育授業にラート運動を導入するという取り組み

後藤 洋子 岡野 昇(三重大学)

1. ラートとは

「ラート」は1925年にドイツで酒樽の外枠をヒントにして子どもの遊具として考案された器具である。誰でも簡単に転がれる特性を持ち、後に競技種目として発展していった。現在、ヨーロッパを中心に生涯スポーツとして、また高度な技術を追求する競技スポーツとして実施されている。

日本では第二次世界大戦時に「フープ(操転器)」として航空操縦士養成の訓練活動に用いられていたが、大戦後は「軍事訓練」に繋がる活動と見なされ一切姿を消した。1989年、当時東海大学の長谷川聖修氏(現筑波大准教授)が留学先のドイツから日本に持ち帰り、ニュー・スポーツとして再び普及活動が開始された。



2. ラート運動の特性

1) ラートに合わせること、情報を受信すること。

ラート運動の特性は、見かけは器械運動や体操競技と類似しているが、ラートの運動に合わせて自分の身体を操作する必要があるという点が異なっている。つまりラートを操作するためには、ラートから積極的に情報を受信することが重要である。運動者が主体的にラートを操作するとともに、ある程度ラートに身を任せることが必要であり「自由に操ろう」という意識が強過ぎると上手くいかない。この「合わせる」と「積極的に情報を受信する」ことが不可欠な点がラート運動の特性の一つである。

2) 仲間の協力が不可欠

ラートは鉄製の大きな器具である。直径が概ね運動者の身長+30cm、重量が約50kgあるため、操作には慎重を期す必要がある。誤った使い方や緊張感を欠いた態度は大きな事故に繋がる危険性を持っている。一方、ラート運動はスポーツ種目としては、まだマイナーな存在であるため、技術習得や練習用の補助器具が殆ど発達していない。従って、安全性の確保や練習の際の補助は専ら仲間(補助者)の協力を頼るしかない。

3. 期待される効果

1) 身体面に対して

ラートの中で回転する運動は、様々に変化する体勢で、腹筋や背筋などを締めて正しい姿勢を保つことが大切なポイントとなるので、姿勢の劣化が問題となっている子供たちに推奨できると考えられる。また、ぶらさがり健康法と同様の、血行促進、肩凝り・腰痛の予防、背骨の矯正などの効果が期待されるので、生涯スポーツとしても位置付けられる。さらに身体の平衡感覚や空間に対する位置感覚が重要であり、運動の慣性、遠心力、重力などをうまく利用することで、逆さまになったり転がったりする感覚を始めとする、非日常的で新しい運動感覚を味わうことで身体感覚の向上が期待できる。

2) 精神面に関して

大きくて重いラートを操作するので危険が伴うため、集中して取り組む必要がある。運動中にお互いに補助したり協力したりして技術を習得していくという活動を通して、コミュニケーション力や信頼関係を築くことが期待される。また、逆さまになることでの開放感やストレスの解消になるようである。さらに、勇気を出して回転した時の喜びと達成感、自閉的傾向を持つ人や精神障がいを持つ人の自信にも繋がると報告されている。

4. これまでの取り組み

一身田中学校の体育授業にラートを導入するにあたって、授業担当者および関係者にラート運動の概要、特性を理解してもらうために、研修会を2回開催した。

1) 第1回ラート研修会

平成19年10月18日(木)16時から18時まで、三重大学屋内運動場にてラートのオリエンテーションを兼ねた研修会を開催した。

参加者は一身田中学校保健体育教員4名と三重大学教員1名であった。研修内容は以下の通りであった。

(1)説明:ラートの概要(器具の名称、ベルト装着方法、諸注意)など

(2)実技研修(基礎)

- ・ラートを押し回して止める。
- ・リングの中を歩く。
- ・ラートで回転する。
- ・二人組でシーソーをする。

(3)VTR視聴

日本ラート協会編のビデオ「ラート検定級ビデオ」を視聴した。



2) 第2回ラート研修会

平成19年12月27日(木)11時から昼食を挟んで17時まで、一身田中学校体育館で技術習得を中心とした研修会を開催した。参加者は一身田中学校保健体育教員4名、三重大学教員2名、三重大学学生(保健体育科4年生)2名で、講師として日本ラート協会総務部長の西井英理子氏を、アシスタントとして中京大学4年生1名を招き、ラート検定5級の技を中心に実習した。また、本研修が「中学生の体育授業」に繋がるという趣旨から、ラート運動の技術だけでなく、導入的な扱い、体づくりや動きづくりに関連する内容も併せて紹介してもらった。



5. 今後の展望

ラート運動がもたらす利点は理解できるが、学校体育に実際に導入するにあたって、様々な問題点が存在することも事実である。例えば以下のような点である。

1. 安全性の確保

運動中の安全確保が必要である。不適切な扱いで大きな事故に繋がるため、慣れるまでは安全管理に非常に手が掛かる。

2. 保管場所の問題

器具そのものが大きいため、保管場所にそれなりのスペースが必要である。さらにラートが転がったり倒れたりしないよう、固定する必要があるため、適切な場所が必要である。

3. 高価な器具

実施者の身長によって使用するラートのサイズが異なるため、生徒の身長に対応するラートが必要である。1台約20万円は手軽に購入できるものではない。

4. 指導者の不足

安全性の確保、学習の成果という面からも、複数の指導者あるいはティーチング・アシスタントの参加が望ましいが、ラート指導ができる指導者は決して多くはない。

以上のような障害が存在するため、これまで学校体育にラートを導入しているケースは大学体育での選択種目として、あるいは課外活動の体験として取り入れられた例が僅かに見られるが、中学生の体育の授業として取り入れられた実践は見られない。

今回、上記の問題点1.～3.については解決されている。問題点4.について今後、三重大学で実施される関連授業科目の中で学生のラート運動に対する経験と習熟を積み、学生がティーチング・アシスタントとして授業に関わるという仕組みを構築しようとしている。

数学教育コース学生による教育実地研究の活動

小学校での活動

数学教育コース学生（1年生）が、「教育実地研究基礎」の授業の一環として、栗真小学校・白塚小学校・一身田小学校で教育アシスタント活動を実施した。具体的な活動内容は以下の通りです。

- ①算数の計算のプリント学習のとき、アドバイスや、まる付けをする。
- ②マット運動のときのアドバイスをする。
- ③テスト直しのときに質問してくるので、それに答える
- ④授業を見学する。
- ⑤スポーツテストのとき、整列させるなどの補助をする。
- ⑥休み時間に子どもと一緒に、こおり鬼、ケイドロなどをして遊ぶ。
- ⑦朝のスピーチをする。
- ⑧運動会の練習のとき、補助活動をする。綱引きの準備や後片付けをする。
- ⑨保育園児を迎えて遊ぶときの補助活動をする。
- ⑩プールサイドで子どもたちを見守る
- ⑪図工の時間で、ボンド付けなどして、子どもの活動をサポートする。
- ⑫七夕の飾り付けを子どもたちと一緒にする、鶴の折り方を教える
- ⑬児童集会で、子どもを整列させるなどの補助活動をする。
- ⑭体育のリレーでのゼッケンの準備や、子どもの誘導をする。



学生の意見・感想

①先生が注意をすると、生徒はきちんと言うことを聞いていた。先生と生徒の信頼関係の良さに感心させられた。②どうやって教えたらいいいのか、自分は当たり前と思っているから、なかなか難しい。でも、「わかった」と言ってくれたときの笑顔がかわいく、たまりませんでした。③七夕の準備は楽しそうだったが、その中でも、安全は保たなければならない先生の責任は重く、楽しいだけではダメなんだと思った。④先生という職業が改めて“いいな”と思えた日でした。

数学教育コース学生による教育実地研究の活動

中学校での活動

数学教育コース学生（3、4年生）が「数学科教育法」の授業の一環として、一身田中学校で教育アシスタント活動を実施した。具体的な活動内容は以下の通りです。

- ①因数分解、方程式の解法、1次関数などの学習で、生徒が練習問題などに取り組んでいるとき、机間指導して、サポートする。
- ②生徒が演習問題を解いているとき、巡回しながら、赤ペンによる○付けをする。
- ③授業を見学する。
- ④放課後の学習機会である「寺子屋いっちゅう」（15：00～16：00）において、生徒の数学学習をサポートする。



学生の意見・感想

- ①授業中は、特に生徒を指導したりする場面はなかったが、生徒らの柔軟な発想には驚かされた。附属小や附属中とは違い、教師の質問に対して、生徒らが口々に答えている様は、「これが普通なんだな」という印象を受けた。
- ②図を書いて説明してあげると、「なるほど」とわかってくれる生徒がいて、図を書いて説明することは、目に見えて変化がわかるので、良い方法だと思った。
- ③実際の教育現場を見て、教師による授業工夫の重要性を感じた。これから、いろんな視点から授業を観察し、あらゆる発見ができればいいと思う。
- ④後半の問題の解答は生徒たちが黒板に書いたが、意外だったのは、その板書する生徒たちが普段はしゃべってばかりいて、ノートも出していない生徒たちだったことだ。でも、彼らはきちんとした解答を書いていたので、解き方は理解しているのだと感心した。そして、板書された解答に対しても、もし答えが間違っていたとしても、計算の仕方などが合っていれば、「やり方はこれで合っているから、いいよ」と褒めてあげることが大切だということを学んだ。
- ⑤自分がわかっているからといって、それを相手に押しつけようとする、失敗するということを学びました。次回はもっとうまくできるように頑張りたいです。
- ⑥宿題を当然のことのようにしてこない生徒がいることがわかった。私が教師になったときは、生徒が宿題をしてこないかもしれないと考えて、授業目標などを考えて作る必要があると感じた。

食に関する授業における近隣小学校との連携

家政教育コース 56 期 中村茉知佳・西村有加里・宮崎幸

家政教育コース 磯部由香



さつまいもほり



◇一身田小学校◇

2 年生 生活科

「さつまいもにチャレンジ! ~みんなでさつまいもパーティー~」

- ★授業案の作成
- ★評価の観点の作成
 - ・生活科の指導目標:『小学校学習指導要領』より
 - ・食に関する指導の目標:『食に関する指導の手引き』より
- ★授業観察
- ★さつまいもの栄養面の指導:紙芝居による指導の実践
- ★調理(スイートポテト・茶巾絞り)レシピ作成と試作

簡単・安全・おいしく!

- ★当日の実習準備および実習補助



さつまいもの
栄養を学ぶ紙芝居



牛乳の性質を知ろう!

◇栗真小学校◇

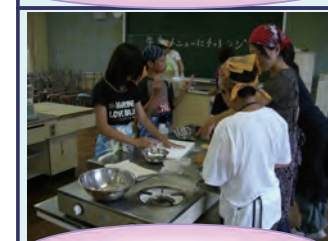
5・6 年生 家庭科

「牛乳を使った調理をしよう!」「牛乳の秘密」

- ★調理実習補助
- ★バターやカッテージチーズなどの調理加工を通して、牛乳の性質を知る調理実験「牛乳の秘密」の補助



結果を予想して…



牛乳を使った調理



バター作り

💡 実践を通して… 💡

『知っている』から『わかった』へ!

体験活動は記憶に残る理解につながる!

現場の先生から**アドバイス**を
いただける良い機会に!

レシピ作りや調理実習補助に入ってみて…

発達段階に応じた**安全管理**や**調理法の工夫**を知ることができた

大学院生・大学教員・現場教員の連携

—家庭科における弁当作りを通じた食教育—

家政教育専修1年 柳瀬みどり
一身田中学校 安野友美
家政教育講座 磯部由香・吉本敏子

家政教育専修科目である「食物学特論Ⅱ」の授業内において、子ども達を取り巻く食の問題や、近年さかんに推進されている食育の状況を捉えた上で、実際の現場を想定した弁当作りの実践を考え、指導案・ワークシートの作成を行った。それを基に実際に一身田中学校の3年選択家庭科（女子16名）において実践してもらい、振り返りを行った。

授業の流れ

- 1 限目** 適当な弁当の量を知る。
バランスの良い弁当の割合を知る。
- 2 限目** 弁当に適した調理法を確認する。
おかずを異なる調理法で調理することを知る。
- 3 限目** 班で各自異なる調理法を用いて主菜を調理する。
- 4 限目** 班で各自異なる調理法を用いて副菜を調理する。
- 5 限目** 調理実習の発表を行い、レシピ集を作る。
自分が作りたい弁当のメニューを考える。

弁当作り

各自が考えたメニューに従って、一人一人がおかずの3品入った弁当作りを行い、昼食として食べた。



かかわり

指導案の作成

中学生が弁当を作るのに必要な知識・技術とは何かを考え、それらを身に付けられるような授業を考えた。

授業の参観

行われた授業をビデオにて参観し、振り返りを行った。

実習の参観

材料の買出し、調理、試食の流れで行われた実習を参観した。

3・4 限目に行ったおかずを一品だけ作る調理実習とは違い、一人で3品のおかずを作ってつめなければならず、時間もかかっていた。買い忘れがあったり、思ったように作れなかったりと苦戦していたが、誰もが一生懸命に取り組んでいる姿が印象的であった。

今回の弁当作りではメニューが自由に決められたが、子ども達が自分に可能な範囲内で上手にメニューを選択していた。そのため難しすぎて弁当作りが嫌になったり、友達の弁当をけなしたりという姿は見られず、みんなが満足そうに作った弁当を食べていた。

まとめ

今回、自分の考えた授業案に大学教員から専門的・教科的アドバイスをもらい、それを基に実際に現場の先生に授業をして頂くという大変貴重な経験をした。その中で、こちらが意図したことを十分に理解させたり、計画通りに授業を進めていくことの難しさや、一人一人の差が非常に大きい関心度や知識・技術に対応していくことの難しさを改めて感じた。事前に机上で色々と考え工夫することも必要だと思うが、それ以上に目の前の子ども達に合わせて授業を変えていく観察力や判断力が大切なのではないかと感じた。

理科教育ゼミナールによる 一身田中学校との授業連携

三重大学教育学部 理科教育コース

目的 教育実践力を鍛えること
(前期) 教育実習に向けて、事前に教育現場を経験すること
(後期) 教育実習で学んだ経験を実践に生かすこと

対象 一身田中学校 1年生(4クラス)

学生 三重大学 教育学部 理科教育コース(3年生8名、4年生1名)

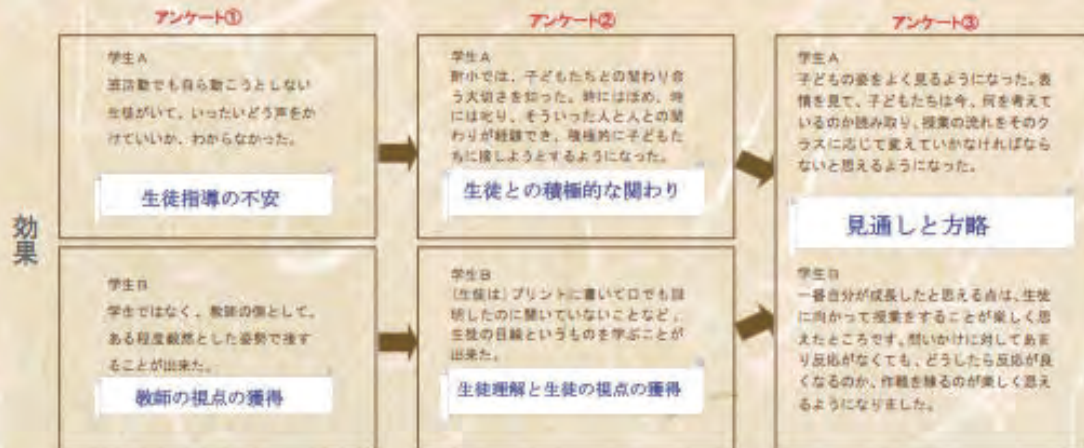
期間 前期: 6月上旬～7月中旬(全14日間、1人あたり15時間担当)
後期: 12月(全6日間、1人あたり3時間担当)
※教育実習: 9月上旬～10月上旬



活動内容

個別指導

全体指導



効果

平成 19 年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)の事業報告

上垣 渉

平成 19 年度の事業は、主として、教育学部の理科教育講座、家政教育講座、保健体育講座、幼児教育講座、音楽教育講座、数学教育講座の各教員の指導の下で、白塚幼稚園、栗真小学校、白塚小学校、一身田小学校、一身田中学校の 5 校園の協力を得て、学生の教育実践力の育成を目的として進められた。また、本事業は学校・地域の活性化を図ることも目的としており、そのための事業も実施された。それらの具体的な事業内容を一覧表にすると、以下のようになる。

理科教育講座

- ①栗真小学校における「ニジマスの解剖&調理実習」の実施
- ②一身田中学校における 1 年生理科の観察・実験の実施
- ③一身田中学校における「ニジマスの解剖&調理実習」の実施（家政教育講座との協働）
- ④一身田中学校・選択理科受講生による「青少年のための科学の祭典・三重大学大会」における実験ブース「スライムを作ろう」の出展の支援

家政教育講座

- ①栗真小学校における「牛乳を活用した調理」の実践を実施
- ②栗真小学校における「実験・牛乳のひみつを知ろう」の実践を実施
- ③一身田小学校における「さつまいもの調理実習」を実施
- ④一身田中学校における「ニジマスの解剖&調理実習」の実施（理科教育講座との協働）
- ⑤一身田中学校における「主菜作りの調理実習」の実施
- ⑥一身田中学校における「お弁当の献立作成」及び「お弁当作りの調理実習」の実施

保健体育講座

- ①栗真小学校における「親子ふれあい活動」としての「親子で井（ドーン）」の実施
- ②一身田小学校における「キャンプファイヤー時に全員で楽しめるゲーム指導」の実施
- ③一身田小学校における「基本の運動」、「ゲーム」の授業研究の実施
- ④一身田中学校における「ラートに関する講習会」の実施

幼児教育講座

- ①白塚幼稚園における未就園児保育に関する「ぴよんちゃんクラブ」の運営・推進の実施
- ②白塚幼稚園における「ドレミランド」の取組の実施
- ③白塚幼稚園における「親子で体を使って楽しむゲーム」の取組の実施
- ④白塚幼稚園における「音楽物語」の上演の実施
- ⑤白塚小学校における「リズムで遊ぼう」の授業の実施

- ⑥白塚小学校における「親子のふれあい活動」の実施
- ⑦一身田小学校における「ようこそ一小へ」（生活科）の取組の実施

音楽教育講座

- ①一身田中学校における「教育実地研究基礎」の実施
- ②一身田中学校におけるコラボ音楽祭のための合唱指導の実施
- ③教育学部と一身田中学校とのコラボ音楽祭の実施

数学教育講座

- ①栗真小学校における「教育実地研究基礎」の実施
- ②白塚小学校における「教育実地研究基礎」の実施
- ③一身田小学校における「教育実地研究基礎」の実施
- ④一身田小学校における算数公開授業のための指導案作成の実施及び公開授業の実施
- ⑤一身田中学校における「数学科教育法・教育実地研究」の実施
- ⑥一身田中学校における数学公開授業のための「授業づくり研究会」の実施及び公開授業の実施

なお、上記の事業以外にも、下記のような事業を実施した。

(1)一身田カルチャースクールの開催

平成18年度に、第1期・第2期のカルチャースクールを開催したが、それに続いて、平成19年度は、第3期・第4期のカルチャースクールを、下記のように開催した。

第3期

- 第1回講座：6月1日（金）講師 教育学部教授 吉本敏子（家政教育講座）
「守ろう！あなたの財産 ―消費者被害への対応策―」
- 第2回講座：6月15日（金）講師 澤田昇三（三重社会保険事務局 年金業務指導官）
「どうなってるの？ 年金制度」
- 第3回講座：6月29日（金）講師 教育学部教授 本田 裕（理科教育講座）
「どうなる？ 一身田に大地震！」

第4期

- 第1回講座：10月5日（金）講師 田部眞樹子（三重県子どもNPOサポートセンター理事長）
『あなたの「子育て」応援します！』
- 第2回講座：10月19日（金）講師 石川妙子・西山勇介（津市役所健康福祉部介護保険課）
『「介護」に対処する法！』
- 第3回講座：11月2日（金）講師 生物資源学研究科教授 高山 進（資源循環学科）
『どう考えたらいいの？ 環境問題』

(2)一身田中学校におけるキャリア教育講演会の実施

一身田中学校2年生対象の講演会を教育学部の山根栄次教授を講師として開催した。

白塚幼稚園の取り組み

津市立白塚幼稚園

本多 啓子

<実施項目>

- ① リズム遊び（ドレミランド）における支援
- ② 「音楽物語」の上演活動の実施
- ③ 未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）の運営支援
- ④ 休日参観での「親子で体を動かそう」の実施

<対象児>

- ・ 4歳児 12名 5歳児 17名 合計 29名

<活動内容および考察>



① リズム遊び（ドレミランド）における支援について・・・5月29日～7月10日

（中西智子先生、幼児教育1年生2名）

本園では、週1回 火曜日に全園児でリズム遊びを実施している。園児たちがピアノの曲を聞いたりリズムの速さに合わせたりして体を動かして表現をするという活動である。

2名の学生が交代してピアノを弾く支援をしてくれたことで、幼稚園の教師は幼児たちへの指導に力を入れることができた。また、もう一人の学生は幼児と共に体を動かす中で、幼児の活動に対する楽しい思いを共感したり、幼児の反応をそばで感じたりすることができたと思う。



当日の朝、活動が始まるまでのわずかな時間に打ち合わせをしてきたが、幼児の動きに合わせてピアノの強弱や速さを考えて弾くことは、なかなか難しいと思われた。もう少し事前の打ち合わせに力を入れ、園側の活動のねらいやピアノをどのように弾いてほしいかを伝え、学生が安心して取り組めるようにしていくほうがよいと感じた。

② 「音楽物語」の上演活動の実施について・・・6月29日 9:20～10:00

（中西智子先生、幼児教育3年生10名・保健体育1名・家政教育1名・人間発達科学課程6名）

「とんでったバナナ」「きつねくんの大作戦」（オリジナルの話）の中で、手作りの人形やペープサートを使い、歌詞やお話の内容に合わせて楽しく演じてくれた。

幼児たちは手作りの温かさを感じながら、人形の動きや効果音の楽しさに見入っていた。

この活動を通し、園児たちは一緒にうたったり、変化のある動きや効果音に楽しい気持ちを表現したりして、豊かな経験をすることにつながっていった。



③ 未就園児保育（ぴょんちゃんクラブ）の運営支援・・・5月10日～1月31日

（滝口圭子先生、幼児教育3年生10名 10月11日からは3年生3名）

毎木曜日の午前中、当園では未就園児（幼稚園入園までの0歳～3歳の乳幼児対象）が保護者と共に来園し、粘土遊びや積み木、ままごと、絵を描く、砂場で遊ぶなどの保育を実施している。学生たちは、当園のボランティアの保護者と一緒に、未就園児の遊び相手をしたり保護者の悩みを聞いたりなど活動の支援をしてくれた。毎回みんなで一齐にする活動の中では、手遊びやふれあい遊びをしたり絵本を読んだりし、また、この保育の中で使用する机やイスなどを牛乳パックなどの廃材を利用して作ったりすることにも積極的にかかわってくれた。



会終了後には、園長、ボランティアの保護者と共に感想を言い合ったり次回の打ち合わせをしたりなど反省会の時間を大切にしてきた。

その中で、学生たちは『幼児の年齢によって興味や関心が違ったり、遊び方が違ったりする』ことに気付いたり、月日の流れの中での幼児の成長を知ったり、また保護者の思いを感じたりなど、いろいろなことを感じたり学んだりして、学生たちの成長にもつながったことと思う。

④ 休日参観での「親子で体を使って楽しむゲーム」の実施について・・・

6月12日 9:30～10:30

（滝口圭子先生、幼児教育3年生8名、2年生9名、1年生8名）
3年生が中心になって計画をたてて進行していき、その他の学生も活動の中に入り援助した。それぞれ役割分担をし、わかりやすく説明したり園児にかかわったりして「親子で楽しむ簡単な体操」や「じゃんけん電車」などのゲームをして楽しい時間を過ごすことができた。



学生たちがたくさん参加してくれたことで活気ある活動になり、一人一人の幼児にも目が行きとどき、楽しい雰囲気の中で親子ともに有意義な時間を過ごすことができた。しかし学生たちは自分の担当するところに一生懸命だったことで、時間配分の点で計画が甘かったように思った。



次から次へとどんどん進めていくあまり、計画したことが早く終了してしまい、園側の教師が急きょダンスを取り入れることになった。

この点については、事前に時間配分や内容など指導計画をもとに、お互いに意見を出し話し合う時間をとることが必要だった。また“幼児たちが年齢別でどんなことができるか”ということを知りたいと事前に知らせる計画を立てることが大事だったと思う。今回の反省材料を今後生かしていけるようにしたいと考える。



上記のほかにも、都合のつく学生に来園してもらい運動会では道具などの準備を、音楽会では幼児に衣装を身につけたりする手伝いをしてもらった。また、クリスマス会では一役として保護者や職員と一緒に劇に参加してもらったり、「はらぺこあおむし」の大型絵本を歌にのせて読んでもらったりなど幼児たちに楽しい経験の場を作ってもらった。3月1日に予定している生活発表会（劇遊びや歌をうたったりして保護者に見てもらおう）にも参加してもらおう予定である。

園側が協力を依頼すると、学生たちが連絡をとりあい都合をつけて快く参加してくれ、前向きで意欲的な気持ちを嬉しく思った。

＜今後に向けて…＞

学生たちは、未就園児や在園児たち（0歳～6歳の子どもたち）の、その時期の姿、そしてその中で成長の姿を感じたりし、また教師の援助の仕方や思いにも気づくことができたのではないだろうか。また、家庭で中心になって育児を担当する母親の思いにも触れることができたと思う。

学生たちは、0歳～6歳までの子どもたちに意欲的にかかわろうとし、かかわった活動の中でいろいろなことに気づき、心を動かしていた。

私たち教師は、その学生たちの気づきや学びを、幼児の成長段階の中で考えて“今、どのような発達段階の時期なのか”“幼児の気持ちをどのように受けとめていくか”“どのような援助をしていくことが大事なのか”ということを経験づけて返していくことが必要になってくると考える。

今後、学生の新鮮な声に耳を傾け、教師も一緒に成長していきたいと感じた。

白塚小学校の取り組み

津市立白塚小学校
渡邊 史

1. 今年度の取り組み

教育目標 「豊かな心を持ち、命を大切にし、学び合い、共に高まる白塚の子」

めざす子ども像 ★豊かな心をもつ子 ★命を大切にする子 ★自ら学ぶ子
★仲間と学ぶ子 ★白塚を誇りに思う子

研究主題 「なかまとつながり、共に高まる子～一人一人が認め合う仲間づくり～」

(1) 学年活動(2年生)

10月12日(金)5,6時間目に体育科の山本先生と学生に来ていただき、「体ほぐしの運動」を行った。

＜内容＞じゃんけん列車、ジェンカ、1つの大きな輪になって広がったり縮んだり、カートに乗って足の間をくぐっていく、親の上に子どもがのったり、子どもの上に親がのったりする、3人組で回る…他



(2)リズム遊び(なかよしA・B組)

なかよしA・B組の担任2名が大学へ行き、中西智子先生に「リズム遊び」についての方法を教えていただいた後、10月に一度中西先生に小学校へ来ていただき、1時間授業を行っていただいた。太鼓を使ったさまざまなリズム打ちを子どもたちはとても楽しみ、その後も継続して取り組んだ。

12月4日に、本校での研究授業「リズムであそぼう」で全教員が見学し、研修を深めた。



(3)教育実地研究

6月から、数学科、学校教育コースの1年生7名に来てもらい、各学年・特別支援学級に継続して入ってもらっている。授業見学以外にも、プリントの採点、掲示物の張りかえ、整列などできることをやってもらっている。

2. 成果と課題

(1)成果

①子どもたちの学びにつながる取り組みができた。

なかよしA・B組の「リズムであそぼう」では、太鼓でのリズム遊びを通して、子どもたちがリズム楽器に興味を持った。その中で、自分自身の満足感・達成感が味わえただけでなく、友達のよいところや、友達とリズムを合わせる楽しさというものも感じる事ができた。

「教育実地研究」では、積極的に子どもたちと関わりを持って活動をしてくれる学生もいて、時間をオーバーしても、休み時間に子どもと遊ぶ姿がみられた。運動会は日曜日に行ったが、子どもたちの演技を見に来てくれた。

子どもたちも週1回来ていただく日を心待ちにしている、計算がわからないところを相談したり、休み時間はみんなが学生を取り合って遊んだりしていた。帰りの会の「よかったこと」の発表では「〇〇先生と休み時間遊んで楽しかったです」という声が聞かれた。

②親子のコミュニケーションがもてるよい機会ができた。

2年生の「体ほぐし運動」では、はじめ母親と触れ合っただけで活動するのを恥ずかしがっていた子どもが、終わる頃には自然にコミュニケーションがとれていた。

③教員の研修になる取り組みができた。

なかよしA・B組では、中西先生にいろいろなリズム遊びを教えていただいたことで、指導の幅が広がり、それを子どもたちにかえしていくことができた。2年生の「体ほぐし運動」では、様々な「体ほぐしの運動」を知ることができた。

(2)課題

①継続した取り組みが少ない

小学校と大学とが互いに連絡を密にするのが難しいのもあり、計画を立てて実践を進めていくことがあまりできなかった。

②「教育実地研究」の問題点

「教育実地研究」では、大学生のスケジュールと小学校の学期の日程がかみ合わないことがある。また、小学校の学級の様子が変わっていて入ってもらいにくいクラスがあること、学生の質や意欲の違い等があることなど、難しい面もある。

3. 来年度に向けて

本年度は、なかよしA・B組の「リズムであそぼう」では、研究主題に関わった取り組みができたが、来年度は他の学年・クラスにおいても、大学との連携の中で「めざす子ども像」に即した、子どもの学びに即した授業づくりができればと考える。

本校は、中国、フィリピン、ボリビア、ブラジル、ペルーなどから日本に来た児童が在籍している。言葉や文化の違いから、問題も少なくない。ポルトガル語やスペイン語などでの支援や日本語の勉強のサポートをできればと考える。

毎年秋に劇を鑑賞する時間をもっているが、音楽を鑑賞する時間はない。いろいろな楽器や、音楽の形態を大学から紹介していただく形で鑑賞会がもてればと考える。

それぞれの取り組みが単発的で、継続してやっているものがないので、1年を通してできる取り組みがあるとよい。

栗真小学校の取り組み

栗真小学校

林口 友香

栗真小学校は全校児童 130 人の小規模校で、どの学年も 6 年間クラスがえがないので、児童は限られた人間関係の中で学校生活を送っている。そのため、三重大生との交流は、新しい人間関係の築き方を学ぶためにも、固定化された人間関係を柔軟にするためにも、意義のある活動である。

本年度は、「教育実地研究基礎」を受講している学生に、年間を通して授業に入ってもらえることができた。原則として、毎回同じクラスに同じ学生を割り振ったので、児童は学生に親しみをもつことができ、来る日を楽しみに待つようになった。学生も、どの児童にどのような支援が必要かが次第に分かるようになり、ずいぶんと活躍してもらった。

一方、課題としては、授業の進め方や子どもへの関わり方などについて、担任と学生が打ち合わせする時間がないということ、また、時間割の関係で、個別指導が必要な授業や学生が得意とする教科に、必ずしも入ってもらっていないということなどが挙げられた。

次に、今年度、各学年が行った三重大生との連携授業を紹介していく。

まず、5 月 31 日、3 年生親子が、栗真小体育館にて、三重大の岡野先生と体育科の学生の指導のもと「親子でドーン（体ほぐし運動）」という P T A 親子活動を行った。

本校で人間関係が固定化されているのは、子どもたちに限らず保護者同士でもある。そこで、P T A 親子活動の指導者を三重大（外部）から招けば、新鮮な気持ちで活動ができ、親子だけでなく、保護者同士や自分の子ども以外の児童との親睦を深められるのではないかと考え、三重大に連携の依頼をした。

やはり外部の指導者に入ってもらったことで、結果的に、参加者の甘えやわがママが抑えられ、過去の親子活動よりも、親子以外の関わりが増え、いきいきと活動できたように思う。学生の若さや元気な姿に、後押しされたという面も大きい。

保護者にも子どもたちにも大好評で、子ども会などの行事にも三重大生に来てもらいたいという声もあった。

大学では当日撮影したビデオ映像を使って授業が行われたようであるが、今後は、その内容を小学校にも何かの形で還流していただけると、現場としても勉強になりありがたいと思う。

次に、6 月 25 日、6 年生が「ニジマスを解剖して食べよう」という理科の学習を行った。大学からは後藤先生と理科の学生に来てもらった。

活動のねらいは、理科の新教材の開発、児童の解剖に対する抵抗をなくす、児童に自分たちは生き物の命をいただいて生活しているということを知らしめるの 3 点である。

児童たちは、ニジマスを生きたまま解剖し、血液の流れや消化器を観察した後、そのニジマスを料理して食べた。

循環器や消化器に対する興味や知識は、写真や映像で学習した時よりも、明らかに高まった。また、食べ物に対する意識にも変化が見られた。

この活動の課題としては、生きたニジマスの確保と、解剖や調理の際には班に一人程度のサポートが必要であったが、その人員の確保が、小学校ではなかなか難しいということが挙げられた。

続いて、食教育の取り組みを紹介する。6月～7月にかけて、5，6年児童が、三重大の磯部先生と家政科学生6名のサポートのもと、「牛乳」をテーマにした食に関する学習を行った。

まずはじめに、「牛乳を活用した料理」に取り組んだ。インターネットや書籍で牛乳を使った料理を調べ、児童たち自身がメニューを決めた。調理の手順や分担なども班で計画をたて、その計画書にそって調理実習を行った。

各班に一人学生が入り、児童たちはアドバイスや手助けをしてもらいながら、実習をすすめた。「なめらか杏仁豆腐とピーナッツミルク」「キラキラミルクゼリーと和菓子風ミルクシェイク」等のメニュー名からも分かるように、自分たちの思いの詰まった調理実習であったので、どの班も意欲が高く、この調理を通して自主性も育てることができた。寒天が固まりにくく、時間のかかった班もあったが、磯部先生や学生に助けられ、何とか作ることができた。後に、寒天が固まらなかった原因を、学生が検証し、その結果を小学校にも教えていただいた。

ただ、小学校の事情で、担任が家庭科を担当しておらず、時間的に大変厳しかったという反省点は挙げられた。

調理の次は、①ろ過 ②温め ③砂糖、塩、レモンを加える ④振る ⑤カッターチーズ作りと試食という手順で、「牛乳の秘密を知る」という実験を行った。

実験に不慣れな児童たちであったが、ここでも学生にサポートしてもらったので、時間内に全ての実験を終えることができた。児童たちは、実験をしながら、自分たちにとっても身近な食材である「牛乳」の性質を実感していた。特に、⑤のカッターチーズ作りと試食は、児童たちの驚きも大きく、とても喜んでいた。

最後に、明後日2月29日に行われる、取り組みについて紹介する。

本校では、毎年この時期に「6年生を送る会」が盛大に開かれるが、今年は新しい試みとして、三重大の根津先生と音楽科の学生にお世話になって「三重大生によるミニコンサート」がプログラムの最後をかざることになっている。

本校の児童のほとんどは、生の楽器の音色を知らない。この機会に、児童たちには、音楽を聞くときのマナーなども身につけながら、音楽を全身で楽しんでほしいと思っている。

このように、今年度も、様々な形で、三重大との交流を行ってきた。児童にとっても学生にとっても、大変有意義なこの「現代GP」活動を、今後とも発展させていきたいと思う。



3年生親子活動
「親子でドーン」



調理実習
「牛乳を活用した料理」



実験
「牛乳の秘密を知る」

一身田小学校の取り組み

津市立一身田小学校

中川淳子

一身田小学校は全校 786 名の大規模校である。

「教育実地研究基礎」を受講している学生との連携

- 本年度は年間を通して授業に入ってもらうことができた。原則として、毎回同じ学年・学級に入ってもらった。ただし、学生にいろいろな経験をしてもらうために、前期と後期にわけて、学年・学級を決めた。
- 同じ学生に入ってもらうことで、児童は学生に親しみをもつことができ、学生が来てくれる日を楽しみに待つようになった。学生も、どの児童にどのような支援が必要かが次第にわかるようになり、支援できるようになった。
- 課題として、「子どもへの関わり方などについて、担任と学生が打ち合わせや反省をする時間がない」「時間割の関係で、個別指導が必要な授業や学生が得意とする教科に、必ずしも入れない」ことが挙げられる。

1年生の取り組み

- 来年度小学校に入学する幼稚園・保育園児を招き、「ようこそ一小へ」の取り組みを行った。遊びを通して勉強や給食のことを伝えるコーナー（すごろく・さかなつり・まとあて・わなげ・きゅうしょくなど）を各クラスで考え、園児に楽しんでもらった。準備段階から各クラスに3～4名ずつの幼児教育コースの学生に入ってもらい、コーナーの制作やどのように遊ばせていけばよいかについてなどのアドバイスをしてもらった。
- 1年生の児童は、「園児に楽しんでもらいたい。」「園児に教えてあげたい。」という気持ちはあるが、それをどのようにして具体化して進めていったらよいかを自分たちだけで考えることは難しく、担任一人では各グループへのきめ細かな指導は十分にはできなかったと思う。しかし、準備から本番、後かたづけまでを同じ学生に入ってもらい、一貫して見てもらいアドバイスを受けることで、児童の考えているコーナーに仕上げていくことができた。コーナーの準備が進むにつれて児童は、「早く本番を迎えて園児たちを喜ばせたい。」という気持ちをふくらませていった。本番でもはりきって活動することができた。
- 学生との打ち合わせの時間をほとんど持つことができなかった。一人一人の児童に合った対応をしてもらうためには、事前の打ち合わせ、事後の反省の時間を持つことが大切だと感じた。



2年生の取り組み

○ 2年生は、10月に三重大の磯部先生と家政科学生のサポートのもと、「さつまいも」をテーマにした生活科と食に関する学習を行った。10月12日(金)のさつまいもの収穫の後、16日(火)に「さつまいもについて調べよう」の学習をした。「さつまいも」について家の人にインタビューしてきたことを発表したり、自分たちで書籍を使って調べたりした。また、用意したいろいろな種類のいもを興味深く見ていた。授業の最後にまとめとして、学生にさつまいもの栄養についての紙芝居をしてもらった。

18日(木)に「さつまいも料理について調べよう」の学習で、家の人に教えてもらった料理のレシピをそれぞれが発表した。その中で簡単に作れるスイートポテトと茶巾しぼりを作ることになり、その作り方や手順などは、わかりやすく書いてある模造紙のレシピ表を使って、学生に説明をしてもらった。

調理実習は、10月23日から25日の3日間にかけて、磯辺先生や家政科の学生に来てもらって、5クラスそれぞれが行った。各班に一人ずつ学生や教師が入り、児童たちはアドバイスや手助けをしてもらいながら、おいしいスイートポテトと茶巾しぼりを作ることができた。できた茶巾しぼりは、ラッピングをして1年生にプレゼントした。

○ 学生が手作りの紙芝居やレシピ表を作ってくれ、それを子どもたちに見せたり、説明をしてくれたりした。2年生では、栄養などの食育の部分は難しい内容であるが、レシピの表などは、キャラクターや絵を入れて作られてとてもわかりやすく、子どもたちが興味をもって説明を聞くことができた。

調理実習も各班に学生が入ってくれたので、衛生や安全に気をつけながら、子どもたちは意欲的に調理することができた。また、自分たちで育てたさつまいもで作ったという喜びを感じることができた。

○ 調理実習の時、4～6人の学生がサポートしてもらったことはとてもよかったが、時間の都合もあり、学生との事前の打ち合わせが十分できなかつた。また、料理を子どもたちに考えさせたり、実習の時の準備をさせたりするなど、もう少し子どもたちが主体的に活動できる場を設定できるとよかった。



3年生の取り組み

○ 11月16日、12月7日、1月25日の3回にわたって、三重大の岡野先生と体育科の学生3名の指導のもと、子どもたちがいきいきと運動する楽しい授業を実践していただいた。「前転や後転

などの基本の運動の際に、力が入りすぎて自然な動きができない「ボールゲームの中で、勝敗にこだわりすぎたり得意な子だけが活躍したりする場面がみられる」の課題を解決するための授業を岡野先生にお願いしたところ「Gボールを使った基本の運動」「シュートゲーム」の二つを実践してくださいました。授業の初めには「船長さんの命令ゲーム」「手をつないで力を合わせる運動」「風船やフロートアールを使った運動」などの体ほぐし運動を準備運動として行い、友だちと自然に触れ合い関わり合うことで和んだ雰囲気の中かで授業がスタートできた。「Gボール運動」では、Gボールと一緒に転がることで痛さや恐怖心もなくなり、どの子も自然に思い思いの回転運動に取り組んでいた。そして、いつのまにかお互いの転がり方を教え合ったり、新しい転がり方を見つけたりと、次への意欲につながっていった。また、「シュートゲーム」では、一分間という短い時間の中で3人ずつの2チームがボールをパスしたり持って走ったりしてコーンめがけてコートいっぱい走り回っていた。この流れを20分間の中で何回も展開していくので、運動量は勿論のこと、展開も早く、ボールゲームの苦手な子も得意な子も関係なくみんながいきいきと楽しく運動していた。



- 普段、体育が苦手でぎこちない動きをしていた子どもたちが本当に楽しそうに体を動かしていたこと、新しい技に次々に挑戦したいという意欲をみせていたことなど新しい一面をみることができた。
- 「Gボール」や「シュートゲーム」などの授業をしていると、他の学年からどんな授業なのか尋ねられることがあるので、教えていただいたことをぜひ他の学年にも還流していきたいと考えている。

校内研修への指導・助言

本校では、「主体的に学び、高め合う子どもの育成」のテーマで、算数科の授業を中心にして研修を行っている。3年目の本年度は、数学教育の上垣渉教授に来ていただき、「子どもが考えを深めたり広げたりするための授業者の関わり方」について、指導・助言をいただいた。

8月の学年会・全体研修会での指導案検討から、2学期の各学年の研究授業・事後検討会まで、算数科のねらいはもちろんのこと、授業の進め方等、多くのことを教えていただき、大変勉強になり、研修を深めることができた。

このように、今年度は様々な形で、三重大学との交流を行ってきた。いくつかの課題はあるものの児童にとっても、学生にとっても、教師にとっても大変有意義なこの「現代GP」の活動を、今後とも続けていきたいと思っている。

主体的に課題解決する学びをとおして、創造性や社会性を育む教育の推進
— 『現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)』事業を活用した教育実践 —

津市立一身田中学校
中川 克巳

1 一身田中学校が目指すところ

実社会に関わりをもちながら、生徒自らが主体的に課題を発見し、問題解決を図るプロセスを検討し、創意工夫して実行できる学習活動を積極的に導入し、夢を描く力、チャレンジ精神、創造力、コミュニケーション力、社会性等の育成を図る。

また、課題解決の視点を取り入れた地域に根ざした実践的な学習活動を展開することにより、未来をたくましく切り拓き、地域に愛情を持った次代の担い手を育成することを目指している。

2 基礎・基本の定着を図る教育活動

各教科の学習が生徒の主体的な学びを引き出す魅力的な内容となる授業づくりについての研修を深めるとともに、ティーチングアシスタント（三重大学教育学部学生）を活用し、より分かる授業を展開している。



3 創造性や社会性を育むための教育活動

継続的・体系的に自己理解や職業理解、社会理解を深めることのできる体験的な学習活動を導入し、自己の適性や可能性を理解するとともに、自己と社会との関係性を認識することで、社会に自立できる資質や態度を育成を図っている。



4 教員の資質向上を高める取組

基礎学力の定着と問題解決能力や社会的実践力の高める探求的な学習の指導方法について研修を深めるとともに、授業実践においてその効果について検証を行っている。また、三重大学との連携のもと、先進的な学習プログラムの開発や実生活に密着した学習プログラムの開発に取り組んでいる。

5 学びの拠点としての取組

○ 大学生や地域人材の活用を図り、基礎学力の定着とコミュニケーション力の向上を目指している。

地域と学校の協働による活動を展開するために、保護者や地域ボランティアによる地域の組織(サポーターいしんでん)の構築に着手している。地域、家庭の教育力のさらなる向上を目指し、教育支援講座「一身田カルチャースクール」を開設している。



6 一身田中学校の特色ある教育活動

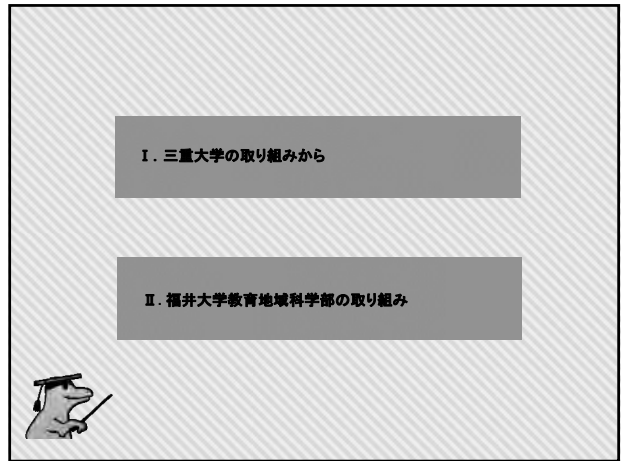
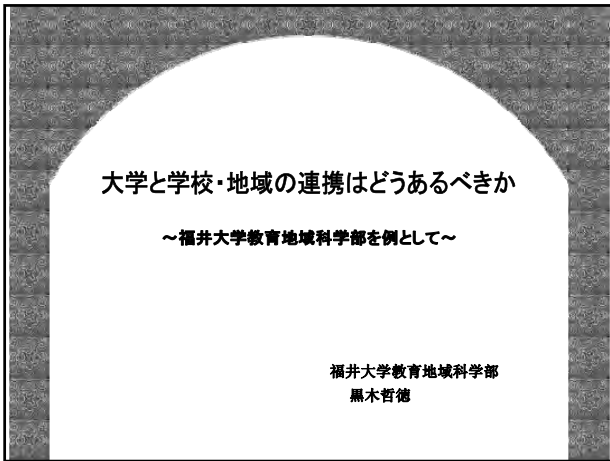
○ 人間関係をよりよくするためのコミュニケーション能力やストレスをコントロールする能力などを育成するために、生徒の主体的な参加型学習「ライフスキル学習」を導入している。

○ 実社会における様々な状況や変化を的確に見抜き、分析する能力を高めるスキルアップトレーニングを取り入れた「職業調べ学習」を実施している。

○ 実社会に存在する様々な諸課題に目を向け、主体的に課題解決を図るために、ゲストティーチャーを活用したネットワーク型授業を実施している。

命の尊さを深く心に刻み込むことのできる学習活動を通して、身近にある問題から社会問題に主体的に目を向け、その問題解決を図ることのできる態度と行動力を育成している。





I. 三重大学の取り組みから

「社会が求める教員養成と地域の教育力向上のモデル構築」

特徴: 地域を丸ごと抱えていること

(1) そのための具体的内容

- ★ 実践的力量形成のための新たなカリキュラムの構築(学生の育成)
教育実地研究
親子活動プログラム
子育て支援プログラム
- ★ 大学教員と現場教員との連携(現職教員の力量向上)
公開授業
ジョイントコンサート
ジュニアサイエンススクール
- ★ 地域の教育力向上(地域住民、保護者)
カルチャースクール

(2) 理念—方法—成果—評価 はどうなっているか

(3) 今後の展望

I. 三重大学の取り組みから

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

(A) 学部名称から地域連携が前提

従って、地域そのものが表面に出ることはあまりない。

<教授会声明>

「地域の教育改革を支える教員養成系学部・大学院における教師教育のあり方」
2000.9.

「地域に根ざし開かれた教育・学術・研究の拠点としての教育地域科学部のあり方」
2001.10.

「21世紀における日本の教師改革のデザイン」
2002.3.

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

ケルン憲章
—生涯学習の目的と希望—

来世紀は柔軟性と変化の世紀と定義されるであろう。すなわち、**流動性への要請**がかつてないほどに高まるだろう。今日、パスポートとチケットにより人々は世界中どこへでも旅することができる。**将来には、流動性へのパスポートは、教育と生涯学習となるであろう。この流動性のためのパスポートは、すべての人々に提供されなければならない。**(2003年ケルンサミット)

これを實現するものとして**質の高い教員の養成**

ユネスコ高等教育世界宣言(1998.10)
—21世紀の高等教育 展望と行動—

教育は、人権、民主主義、持続可能な開発および平和のための基本的な柱であり、したがって生涯を通じてすべての人が利用できるべきであり、さまざまな部門、特に一般的、技術的、および専門的な中等教育と高等教育の全体およびそれらの間で、さらに総合大学、単科大学および技術訓練施設の全体およびそれらの間で、調整と協力を保障するための手段が必要である。

これを實現するものとして**大学と地域の学校と連携**

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

(B) 学部・大学院の将来計画との運動

教員養成の新しい方向性の追求と同時にその実行を通して学部・大学院も変わっていく。

特別の負担感を感じないために、地域連携が学部・大学院の改革の道筋に沿うことが大切

11. 福井大学教育地域科学部の取り組み


(C) 教員養成系学部としての役割


「養成」-「採用」-「研修」のサイクルを支援すると捉える

- ・地域の教育改革を支援、教師の生涯にわたる力量形成を支える機関であること
 - 一人一人の子どもたちを支援、**子どもたちが主体となる共同探求の学びを中心とする学校改革の筋道**を提起し、それを担う**教師の力量形成を支援**していくことである。
- ・**教職に関する地域の総合センター**として役割を担う

12. 福井大学教育地域科学部の取り組み

大学は新しい価値の創成に貢献するが、その価値は無制限に拡散させてはならない

 実験学校(附属学校)を含む試行的研究の必要性

 <授業と学習のあり方>

- ・「目標—達成—評価」型 ⇒ 「主題—探究—表現」型
- ・発意—構想—構築—遂行—省察 の学習サイクル

多人数伝達型から協働の学習へ(学習観の転換)

「知識の習得」⇒「社会への参加」へ

13. 福井大学教育地域科学部の取り組み


デューイやヴィゴツキーなどの学習理論の再評価 (レイブ、ウエンガー、エンゲストローム)

学習=実践のコミュニティへの参加と熟練の発達


PISAはその調査の目的
not mainly in terms of mastery of the school curriculum, but in terms of knowledge and skills needed for full participation in society

学習にとって重要なことは、**内容(content)、認知(cognition)、状況(context)**とされる

14. 福井大学教育地域科学部の取り組み

 <学校改革の道筋>

- ・学びあう共同体として学校のあり方(= **探究するコミュニティ**)
- ・学校の抱えている問題を中心に据える

 <教師の力量形成の支援>

- ・事例研究が中心
- ・省察的実践者

15. 福井大学教育地域科学部の取り組み

(D) 学校改革実践コースの設置(地域への拡大)

学校現場に大学院を!

- ・学校の抱えている問題を中心に据える
- ・事例研究が中心
- ・省察的実践者

 **教職大学院へ**

16. 福井大学教育地域科学部の取り組み

教職大学院の目的

教師の協働の学びを支える教職大学院

1. **学習観の転換を図る** (指導伝達・蓄積型学習から協働探究プロジェクト参加型学習観へ：プロダクト中心からプロセス中心カリキュラムへ)
2. **協働研究 と 事例研究を中心とする**
個別の研鑽ではなく 実践に即して
3. **教員の力量形成にかかわる実践-省察-再構成のサイクルを構築する** (省察的实践)
4. **学校の抱える課題を、学校拠点 (オンサイト) で協働研究する** (同僚制の構築)
5. **教員の力量形成にかかわる世代の生成継承サイクルを構築する**

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

福井大学における教職大学院

1. 21世紀のスクールリーダー・研修リーダーを育てる
 学校拠点・・・オンサイトでの研修
 地域拠点・・・土日・夏期等の休暇利用・ネット利用
 研究所拠点・・・研修リーダー養成・コーディネータ養成研修
2. 新しい時代の教職専門職を育てる
 学校拠点・・・ストレートマスター
 地域拠点・・・臨時任用教員
3. 大学における教職・FDの専門性養成をおこなう

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

(E) 学生の実践的力量的形成

このような動きの中に学生をインジェクトすることで、実践的力量的形成を図る

・探究ネットワーク

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

探究ネットワークのねらい

子どものねらい

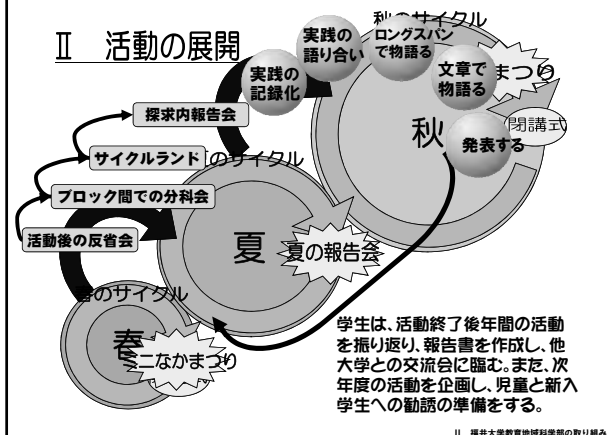
- 関心のあるテーマに沿って、子どもが主体的に取り組む学習活動
- 集団の中で仲間と協働して活動を創り上げていく力を培う

学生のねらい

- 子どもの主体的な学習活動を援助する方法を学ぶ
- 援助者が共に成長していくためには、援助者集団をどう組織したら良いのかについて学ぶ

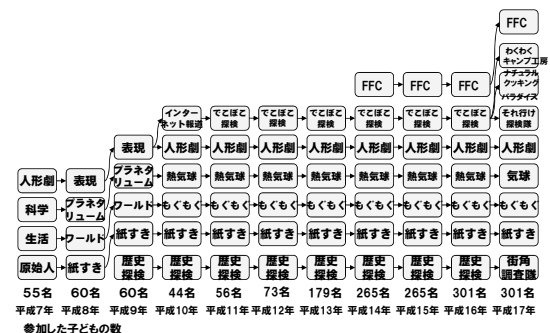
II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

II 活動の展開



II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

探究ネットワークの活動における活動グループの変遷



II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

(E) 学生の実践的力量的形成

このような動きの中に学生をインジェクトすることで、実践的力量的形成を図る

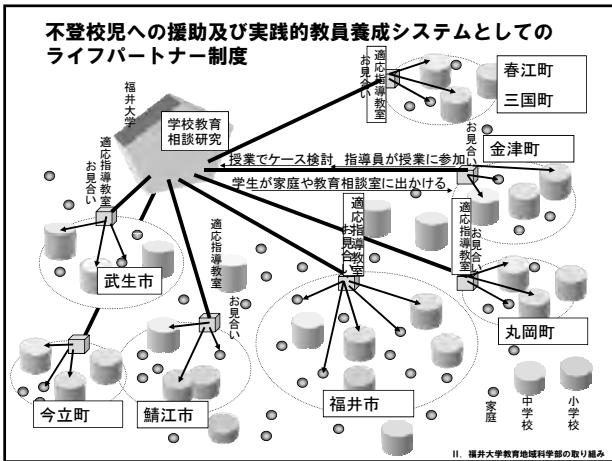
- ・探究ネットワーク
- ・ライフパートナ

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

ライフパートナー事業 地域と協働した不登校児支援事業

- 地教委と連携した不登校と軽度発達障害児への支援事業12年目
- 地域でのボランティア活動であると同時に生徒指導・教育相談の実習
- 学生の実践と連動して行われる講義事例研究と概論講義
- 1年間行われる講義と実習 2年間8単位可能

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み



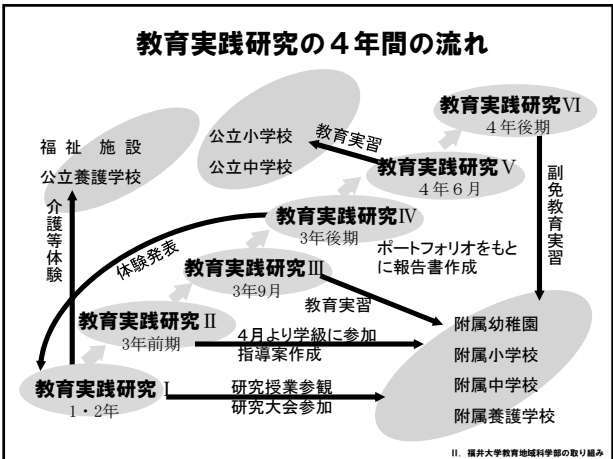
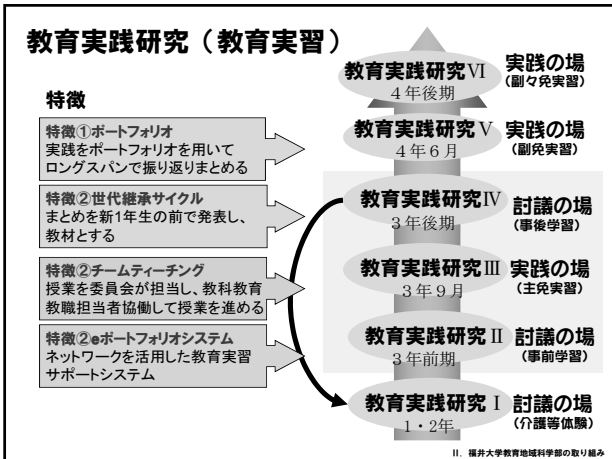
(E) 学生の実践的力量的形成

このような動きの中に学生をインジェクトすることで、実践的力量的形成を図る

- ・探究ネットワーク
- ・ライフパートナ
- ・子ども放課後ボランティア

これらを含むものが、教育実践研究(10単位)


II. 福井大学教育地域科学部の取り組み



(E) 学生の実践的力量的形成

このような動きの中に学生をインジェクトすることで、実践的力量的形成を図る

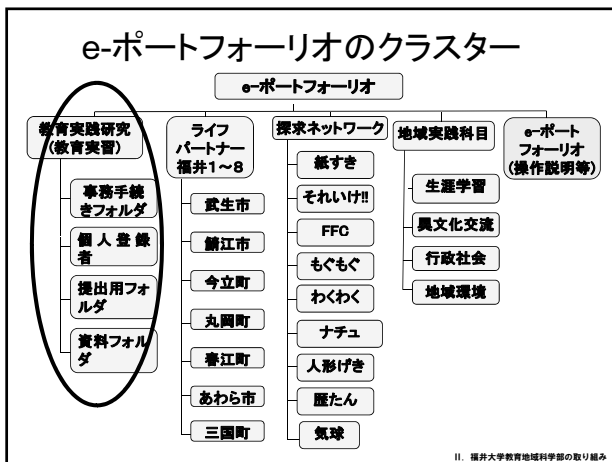
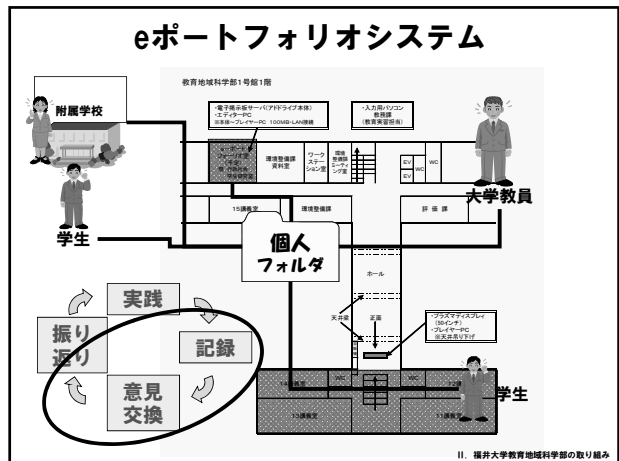
- ・探究ネットワーク
- ・ライフパートナー
- ・子ども放課後ボランティア



これらを含むものが、教育実践研究(10単位)


- ・e-ポートフォリオ(学生、研究者、院生、実務家、教員を結ぶ評価ネットワーク)

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み



(F) 大学の研究者の組織化(既存大学院の改革)

教材開発研究会の設置
現場の教師と大学の研究者を結ぶキーワードを「教材」とした教授会の後に60分程度の研究発表(月一回)年1回のワークショップ(院生とコラボレーション)



(G) 既存大学院のカリキュラム改革

知識基盤社会を生きるリテラシーを育てるために
⇒協働実践研究プロジェクトの導入
PISA型学力形成プロジェクトなど
プロジェクトI(調査・構想) プロジェクト連携先
プロジェクトII(実践と省察1)
プロジェクトIII(実践と省察2)
プロジェクトIV(報告書作成と公表)

(H) それぞれのセンターや教員の独自の取り組み

- ・総合自然教育センター
大学子ども開放プラン(農業体験、木工体験など)
- ・総合教育実践センター
子ども110番(大学教員、弁護士、医者、NPOなどコラボレーション)
キャリア形成ワークショップ(客員教員制度の活用)
- ・理数教員を中心のSPP

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

H19年度における理科教育力向上を目指した取り組み

1. SPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト)の活用
 - プログラムのコーディネート:中学校高校と3学部との連携
 - 学校との連携可能な理数系教員の発掘
 - 申請書の書ける現職教員の発掘
 - 学部生・院生のTA経験
 - 専門的な研究と学校教育の橋渡し
 - 専門的な知識および教育に関する動機付け
2. 福井県との連携:大学連携リーグ事業の活用
 - 大学等の空白地域への小学校理科教育支援と教材の提供
3. 教育委員会との連携:理科支援員事業への協力
 - 学生・院生の自主的参加・支援員(含一般)向け研修会の開催
 - 小学校から始まる実験を中心とした理科授業支援
 - 学生の力量向上

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

SPPを活用した4タイプの連携

大学(教・工)と3中学校



大学(教・医)と高校



大学(教・医)と中高一貫校



大学(教)と中学校科学部



福井大学教育地域科学部の取り組み

(G) 効果と評価

・ラウンドテーブル「実践し省察するコミュニティ」2008.3.1-2
—知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題—

・学生版ラウンドテーブル2008.3.15.-16



評価と省察のシステム

・e-ポートフォリオ

II. 福井大学教育地域科学部の取り組み

◆ ありがとうございます ◆

おわりに

平成 18 年度の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代 GP）に採択された三重大学教育学部の事業の 2 年目が終了した。現代 GP のテーマ「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」に付けられたサブテーマである「中学校区全域との連携による学校・地域活性化モデル及び幼小中大連携モデルの構築」という視点からみると、平成 18 年度の取組には、不十分さが残ったと言わざるをえないが、平成 19 年度は一身田校区の 5 校園（一身田中学校、一身田小学校、白塚小学校、栗真小学校、白塚幼稚園）のすべてと連携・協力の取組を展開することができた。これもひとえに一身田校区 5 校園の校園長をはじめとする教職員の皆様、津市教育委員会、三重大学教育学部の教職員のご支援、ご協力の賜物と感謝している。

平成 18 年度の報告書の「おわりに」において、「一般に、異なる伝統や慣習等を持ち、必ずしも同一でない諸課題を持って活動を進めている複数の組織が連携協力して諸事業を推進していくことには種々の困難が伴うものである。しかし、お互いが率直な意見、疑問を出し合いながら、お互いの立場、考え方を尊重しつつ、幼児・児童・生徒の健やかな成長、そして学生の教育のために、大局的に、粘り強く、取組を進めていかなければならないと考えている。」と書いたが、平成 19 年度は、その姿勢を堅持しつつ、諸活動を全面展開できたと考えている。

平成 20 年 2 月 27 日（水）の「第 2 回 フォーラム in 一身田」も約 140 名の参加者のもとに、盛会のうちに終了することができ、ここに平成 19 年度報告書をお届けすることができるようになったのも、一身田校区の 5 校園をはじめとする関係の諸組織、教職員等の皆様のおかげである。厚くお礼申し上げたい。

平成 20 年 1 月には、連携校である一身田校区の 5 校園の代表、津市教育委員会、三重大学教育学部の一身田校区連携推進委員会の委員等が集まって、一身田校区連絡協議会が開催され、取組の最終年度である平成 20 年度の取組について協議された。この協議にもとづいて、平成 20 年度の取組は一層の広がりや深まりを持ちつつ、現代 GP のテーマ・目的に向かって進められていくものと信じている。一身田校区連携推進委員会は、教育学部教職員及び 5 校園の教職員のご支援、ご協力を得ながら、諸活動を推進していく決意である。

三重大学教育学部・一身田校区連携推進委員会

平成 19 年度
現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）報告書
～教育実践力の育成と学校・地域の活性化～

平成 20 年 3 月 発行

編集 三重大学教育学部・一身田校区連携推進協議会

発行 三重大学教育学部

〒514-8507 津市栗真町屋町 1577

TEL : 059-231-9347

FAX : 059-231-9352

現代 GP ホームページ : <http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp/>

印刷 合資会社 黒川印刷

〒514-0008 津市上浜町 2-11

TEL : 059-226-4877

FAX : 059-226-4889

E-mail : kero@ztv.ne.jp